

永正七年六月六日

七三四

玉ゆらの暫事也、又露おももとの不可申露をおももとの可有沙汰云々

慈鎮

卷ノのあはせるひもれまゆらもたもての佛よろこひみけり

以上、長松軒物語之由傳聞之間、住之者也、宗長宗匠令存知歟之由申體在之間、内々相尋候處、此三人之外、無之由申云々、私不審之近代事歟、重而可尋之、

一なてしこやこの國より花のた糸 兼載

一露にこよひ枕ならふる小萩哉 兼載

一ちりやまを花にかくほ、嵐うな 兼載

著書

〔園塵〕 三

〔文龜〕本云、壬戌臘月末注之、耻外見者也、 兼載

〔うす花さくら〕

明應元年壬子仲秋日、依（編輯成之）或嚴命、白地注之、耻外見云々、

法橋兼載在判

源直朝兼  
載シノ墓ニ  
詠テ

墓

〔桂林集〕 雜

兼載法師の墓所の、古河の北野和田といふ所に有、里人に、ひりせり、是なんその塚なりといふ、くさ深く葎とちて露分る人もみ、裏さりしに、そのかまの（新説カ）新苑玖波集などの有るおと、もおもひ出さ、

〔許我志〕 五

一曹洞禪宗 武州成田 下野國都賀郡小山莊屬中郷野渡村  
龍淵寺末、 西光山満福寺

一連歌師兼載翁の墳櫻一株あり、句櫻といふ、前二碑あり、

中廣キ所ニテ二尺計、  
高サ三尺五寸ホド、

永正七庚午六月六日卒

耕閑軒法橋兼載翁墳

花ちりて名のみ

法橋兼載

文化末年己巳三百回忌  
ニ當レリ、正定寺住持ノ  
建ル所也ト云、

〔墓所一覽遺編〕

猪苗代兼載 宗祇門人、平姓猪苗代式部大輔某之男也、  
號耕閑齋、又相周坊、永正七庚午六月六日歿、葬于下野古河野渡村万福寺、

永正七年六月六日

七三五



永正七年六月六日

七三六

○兼載ヲ連歌會所奉行ト爲サル、コト、延徳元年十二月十八日ノ條ニ、相良爲續、宗祇及ビ兼載ヲシテ、自作ノ連歌草子ニ點セシムルコト、明應四年二月二十二日ノ條ニ、兼載ヲシテ、後柏原天皇御製連歌ニ批點セシメラル、コト、同六年正月二十九日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔花押彙纂〕

部イ之

猪苗代兼載



○大口鯛二氏舊藏文書  
五月四日書狀

〔花押拾遺〕

信



〔墨海山筆〕

九四十

兼載法橋傳

兼載法橋、奥州猪苗代に産れし人にて、其父、猪苗代式部少輔盛實とそいひたる、氏と平とて、三浦介より出て、二三世あるを、若し時より、おのゝ心乃すむと、いひなうら、さるへき契とや、武士の家を出て、ひさふるは世捨人となりて、彼岸よのそみをあけさりに、法の橋守ゆるされて、渡りよし後、文を常たわさとして、應仁、文明の比ると、(よか)珠玉菴宗祇老人よつきて、筑波山の道は心をぬ、佐保川の水乃底をかきまし、りを結ひたるより、其名高く聞へて、老葉、下草此二集宗祇のやまらなる姿よとあらで、是は又、人のおもひよるまじき、あやしくめつらなるぬし、をいひ出し、上手なりたり、其句をも自あつたて、園蔭と名けける集あり、祇公に繼て、北野會所の別當ふなされし時、いつの年の事よ、正月五日にその所よて、

々ふむらく梅と千と世のうはしる歌

これよりして、あけまくもかしこき時のみあるの御製をも下し、あがりたる事よなとて、慈照院を常よめして、宗匠となされ、道の事をうつねし、

永正七年六月六日

七三七

世塵ヲ捨

宗祇ノ門  
ニ入ル

句集園蔭

義政連歌  
ノ道ヲ問



作句ヲ新  
撰菟波  
集ニ加ヘ  
ラル  
宗祇第一  
以テ弟子  
任ズ

白河關近  
傍ニ耕閑  
齋ヲ營ミ  
テ住ス  
相園坊ト  
モ云フ

下野萬福  
寺ニ葬ル  
櫻ヲ植エ  
ス  
墓標ト

母天神ニ  
祈リテ兼  
載テ生ム  
自在院ノ  
僧ト爲ル  
テ秀句ヲ  
妬マル

永正七年六月六日

七三八

さ万ひらると歌ん、花鬘風之何ある御代よあひ、柳營露こまやあ  
なる惠をうけし人よてこそ侍りしう、又古今集のうち傳へある事、おや  
やけよもおもき事なる哉、和歌所の法印堯孝よ、堯惠よつさへしを、堯惠  
よ、此法橋の陸さへうけられたる、明應の比、勅撰よ准らへられて、珠玉庵  
主の新つくは集をえられし中よも、人よ増りて數多の句、汝加られたる  
と、此道のほまれ、その世よさへあらわれしゆへなるへし、祇公の弟子のな  
うよ、いつれうすくせざる、ある人のとひ万いらせしよ、みくき口つきな  
れと、兼載とこさへられたる、略、中、あくる後年や、老ゆきしよより、  
都れうよひもものうくやおもひ終らん、さすあよ又生れし國や忘せうよ  
かりらん、白河の關ちうきやとりよ菴をむまひ、そこを耕閑齋とよひ、又相  
園坊と名つけて、十とせあまりや住馴さ万ぬらん、永正六年秋のあろ、宗  
長法師去る人のさより有て、下毛國佐野のあよりきて下られたる時、下總  
國古河といへる所よ、兼載法橋出られしよしを聞え、吹うふ風もやとちり  
き道かれの、文をくられせしよ、手ぬるひ物うく事安うらほと返事せら  
れしと、柴屋の主日記に去るし置れし、此程の事にや有らん、宗長東路へ  
土産よ

り、中風わつらひとせめて、あしのことこひも心まゝならぬ哉、あらうして古  
河といふ所に住る江春庵とて、關東乃名醫あり、そのうよにて、療治せられ  
しと、去るしやあらさりらん、同七年六月六日、此病にありて、終に此所  
にして身まあられしを、ほとちあき北野和田村萬福寺におさめて、ありし  
世の遺言なりとて、墓の去るし、櫻をうへなとせし跡、今に猶むあし忘れ  
ま、花も咲侍るとなん、その塚の草ぬあく、葎閉て、露分る人も見へさりしよ、  
そのうよ新つくと集、此事などおもひつゝけて、  
つくと山しなきと葉の花の露苔の下よもむうりまゆらん  
と、源直朝臣乃桂林集よ見へしも、あられある昔ありありし、

昌成記

弘化四丁未年臘月合寫之

櫻處閑人

〔會津舊事雜考〕

五

應仁年己未

文明元年

凡例 此頃猪苗代小出方村主石部丹後之宅有一醜女、壯歲無偶、祈于邑菅神廟、夢  
異人投梅花一朵於左袂了、妊、足十三月産、後花本兼裁是也、幼穎異也、薙髮爲  
自在院僧、惟嗜倭詠、祈福於住吉社、其神今吉也也、屢望連歌之席、以句秀多被妬、

永正七年六月六日

七三九



宗祇ノ門  
人ト爲ル  
葦名盛舜  
ニ請ヒ平  
姓ヲ稱ス  
花本ノ讓  
ヲ受ク

兼載天神

永正七年六月六日

七四〇

憤入洛、謁崇祇、博涉經史、能連歌、祇欲令嗣業問氏、請平姓於葦名遠江守盛舜、而稱其族了、受祇讓、住花本、其有兼栽稱者、嚮祈福於住吉社、故住吉松之詠云、有花本任之日發句、今朝比良俱梅波千歲、乃句哉云々、後來我有畫綿族、有嚮者始植礎於紅葉寄、後又拔換松哉、有與發句曰、松遠太天紅葉遠奴幾、乃錦哉、次終卷云、栽產弊邑、自登龍門神稱兼栽天神、邑曰小平瀉矣、傳云、曩雲水僧吮攝州須磨平瀉茶店於濁醪、戲曰、須來天飲古楚濁利沙喜奈連、時髣髴次聲曰、此浦波波荒計連波打古之天、顧無人、壁懸於一菅神畫象、僧怪乞主賣以用流、到茲有瑞、故祀焉、邑改小平瀉、因攝平瀉云、

〔垂加文集〕

上之 會津山水記

略○上 源賴朝卿封佐原義連於會城、義連之子盛連、盛連六子、太郎經連、○中 經連居猪城、經連子、長曰經泰、仲曰赤房、季曰義泰、各城于此、因爲今名、林樹森森、處有八幡宮、三子相謀、自鶴岡勸請焉、歷茲以往七浦、曰真行焉、烏帽小屋焉、蜂屋布焉、百目貫焉、相名目焉、新家焉、牛沼焉、已東曰松橋、曰小平瀉、元名小出瀉、此有松原、東西一里餘、圍三里許、松樹千年之綠、砂石萬古之明、風流瀟灑、絕一點之塵、昔人自攝州之平瀉、携菅公畫像來、奉祠林之東畔、出瀉之爲平瀉、記神

小平瀉村

兼載ノ號  
ハ慈鎮ノ  
詠ニ因ル  
トノ説

兼載天神  
緣起

像之出處也、祠側有梅、華于幹、故名身木梅、水濱秀孤松、其根拔出、隨波低昂、故呼根揚松、非常之松、梅靈場之所愛也、兼栽之母、祈於茲而生栽、栽長嗜歌學、亦禱于此、求成就之、後從宗祇學、遂爲連歌之宗匠、爾來稱之兼栽天神、或曰、此松原恰如移住吉也、兼栽之號、因慈鎮之詠矣、○下

〔磐城誌料〕

三 神社緣起類篇

兼載天神緣起

陸奥國磐前郡大館城西寺中所在之菅廟、法橋兼載所創立之祠也、初在道場小路、今爲諸士宅地、延寶六年戊午、移城西寺、此時同移菅廟于大館、今之廟處是也、菅公姓菅原、諱道真、字三、其先出自天穗日命、父從三位是善、世侍經筵、爲文章博士、母伴氏、仁明帝承和十二年乙丑生、自幼受父祖之學業、博覽多聞、人品甚高、以禮法自持、雅能詩賦、文章及和歌、當時以爲儒宗、延喜元年辛酉、菅公年五十七、遭世罔極、爲姦臣時平所讒、止右大臣、左遷大宰權帥、讒諂之蔽明也、邪曲之害公也、可勝嘆而已、三年癸亥二月二十五日、菅公薨于貶所、年五十九、葬四堂邊、今宰府神廟之地是也、五年乙丑八月十九日、筑紫安樂寺始建菅公之神殿、味酒安行掌經營之事、是崇菅神之始也、凡尙文學仰儒風者、莫不尊信也、兼載者、陸奥人、姓平、其先出自三浦介、父式部少輔盛實、兼載從壯歲好連歌、花鳥

永正七年六月六日

七四一



草庵ヲ磐  
城城西寺  
ノ側ニ結  
ブ

兼載ノ名  
ニツイテ  
ノ考

猪苗代氏  
源氏物語  
ノ讀ミ様

吉良第二  
行フ組  
始手組

永正七年六月六日

七四二

雪月江山風雲之景皆以遣興慈照院義政授之宗匠後土御門帝後柏原帝御製之連歌兼載奉勅進批點者數矣曾以閑耕爲號值其吟哦而鍛鍊安排殊無他想此是閑也播和語之種于心地慨言藻之苗于硯田此是耕也宗祇亦同時之先輩也凡古今集之傳授好和歌翫連歌之徒以爲極致法印堯孝傳之堯惠々々傳之兼載兼載往來于京師于關東素尊崇菅神嘗結草菴于磐城城西寺之側而居焉平生以尊崇之故立祠而奠焉植梅以供焉故稱之兼載天神相尋雖加修補物換星移祠堂垂壞梅亦枯矣有株今尙存從是數年之前代植以紅梅神之愛之也花容爛漫香氣異他矣磐城城主能州刺史藤義孝君有崇聖神之德重文武之道制節謹度繼絕舉廢之政以愛人民且傷菅廟之傾敗今茲寶永丙戌春三月越撰良辰乃命工吏改作廟宇興再營之功冀神之歆之護邦家泰士民繁榮

或有作兼載蓋取諸慈鎮和尚之詠而名焉歌曰君加代爾兼天裁計留住吉乃松吹風能須惠毛波留計之

願夫不然今見兼載有自作答岩城次郎殿之書皆作載加旃詠之和歌自記兼載筆跡顯然以是觀之後世好事者傳會慈鎮之歌而作載矣不取可也

〔橘窓自語〕

二 連歌師猪苗代氏家に源氏物語をよむ時小初子此卷よりよそとしむるなりこれは桐壺此卷よりうれいしきとのある故なり明星抄此説も初子よりよむ事ありと覺ゆ

七日卯辛幕府、祇園社ニ神馬ヲ寄進ス、

〔建内文書〕

二十 祇園社爲祭祀御神馬一疋鶴毛印可牽進之由所被仰下也仍執達如件

永正七年六月七日

伊勢守(花押)

祇園社御師

十二日丙申幕府、犬追物ヲ興行ス、

〔伊勢家書〕

七十後鑑二百七十五所載 始 犬追物手組事 於吉良殿御所御馬場御座

細川右馬頭 八疋 伊勢兵庫助 五疋

小笠原六郎 十六疋 伊勢次郎 廿二疋

伊勢左京亮 六疋 種村三郎

宮上野介 十疋 伊勢右京亮

永正七年六月七日 十二日

七四三



永正七年六月十二日

畠山式部少輔 十三疋

檢見

伊勢貞陸

伊勢守

永正七年六月十二日 日記付伊勢六郎左衛門尉再拜朝日本

後 犬追物手組事

右京大夫 十疋

畠山式部少輔 六疋

伊勢守 四疋

伊勢右京亮 十五疋

伊勢兵庫助 八疋

宮上野介 四疋

小笠原六郎 十七疋

伊勢次郎 十七疋

伊勢左京亮 七疋

種村三郎 七疋

細川右馬頭 五疋

檢見

喚次

義興 檢見大内

大内左京大夫

永正七年六月十二日 日記同前 再拜同前

○六月二十五日、伊勢貞陸、犬追物ヲ興行スルコト、便宜左ニ合致ス、

伊勢貞陸 犬追物ヲ興行ス

十四日、祇園御靈會、

〔實隆公記〕

二十四 六月廿五日、己酉、晴、○中

祇園御靈會、及晚神輿渡、有小喧嘩事云々、陶被官被打擲之間、令切腹、開闔進

退迷惑之由、有謳歌、

十四日、戊戌、晴、○中

今日祇園會也、大典侍、勾當内侍等、被向曇花院云々、甘黄以下參入云々、

京都金蓮寺住持淨阿二上人號ヲ賜フ、

〔金蓮寺文書〕

○山城 八王百五代後柏原帝

奉祈聖運長久可專佛法興隆者、天氣如此、悉之以狀、

永正七年六月十四日

淨阿上人御房

右少辨花押

繪旨 聖運ノ長シクヲ祈ラル

神輿渡 喧嘩

永正七年六月十四日



許上人號勅

淨阿實隆  
贈物ヲ  
實隆萬里  
小路秀房  
實隆繪旨  
及ビ目錄  
ヲ書ス

十五日薨  
去セラル  
トノ説

永正七年六月十六日

〔實隆公記〕

四〇 六月十四日、戊戌、晴、略中

四條上人號繪旨事申沙汰之、今日勅許、秀房則書送一通者也、

十五日、己亥、晴、入夜雨、略中、四條上人號事、一通遣北政所方、彼所望事也、爲後  
鑒且續之、

十八日、壬寅、略中

四條道場上人禮物到來、則遣萬里小路者也、

廿一日、乙巳、略中、四條道場金蓮寺上人扇十帖被送之、代々繪旨花園院々、目錄、  
故親長卿書之、兩三度分子可書加之由所望間、書遣了、

十六日、庚子、聖護院門跡道應法親王薨ス、

〔後法成寺尙通公記〕

四〇 六月十六日、庚晴、

今朝、聖門他界事、言語道斷之次第也、此間不例云々

〔實隆公記〕

二〇 六月十七日、辛丑、略中

護院宮、去十五日入滅之由、今日有風聞、四十四歳云々、去カ四月廿五日給消  
息、其後無音也、驚歎周章此事也、

十九日、癸卯、雨降、略中

邦高親王  
御書狀

聖護院事、弔竹園了、

〔實隆公記〕

一〇 永正七年七月  
十三日、裏文書

昨日の御法樂の御會、御捨うしく存候、按察參候て、やうても物語申候つる、  
立秋の節、入て、いつしう昨日々ふの涼し、心ちして候、如何に、先日御  
書の趣奉候、御返事不申、其恐候、北野社連歌御會ノコト、抑聖門の事、言語  
道斷之、よて、いさしき申計も候はず候、一段心細候、去乍い、卅年のうりの、  
なうもあく生得へしと御得し候、善惡い、うと御得し候、御同心候  
哉、旁御隙、來臨を、おし入、いらせ候、事々短札、よつくしうさく候、うとく、  
廿四日、御題下され候、て、詠進候、て、無念の事候、

御返事

邦高

ふしとのへ、る

〔伏見宮御系譜〕

四代 貞常親王

道應法親王、後三、位、御孫子山檢、後、土、御門院、天皇御、子、聖護院入室、寺、長、吏、三、

〔皇親系〕

七

永正七年六月十六日

七四七

御世系  
後土御門  
天皇ノ御  
猶子ノ御  
初ノ御法  
名興譽

七四六



永正七年六月十八日

後土御門院天皇

道應親王

後子興峰  
ト改ム  
大吉祥院  
ト號ス

同上第八子、爲天皇猶子、落飾爲僧、名興譽、住聖護院、改興峰、尋改今名、文龜四年二月二十日爲親王、薨後號曰大吉祥院、

〔華頂要略〕

百四十三

諸門跡傳四

無品

道應法親王

後土御門院御猶子、伏見

有卿

始諱興譽、三山檢校、三井長吏、新熊野檢校、大吉祥院、箕面山主務、文龜

四年二月廿日親王宣下、四十三歲而寂、年月不詳、

〔聖護院道應法親王短冊〕

○山城妙心寺塔頭桂春院所藏

御筆蹟

聖護院道應法親王短冊  
山城妙心寺塔頭桂春院所藏

○道應親王宣下ノコト、元年二月二十二日ノ條ニ見ユ、  
十八日、<sup>王</sup>毛利興元、坪井元定ヲシテ、安藝西條能力名ノ地ヲ知行セシム、

〔萩藩閥閥録〕

百三十九

坪井左兵衛  
西條寺町之内能力名參段爲給所遣候、知行可仕候也、仍狀如件、

永正七年六月十八日

興元御判

坪井新四郎とのへ

〔萩藩閥閥録〕

百三十九

興元御判

西條寺町之内これ吉名八段爲給所宛行之者也、可存其旨之狀如件、

永正七年庚午十一月十一日

興元御判

坪井新四郎とのへ

十九日、<sup>癸</sup>幕府、柳本某ヲシテ、山城松尾社領丹波雀部莊内東禪寺分ヲ社家ニ安堵セシム、

〔東文書〕

○三

山城

松尾社領丹波國雀部庄内東禪寺分事、勤日供以下嚴重神役之處、依押妨既及闕怠云々、太不可然、不日退其妨、可被全社家直務之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正七年六月十九日

貞運

長秀○連署兩名ノ花

永正七年六月十九日

七四九

押妨ニ依  
リ神役闕  
意ス



二十日辰、甲是ヨリ先、上杉顯定、同定實ノ兩黨、越後ニ爭フ、是日、顯定、定實ノ老臣長尾爲景ト、同國長森原ニ戰ヒテ敗死ス、

〔實隆公記〕四十 四月十二日、丁酉、雨降、中神餘來、越後事、上杉四郎入道可諄先以在國、牢人未入國之由等語之、

國亂平定  
セザレバ  
公用ヲ納  
メ難シ

廿九日、甲寅、陰晴、自天王寺光康男上洛、中越後國無靜謐者、公用難進之由、申切之、雖存内之事、歎息而已、

牢人越後  
ニ切入ル

六月六日、庚寅、陰、時々雨濺、中宗碩法師來、越後國牢人切入之由語之、岩城高名事等語之、

〔實隆公記〕四十 七月十日、甲子、晴、夕立雷鳴、中

神餘來、越後事已落居、可諄切腹云々、生年五十七歲、自十四歲爲關東之上杉、今又如此、不便事也、但國靜謐之基珍重也、

越後靜謐  
ノ基

〔歷代古案〕三

去三日之書狀同七日到來、再三披見、抑伊勢宗瑞至于武州出張、既柵田自落、上杉朝良ヲ援ケルコト、元九年九月二十七日ノ條ニ見ユ、無人數之間、不可

顯定書狀  
伊勢宗瑞  
ス武藏ヲ侵

拘之段、兼日議定故、普請等及五六年止之間、城主由井移候歟、然間彼地翌日指懸之處、出合、遂矢師、數多打捕、由令注進旨、雖不始事、石井帶刀左衛門尉、勸神妙候定、而可爲同意候事、

足利義明  
宗瑞ニ應ズ

一、雪下殿御造意、連續當太田之庄火ノ手見、候歟、公方様被對當方無御餘儀之所、如斯之御働、被顯御變心之上者、不及力次第、候、老拙不存無沙汰之處、佞人ニ紛故、慮外之御擬、旁以天道ニ被相背上者、爭可被免候哉、

一、大上様上意不相替、累年上豹德齋并成田（圖卷）下總守如申越者、社家衆露御色候者、御發向御議定、依之下總守方、御書次、築田大炊助書狀、越候、如斯上者、不可有御別條之間、御動座之事、申上候者、尤同名中、其相談馳向宗瑞、可被遂一戰之段、可爲大感候、連々出語此時候、

一、鉢形、忍兩城堅固、專一之由、候、此一儀、專申遣候、治部少輔入道建芳毛頭、無疎略、定、而可有其間、當國進發之砌、互ニ露神名、以自筆成誓書、故候、是又、可心安候、孫太郎出陣之事、頻催促、太田大和守度々折簡來候、顯方諸、每可申合候段、伊玄方參陣之一揆中、如書中者、帶刀左衛門尉、號物詣馳候、一點、不知之由、斷而載誓詞候、就而去、七日夜、中令自火、伊玄退之趣、方々ノ說同、

武藏ノ形  
勢



永正七年六月二十日

七五二

前二候、半信半疑候、事實候者、落所以夜繼日可被申越候、

一當國凶事連續付而、參陣之儀、候歟、然而雪下殿御企無紛故、見合遅々、同名掃部助可被下之處、宗瑞出張之間、延引得其意候、

一相背伊玄、帶刀左衛門尉石田一類、津久井山ニ移リ、宗瑞一味候哉、如詞先段、伊玄進退同前之様聞候、不思儀之次第、於同名中、老中爲不憚身一代兩度之不儀、併當方并名字中、時節到來迄候、如何覺悟候哉、

足利高基  
關宿ニ移

一御方御所様連々御退屈故、關宿ニ被移御座候歟、言宣不及候、被對當方、始末不可有御等閑之段、被載御誓詞御書、至于今兩年度々拜領、各所御同前雖平人身上候、爭可默候哉、况關東之主君被拋御誓詞、被求禍亂、社家於被與者、何ケテ不入處候、但日月光不消者、一度其効可有之歟、世上此願迄ニ

候、○高基、父政氏ト和セズ、下總關宿

一上條彌五郎相馳砌、寺泊要害爲始、長茂張陣之衆被除以來、各屋敷打明候

爲景寺泊  
憲房陣ヲ  
樵谷ニ進  
長尾房景  
ヲ藏王堂

之間、同名六郎至于寺泊出張、先衆號樵屋山地執陣間、一昨日、憲房被及近陣候、然而平五郎上州一揆相重軍不可延、勝利不可疑、去六日、於藏王堂、同名彌四郎遂一戰、六郎傍輩被官宗徒者百余人討捕驗到來不知數、殘黨

阿賀川以  
南多ク顯  
定ニ歸ス

顯定爲景  
散テ泊退  
シテ歸國セ

永正七年六月十二日

可諄

〔武家事紀〕

四三十

略○上 抑去六月十二日、於樵屋一戰、失利候、所存之外候、然處長尾六郎、高梨攝

津守競來候間、同日遂一戰、可諄討死、不及申次第候、樵屋一戰之後者、妻有

之庄ニ其立馬候、國中如此之上者、力不及、關東エ入馬、白井ニ候處、○中略、長

フ景ニ應ジ、上杉憲房等ト武藏權現山ニ戰、將亦長尾六郎非殺民部大輔房

能耳、○房能爲景ト戰、越後天水ニ自殺、重而可諄身體如斯之條、爲家郎亡

兩代之主人候事、天下無比類題目候歟、○中略、全文ハ、八月三日、上杉憲房、爲

永正七年六月二十日

七五三

爲景二代  
主ヲ滅ス

上野ニ退

上杉憲房  
書狀  
高梨政盛  
顯定ヲ破



永正七年六月二十日

收

八月三日

拜呈 上乘院 御同宿中

(上杉) 藤原憲房在判

七五四

義尹内書  
越後錯亂  
ニツキ定  
實ニ下知  
ス

〔御内書案〕 乾

就今度分國錯亂之儀、爲下知禮、太刀一腰、盛光馬一疋、鹿毛到來、神妙候、仍太刀一振、長光繪二幅、牛李盆一枚、堆紅遣之候也、

十一月廿一日

(金書) 上杉兵庫頭とのへ

〔松平基則氏所藏文書〕

又いな得への通路まうとせうれ候の、可然候、返々此儀專一候、就可諄討死、雪下殿重而可被招、可諄儀定候、稻穂之事、堅固候者、凶事可爲必定候、いふんと覺悟候哉、此度之忠信可爲專一候、仍間之事、不附而、結城令申旨趣、誠以異外候、委細同名大膳大夫可令對談候、うしく、

(足利) 政氏

(小山高朝之) 下野守殿

足利政氏  
書狀

山内殿下  
號ス

〔諸寺過去帳〕 上

東寺過去帳拔書

上杉可諄入道、關東八ヶ國管領、并越後守護、號山内殿、

〔本土寺過去帳〕 中

廿日

越後國關山ニテ薨去、(卷)武湯官領、可准尊靈、申西尅、打死、庚午、六月、

〔妙法寺記〕 永正七年庚午

略○上 此年、クワソソレイ越後ニテ、長尾ノ六郎ニ打タレ玉フ也、

〔新撰和漢合圖〕 庚午、永正七六廿、上杉可諄於越後討死、

〔相州兵亂記〕 二 可諄討死之事

明ル永正七年六月十二日、越後ノ一揆トモ、高梨攝津守ヲ大將トシテ、爲景ニカタラハレテ、悉ク蜂起シケレハ、憲房、椎屋ト云處へ、押寄責玉ヒケルカ、忽ニ打負テ、憲房妻有ノ庄ニ引籠リ、猶軍勢ヲ催シ、上州ノ勢ヲ待テ、彼レヲ對治アルヘシト宣フ處ニ、長尾、高梨勝ホコリタル威勢ナリシカハ、少モタメラフヘキ、則打立押寄ケレハ、同六月廿日、顯定入道長森原へ、出合散々ニ戰、長尾六郎ヲ追立ケル處ニ、高梨攝津守馳來テ、顯定ヲ討取申ケル、此人ハ上杉家中興ノ管領ニテ、十四歳ニテ上州ニ來リ、久シク武將トアヲカレ、今

永正七年六月二十日

七五五

關山ニテ  
死ストノ  
說

越後一揆  
爲景ニ語  
ヲハレテ  
起ル

政盛顯定  
ヲ討取ル  
上杉家中  
興ノ管領



永正七年六月二十日

七五六

憲房上野  
白井城ニ  
退ク

年五十七歳トキコエシ、法名ハ可諱大居士ト申ケル、ヤミヤミト高梨ニ討レ玉フ、故ニ長尾カ勢雲霞ノ如ク集リシカハ、憲房越後ノ在國不叶シテ、上州へ歸リ、白井ノ城ニ籠リケル、○上略

〔鎌倉九代後記〕

政氏成氏男、左馬頭

同七年六月十二日

越後ノ一揆蜂起、高梨攝津守大將トシテ、爲景ニ一味ス、憲房同國椎屋へヨセテ是ヲ攻ム、憲房戰負

テ妻有庄ニ引籠リ、上州ノ加勢ヲ待ツ、長尾高梨勝ニ乗ル、同月廿日、顯定長森原へ出張相戰フ、長尾敗軍ストイヘ、高梨進ミカ、ツテ、遂ニ顯定討死

ス、年十五憲房ハ越後ノ在國叶ハスシテ、上州へ歸陣、白井城ニ籠ル、○下略

〔北條五代記〕

三

兩上杉と平氏茂戰ひの事

伊勢守

顯定ハ、越中ノ長尾六郎爲景と合戰シ、討まけ敗北シ、越後と信濃のさゝひ、

長森原にて、永正七年六月廿日、高梨より得され、あまて顯定遺言よりよつ

て、足利成氏古河ハ若君關東官領として鉢形より移り、顯實と號せ、○上略

〔鎌倉管領九代記〕

六

上杉顯定入道討死

民部太輔顯定入道可諱、同子息五郎憲房ハ、年をこえて在國シ、制法法よく、れこあひ、今度長尾爲景より一味して、管領房能を打ふる輩を、尋手捜し召出

顯定房能  
ノ爲メニ  
復讐セン  
トス

上杉顯實  
管領ト爲ル

政盛房能  
ヲ恨ミ高  
景ニ屬シ  
テ房能ヲ  
討ツ

椎屋ニ籠ル

顯定椎屋  
ヲ攻ム

して、或ハ所帯を沒收して、郡内を追放し、或ハ捕へて首を刎らせしりは、國中遠近ハ諸侍、其身を隠しり多、妻子を引つきて、或ハ山ふりく分入、或ハ他國に逃行せるや、國郡さゝひ立て、上下手足を空まかして、易き心もあらずなり、高梨攝津守も、上杉房能より恨むる事あき、長尾六郎より一味し、房能を打ふるなる張本なり、いりにもして生捕、くひを切らけ、宿意を達せんと、さうらのむれ、高梨いよくいきとをりて、國中よりあくれ居る餘黨をうらひ、七百よ騎同意して、椎屋ノ城に楯こもり、近隣を放火し、兵糧をうとひ取て、壁を堅くし、壘を深くして、寄敵を待らけ、民部太輔顯定入道可諱、同子息五郎憲房、これを責ゆる得さんとて、國中ハ人數招らるゝといへども、長尾同意ハ刑罰をつよくおこめ、其一族親類とも、所縁ハ付て恨を深くして、一人も參らざり、たれ之力及らば、手勢のうりを引卒して、○永正同七年六月十二日、椎屋ノ城に押寄、逆茂木を引のき責いらんとせし、ろハ、城中ハ兵二百餘騎、木戸をひらきて打て出つゝ、短兵急ハ挫かし、ろんと、四角八方に懸立し、ろハ、よせて泳え、はして崩立、我先より落行、たれハ、顯定入道父子ノ旗本ひらきあひき、佐将より打負て、妻有ノ庄より引退をき、

永正七年六月二十日

七五七



猶上刃の軍勢を待て、重て退治をへしと評議をらふ處、長尾高梨城を拂て打出りれり、近邊の勇士馳加て、一千二百よ騎に成て、をし懸ると聞えしり、顯定入道とつうに八百よ騎、長森原へ出向ふて長尾六郎や五百よ騎を、立足もなく追くつし、備を立直さんとする所、高梨や七百よ騎、横合に打て懸り、あら手をもつて切立しり、上杉の軍兵、散々打あされ、裏よとくつきて落行りれり、高梨勝も乘て真先よす、大將乃旗本よ打て懸る、顯定入道可諄り、長刀をどりのへ、高梨も向ひ給ふ、攝津守馬より飛下て、顯定に引組、頓て首を搔よきる、鋒よ控らぬき指上て、上杉顯定入道を高梨攝津守討とりとて喚よき、上杉乃軍兵の力を落して四方に散亂せ、思ひくお落て行、長尾の勢いさ懸り、逃るを追控先控き寄せ切さをし、勝時を作て追立しり、日まて暮々れり、みかた歸り、陣をとへ、備をうと免、まゆりに引て、本城よ入ふける、彼顯定の、上杉中興乃管領として、生年十四歳、初めて上刃に來り給ひ、久しを武將乃職に居て、威を萬人乃上よ耀かし給ふといへ共、運命乃盡ふ所、たちまち高梨か手ふかゝと、聞々と討て、亡郷無頼乃鬼とあり、骸を曠野乃草根に委して、恨を千

政盛顯定ノ首級ヲ擧ケ

歳の若れ下ふのこし給ふといふしき、今年五十七歳、法名は可諄大居士とを號しける。

〔足利季世記〕 二 義晴御誕生之事

○上略、爲景、上杉定實ヲ奉じ、越中西濱ニ走ル、信濃ノ高梨攝津守、爲景ニカコトニカ、ル、六年七月二十八日ノ條ニ收ム、  
タラハレ、越後エ打越、椎屋ノ合戦ニ打勝、顯定ヲ打取シカハ、憲房不叶、上州エ歸リケリ、此由京都エ注進ス、洛中逆亂イマタシツマラサルニ、又諸國モカク亂レケリ、○下

京都及ビ地方共ニ亂ル

〔關東管領記〕 七〇後鑑二百 七年ノ夏、高梨攝津守先亡ノ殘徒ヲ集メ、七百

餘騎ニテ椎屋城ニ楯籠ル、所々ニ火ヲ放テ、兵糧ヲ亂妨ス、顯定、憲房大ニ怒テ、爲追討、國中ノ士ヲ催サル、ト雖モ、苛政ヲ怨ミテ、一人モ不來從、雖然、手勢纔ニ百騎計、同六月廿二日、椎屋城ヲ攻ル、城兵貳百騎及合戦ノ處ニ、顯定父子軍ニ打負テ、妻有庄へ引退テ、猶上州ノ勢ヲ招キ、暫時令逗留處ニ、爲景竝ニ高梨攝津守、椎屋ヲ拂テ、千二百騎大軍ヲ將テ押寄ス、顯定出向テ、同國長森原ニ於テ合戦ス、顯定入道可諄、長刀ヲ持テ、敵兵ニ切懸ル處ニ、高梨攝津守馬ヲ駈寄、組テ落、終ニ顯定ヲ討取ル、上杉勢悉ク敗北ス、顯定今年五十



上杉家中  
興ノ名將  
憲房平井  
ニ歸ル  
長尾景春  
憲房ニ敵  
對ス

永正七年六月二十日

七六〇

七歲、上杉中興ノ名將、今日不量ノ討死、諸人惜之云々、長尾高梨カ威勢國中ニ振フ、猶憲房ヲ討ント議ス、於是憲房越後ヲ引取、上州ニ歸陣、平井ニ在城、是當時管領職也、于時上州ノ住人長尾四郎右衛門景春入道伊玄等、爲景同苗タルニ依テ、別心ノ色ヲ立テ、當國沼田ノ庄ニ陣取、上杉ニ敵對ス、伊玄入道カ近親三戸駿河守、太田備中守等色々諫言スレ、入道不用シテ謀叛スト云々、

〔長尾正統系圖〕

景春四郎右衛門 永正七年六月十二日、信濃乃一家 登示始者孫四郎

合、爲景越後江來天 管領父子登合戰 顯定乃軍破 禮天高梨仁 討禮玉 尾那

波系圖、雙林寺傳記異事ナシ、

〔上杉系圖大槪〕

四郎顯定、越後國守護、相模守房定實子、法名可諱、道號告峯、

號海龍寺殿、爲房顯養子、應仁元年丁亥任管領、永正七年六月廿日、於越州長森原合戰討死、年五十七、

〔羽前米澤上杉家譜〕

房顯

顯定民部大輔相模守可諱

房定ノ子  
皓峰海龍  
寺殿ト號  
ス

世系

管領ニ任  
ズ山内家ヲ  
繼グ

上杉定正  
ト争フ

顯實或ハ顯好ニ作ル、四郎實ハ古河政氏弟、顯定ノ養子ト爲リ、管領職ヲ繼ク、

憲房五郎、民部大輔、實ハ周長子、顯定ノ養子ト爲ル、

定憲實ハ十郎、定明ノ家督ヲ繼グ、

顯定 實ハ民部大輔房定ノ子、房顯ノ養子ト爲ル、房顯戰死後、關東大ニ亂

ル、顯定來テ之レヲ平ラク、關東漸ヤク定マル、應仁元年、管領ニ任シ、山内

家ヲ續キ、城ヲ上州平井ニ築テ、以テ八州ヲ指揮ス、此ノ時扇谷修理大夫

定正カ家老太田道真實傳及ヒ子道灌謀略アリ、士衆ヲ招懷ス、關東ノ諸家多

ク之レニ屬ス、是ニ於テ、定正威權日ニ大ナリ、顯定ト抗衡ス、文明三年、顯

定古河ヲ攻ム、成氏敗走シ、千葉ニ入ル、同十年、成氏ト和ス、成氏古河ニ歸

ル、扇谷定正カ家臣長尾景春入道伊玄驕奢、太田道灌之レヲ黜ケント請

フ、定正之レヲ許サス、既ニシテ景春反ス、定正之レヲ武州五十子ニ攻ム、

克タス、走テ鉢形城ニ入ル、兩上杉爭戰年有リ、顯定使ヒテ定正ニ遣ハシ、

二家各道灌、景春ヲ殺スヲ約ス、○景春、定正ニ背キ、顯定ノ部下ト爲ル、長

條ニ見ユ、文明十八年、定正道灌ヲ相州糟屋館ニ誘殺ス、顯定、定正カ謀中

永正七年六月二十日

七六一



永正七年六月二十日

七六二

ニ陥ルヲ喜ヒ、而シテ景春ヲ殺サス、定正大ニ怒ル、是ヨリ扇谷ノ兵威振ハス、長亨<sup>(孝)</sup>二年二月五日、顯定、定正ト相州實卷原ニ戰フ、同年六月十八日、顯定、定正及ヒ古河政氏ト相州須賀谷原ニ戰フ、同年十一月三日、兩上杉武州高見原ニ戰ヒ、又武州松山ニ戰フ、定正屢シハ敗レ、敢テ上州地ヲ侵サス、此ノ時勢州人北條早雲駿河ニ在リ、定正ト謀ヲ通シ、延徳年中、伊豆國ヲ攻掠ス、伊豆ハ顯定ノ領國ナリ、明應三年、早雲、顯定ト好シミヲ修メ、相州小田原城ヲ襲取ス、爾來早雲、兩上杉ト合戰年有リ、永正元年十月、顯定、越後ノ兵ヲ率ヒ、上杉朝良ヲ武州河越城ニ攻ム、同二年春、顯定、朝良ト和ス、顯定歸國ス、同四年八月、越後守護上杉房能、家臣長尾爲景ニ害セラ、顯定武州ニ在リ、之ヲ平ケント欲ス、同六年七月廿八日、越後ニ向フ、既ニシテ越中ニ至リ、爲景ト戰フ、爲景西濱ニ敗走ス、同七年、一揆勃起ス、七月廿日、顯定敗走シ、越後信濃境長森原ニ至リテ自殺ス、年五十七、

〔諸家系圖纂〕

十五上 山内

房顯 爲憲忠猶子、上杉四郎兵部少輔、母一色氏女、

顯定 四郎、民部大輔、右馬頭、

上杉朝良  
トノ關係

伊勢宗瑞  
伊豆ヲ攻  
掠ス

上杉房定  
ノ次男

關東ノ兵  
亂ヲ鎮ム

足利成氏  
ニ古河城  
ヲ攻ム

顯實 上杉四郎早世、永正十二年也、實古河公方源政氏男、

顯定 四郎、民部大輔、右馬頭、實越後上相相模守房定次男、房顯無子息、依之長尾景信迎之、令顯定繼家督、于時應仁元年也、此年任管領、年十四、初築平井城、移山内、永正七年六月廿日、爲長尾爲景對治、越後發向、雖得勝利、信州高梨蜂起於椎屋討死、康正年中、關東兵亂不止、顯定退治之、永正六年七月廿八日、長尾太郎爲景於越後謀反、顯定發向合戰、討勝、爲景同國西濱敗走、同七年、越州人一揆、顯定敗軍、同六月二十日、信州與越州堺於長森原、爲高梨討死、五十七、法名海龍寺可諱皓峰、

〔寛政重修諸家譜〕

七百四 上杉

房顯 四郎、兵部少輔、

顯定 四郎、民部大輔、相模守、實は相模守房定ノ二男、房顯の養子となる、

顯實 二男、民部大輔、實は足利左兵衛督成氏ノ養子となる、

憲房 五郎、民部大輔、實は僧周清の養子となる、

顯定 文正元年、遺領を繼、時十歳、應仁元年、關東の管領となり、あらふ上野國平井城を築て、關東八箇國を指揮す、文明三年、顯定古河城を攻て、お

永正七年六月二十日

七六三



成氏ト和  
ス

法號海藏  
寺ト號ス  
トノ説  
政盛  
戰勝ノ瑞  
相

永正七年六月二十日

七六四

をを拔、成氏近郷ニ出奔、十年、顯定、成氏と和解せふにより、成氏古河ホ  
かへば、これとし上杉定正扇谷と稱まと矛盾をよひ、遂に戰爭年を歴てや  
ま、永正二年、定正か子朝良と和睦し、國にかへば、四年、越後國をいて、  
長尾爲景叛し、顯定か弟民部大輔房能を殺す、七年、顯定かの地ニ發向し、  
爲景を討て、おを敗り、一時勝利を得るといふを、一揆等かため敗  
走し、四月二十日、同國長森原にいて討死、寛永宅間系圖、寛正七年  
二月十二日、五十子陣、卒  
と混す、今系圖ニ云ふ、房顯、傳年五十七、可諱告峰海藏寺と號す、

〔諸家系圖纂〕

七之二

政盛

攝津守、刑部大輔、永正十年四月廿七  
日卒、法名晴雲、高賢居士、五十八歳

同七年

六月十二日、越後國一揆共中ニ打出、其刻政盛氏神若宮八幡ニ參詣、拜殿ニ  
望申ニ、首ノナキ雀上ヨリ落、諸士損色、此軍如何可有存處ニ、政盛曰、今度ノ  
軍ニハ必可勝子細ハ體ヲ見申間、首澤山可取瑞相トテ悅被申、其雀ヲ看ニ  
シテ三獻酌、諸士ニモ酒ヲ給、誠吉凶ハ取様ニヨルヘシト、後ニ申合エリ、憲  
房居、椎居ト云所エ押寄合戰アリ、憲房打負、妻有莊ヘ引籠、上野ノ勢ヲ待、重テ  
退治スヘシトテ、軍勢ヲ催ケルニ、高梨長勝誇タル勢ニテ、逆寄シケレハ、同  
廿日ニ、可諱、長森原エ打出合戰アリテ、長尾六郎ヲ追立ケル所ヘ、高梨突懸

戰ヘハ可諱打死シ、悉敗軍シケル、憲房ヘ越後ニ不怵シテ、上野ヘ歸、白井城  
ニ籠ケル、

〔平氏山吉家系圖〕

第十四代

秀計

永正七年六月十二日、於越後國椎谷、上杉顯定公  
ト長尾爲景合戰、長尾方勝利、上杉方敗軍、同年七月二十日、上杉民部大輔顯  
定公、上條彈正少弼氏定公御父子并御味方之者討死、

〔常陸三家譜〕

佐竹氏三

山方

國利助五郎、永正七年六月廿日、官領顯定、越中爲宗、ト  
戰ノ時、佐竹ヨリ加勢トノ參ル、五十騎皆打死、

〔加澤平次左衛門覺書〕

赤見六郎殿御事、并金子美濃守湯殿山佛詣、平八郎

殿怨靈之事

○上略、金子某、沼田平八、永正七年六月廿日、上杉顯定卿越後國妻有ノ庄ニ  
於テ、家臣長尾六郎平爲景ト合戰シテ、爲景利ヲ失ヒ、信乃國ニ退キケレハ、  
高梨子信乃守合力シテ、兩國ノ堺長森カ原ニテ、主君顯定卿無情モ討奉リ  
ケリ、其時景義卿ノ伯父沼田刑部大輔景秀ハ、顯定卿ノ臣ニテアリシカ、眼  
前ニ主君ヲ討サレ玉フヲミテ、世ニ住ヘキニアラストテ、領地東入ニ引籠、  
遁世シ玉ヒテ、在庭和尚ヲ以テ令草創、洞谷山海藏寺ト號一字ノ禪寺ヲ建

永正七年六月二十日

七六五

上條氏定  
顯定ニ從  
ヒ討死ス

山方國利  
討死ス

沼田景秀  
顯定爲提  
ノ爲メ海



永正七年六月二十日

七六六

立アリ、顯定卿ノ法名海藏寺殿皓峰可諄大居士ト號、則御位牌ヲ立置、其身  
モ其邊ニ蟄居シ玉ヒテ、且暮ノ御キヤウヤウヲコタルコトナク、其身逝去  
ノ後、夫妻トモニ入道ノ宮ト申、一字ノ御堂ヲ被立ケルト被申ケレハ、金子  
返答ニモ及ハス、倉内ニコソ歸リケリ、淺間シヤ、金子カ行衛イカ、アラン  
ト、地下萬民ニ至マテ、ツマハシキセヌハナカリケリ、略○下

〔梅花無盡藏〕

五 柳圖 管領顯定筆

楊柳二三月、鶯聲頗似聽、官門春染緒、線出幾回青、

〔補庵京華續集〕

上杉太守藤公自畫文珠、普賢二大士乞讚、走筆

文殊

聞說上杉賢使君、筆端直起五臺雲、文殊無二是非外、春入童顏花自薰、

普賢

亞聖由來是謂賢、象王行處孰爭先、樺冠木屐一筒菜、莫忘國清厨下緣、(上杉顯定)

〔扶桑名畫傳〕

七二 右馬頭顯定 姓ハ藤原上杉氏、諱ハ顯定、山内ニ稱ヒ、

初四郎、後民部大輔、又右馬頭に任シ、從五位下ニ敍ヒ、應仁元年、管領ニ補ヒ、  
時ニ年十四、兵部少輔房顯ハ男、實ハ民部大輔房定朝臣ノ二男あり、晩年薨

髮して、可諄或作可諄皓峰ト號シ、まゝ常泰ト號ヒ、好テ圖書をよくシ、文殊、普賢  
ハ二大士、また柳等ヲ繪ラサシトあり、永正七年六月廿日卒、海龍寺或作海藏寺ト號ヒ、

〔梅花無盡藏〕

五 龍虎二詩并敍 關東管領上杉顯定需之、蓋管領軍中有天子之旗、

昔杜參謀賦朝廷兵衛之嚴云、旌旗日暖龍地動、蓋天子之旌旗、其勢猶龍蛇

飛動乎、且又一嘯之地、清風凜然者、各西山白群虎中之主張也、今見二猛之

圖、不覺寒毛卓豎、吁時哉、雲從龍、風從虎、各爲軍中之擁護、又虎名日東海青、見修眞十書

天子旌旗勢、如飛作活龍、高擡頭角處、雲自八垠從、右龍六韜舐爪傳、三略弄牙全、彌

猛西山白、清風未嘯先、右虎

〔明月院文書〕

横〇相

齋銘事令申候處書給候、歡喜此事候、忠孝專之段、殊本意満足候、祝詞自是可  
申宣之間、拋筆候、恐々敬白、

十二月廿一日

可諄〔花押〕

明月院 侍司

○顯定ノ部將長尾景信、足利成氏ヲ古河城ニ攻ムルコト、文明三年六

永正七年六月二十日

七六七



永正七年六月二十日

七六八

月二十四日ノ條ニ、顯定ノ宰長尾景春、武藏鉢形ニ據リテ、顯定ニ叛キ、五十子ノ陣ヲ攻ムルコト、同八年六月是月ノ條ニ、顯定及ビ上杉定正等、景春ノ爲メニ五十子ニ襲ハレ、上野那波莊ニ奔ルコト、同九年正月十八日ノ條ニ、太田道灌、顯定等ヲ奉ジ、景春ヲ武藏用土原ニ撃ツコト、同年五月十四日ノ條ニ、成氏、景春ヲ援ケ、顯定等、白井ニ退クコト、七月是月ノ條ニ、顯定、成氏ト和スルコト、同十年正月五日ノ條ニ、定正ト相模實時原及ビ下野菅谷原ニ戰フコト、長享二年二月五日及ビ同年六月八日ノ條ニ、上杉朝良、顯定ト武藏立河原ニ戰ヒテ、之ヲ破ルコト、永正元年九月二十七日ノ條ニ、上杉房能、顯定ヲ援ケ、朝良ト、武藏河越城ニ戰ヒテ、之ヲ破ルコト、同年十月是月ノ條ニ、顯定、子憲房ト共ニ、兵ヲ率キテ、越後ニ入り、長尾爲景ヲ討ツコト、同六年七月二十八日ノ條ニ、平子房長ヲシテ、越後杉一揆ヲ糾合シ、爲景ヲ撃タシムルコト、同年八月二十八日ノ條ニ、毛利元賀ヲシテ、爲景ノ部下山吉能盛ヲ越後三條城ニ攻メシムルコト、九月二十一日ノ條ニ、幕府、顯定ニ命ジテ、伊勢盛正ニ、舊領越後松山保ヲ還付セシムルコト、十月二十四日ノ條ニ、見ユ、

花押

〔参考〕

〔花押彙纂〕

部ッ之 上杉顯定



○發智文書(羽前)  
七月二十六日書狀



○光明寺文書(箱標)  
十一月九日書狀

〔北越軍記〕

一 長尾爲景企逆心、上杉房能弒事

永正七年ノ春ニ至テ、越後一國平均ニ治リケル所ニ、爲景ハ佐渡國羽茂ニ

永正七年六月二十日

七六九

爲景佐渡  
ニテ兵ヲ  
集ム



永正七年六月二十日

七七〇

ヲイテ、敗軍ノ士卒ヲ集、七千餘ニ成シカハ、高梨攝津守政頼ハ我智ナレハ、  
彼方ヘモ内通シ、永正七年六月上旬ニ、俄ニ越後ヘ攻入ツ、顯定ト椎屋ニ  
テ合戦シ、上杉方敗北仕候、其砌宇佐美駿河守ヲ始、顯定方大半下越後ニ在  
陣シテ、顯定、憲房無勢ユヘ、上州ヘ被引取候、爲景ハ、略中、高梨攝津守政頼ハ  
我智ナレハ、彼方ヘモ内通シ、略中、爲景ト相圖ニテ候故、高梨政頼大軍ニテ  
出合、六月廿日ニ、妻有庄長森原ニ於テ、又合戦、上杉方總敗軍ニナリ、顯定討  
死、五十七歳、法名海龍寺可淳、皓峰大居士ト號ス、顯定實子ナキユヘ、初ヨリ  
上條ノ上杉播磨守定憲ヲ養子トス、此度討死ノ砌、遺言ニテ、古河公方高基  
公ノ若君龍王殿ヲ申請、養子遺跡ト可定旨被申置候ニ付、顯定方ノ諸大將  
ト宇佐美駿河守定行申合、古河殿若君ヲ鉢形ヘ奉入、上杉四郎顯實ト號シ、  
主君ト仰、駿河守ハ松之山家柏崎ヲ持、爲景ト取合、上條ノ上杉兵庫頭定實  
モ、顯定一味ノ所ニ、顯定討死ニ付、上條ニ引籠被申候ヲ、爲景ヨリ様々扱ヲ  
入、智取テ和睦シ、定實ヲ府内城ヘ入、屋形ト仰ユヘ、國中大半治ル、然レモ宇  
佐美駿河守ハ爲景ト楯ツキ、永正八年ヨリ大永元年迄、十三ケ年ノ中取合、  
柏崎ヨリ沖野庄内迄切隨、出雲崎、寺泊、新縣モ手ニ入、上田ノ長尾房景、其子

政景モ、上田ヨリ越中ノ諸丸迄切隨、略中

〔盛衰通紀〕 十一 上杉顯定入道可淳討死之事

上杉可淳は、永正六年、長尾爲景を追落して、翌七年六月まで越後に住して、  
其殘黨を尋多、或ハ妻子をもとめ、又ハ所帯を沒收せしゆヘ、國中大よさハ  
きて、山林ニ逃ウクレ、やまき心ハあウリタリ、其頃信濃國住人高梨攝津守  
といふもの、近年越後に住して、房能の旗下ナリシ、彼も房能をウラむる  
事有テ、爲景ト心合せ、房能を討サリタリ、可淳入道は弟の敵あれハ、高梨  
を生捕マシテ、竹鋸マテ首を切ラント怒ラセシニ、高梨聞テ、爲景ウ殘黨七  
百餘人ウサラヒテ、椎屋城ヨムテこもル、是永正七年六月十二日の事也、近  
隣を放火シ、兵糧を持運ふ、可淳父子聞テ、今マテかくれサレト社ハシ置サ  
セ、既ニ居所の玄れハ、忽ニせめ落さんトて、人數を催促セレ共、此度刑  
罰を嚴クせられシ故、玄ハしむもの更ニあシ、又其中に首を刎られしもの  
もあれハ、其一類ハ猶以來ラセ、可淳今ハ力あく、手勢計ニテ椎屋城ヘ向ヒ  
責ラセシニ、長尾爲景も越中ヨリ來リ、高梨とあれ合ヒテ戦ヒタる程、可  
淳の勢ハ、ちリ／＼に逃行タリ、はれ共長尾ハ可淳の勢ニ追クツ、高梨

永正七年六月二十日

七七二



顯定ノ乘馬  
馬跌ク

永正七年六月二十日

七七一

七百餘人よて取こめしに、可淳とつうら働をしう、馬控多つきて前へ落さる處を、高梨押へて首を取て、管領可淳をい、高梨うち取さりとい々れり、殘る兵のを我先よと落行たり、可淳の寂期のとさらき、さしも剛將おれり、力戦目を驚し々れ共、武運盡て討れり、

顯定ノ養子定憲  
顯實  
定憲平井ノ説  
椎谷

此顯定入道可淳の、中興の管領として、十四歳の時初て上刃へ來り、久敷此職に居て、威を東八刃よふるひ、山内殿といれし人の、今高梨う手にかゝり、五十七歳よして失給ひたり、管領さる事四十餘年、實子ありし故、上杉民部太輔憲實う孫上杉兵部少輔定憲を養子として、職をゆつられり、又古河乃公方足利政氏の弟をも、顯定う養子として、上杉顯實と申々れり、己う領を配分し、定憲、顯實の兄弟の好あをい、長尾、高梨を討て、父のあを報んと、明暮心を盡はせたり、可淳うされて、長尾威を振ひしうり、定憲いよく、微勢よ成て、越後の在國成りりさく、ひそりに逃出て、上州平井へ歸りたり、

〔越後略風土記〕

三古戰場之部  
刈羽郡

椎谷 磯山かゝり、駈引不自由の狭地

あり、永正七庚午年六月上旬、長尾爲景と關東管領上杉顯定と合戦、上杉方

長森原

敗北、

〔越後略風土記〕

三古戰場之部  
魚沼郡

長森原 山中也、永正七年六月廿日、上

杉顯定と高梨攝津守政頼と合戦、顯定敗北、討死、

二十四日、戌申出雲守護尼子經久、杵築社ヲ造營ス、是日、正殿立柱、

〔千家文書〕

〇十二  
出雲

永正年中大社御造營之次第

永正年中大社御遷宮覺次第

僧現せん  
出雲石見  
ニ勸進ス  
神慮ニ背  
キ死去ス  
經久造營  
ノ次第ヲ  
千家豊後  
ニ尋ヌ

造營奉行

一當社御造營之事現せん上人ト申僧、當國、石州致勸進、御柱五本、其外材木少々雖用意候、神慮ニ背候哉、永正四年十二月ニ死去ス、

一當國佐々木尼子民部少輔經久、造營之立願有こよつと、中郡高さのよう

ういへ、御出帳帳之時、御造營之次第當家へ御尋有、其時當家ヨリ使親類阿

吾泰經爲當家使、高さのようういへ、被參候、永正五年九月十五日の事よ

て候、其時社家へも、御本願有へき由御返事有、社家中目出度不過之候、左

候所、明ル永正六年三月十七日、爲造營奉行、藤原性宗朝臣、多胡悉休

入道神門へ被差候、阿吾泰經之所爲旅宿逗留候、其年之四月廿四日ニ神

永正七年六月二十四日

七七三



勸進本願  
僧源春及  
比彦左衛  
門尉

新始

地形定

御柱立

山上衆

長ノ作事

永正七年六月二十四日

七七四

宮寺へ宿替アリ、又人別五文あて、當國中へあてらるゝ、勸進本願の、源春ト申僧、又尼子殿中間之彦左衛門尉ト申者兩人也、

一 新之始の、永正六年六月廿八日、兩國造出仕アリ、かふりそくたひ之大工吉川平兵衛多胡入道ト申事あつて、子にて候才若御てうのとしめよてまゆる、北嶋方大工鹽冶の神門名代之又大夫、次郎兩人也、當方大工左を仕候、まふごの、東之候也、大工の玄やうゑよてゑをしよて候祝言之料足十貫、酒九具也、

一 地形定の、永正六年五月廿三日、

一 御柱立の、永正七年六月廿四日、兩國造致出仕候、ちふりそくさひ也、此方ふうし物御供調候へ、跡ヲ北嶋方ヨリふうし物被仕候、尼子殿より引馬一疋、造營奉行多胡入道殿より壹疋、尼子殿御子息吉田(備久)の孫四郎殿より壹疋、以上三疋、大工へ給之、大工玄やう衣立ゑをし、當方ひより東之付申候、はちうちも玄やう衣立ゑをし、先當方大工御ぬさをむいらせ候、

一 山上衆廿人下向候、

一 長之作事、永正六年九月廿三日、御柱立候、其時尼子殿御社參候、長之御

正殿御柱  
ノ次第

經久書狀

柱者、六十人之神人北嶋おくよりどり候、やうて年之内こふられ候、

一 御正殿御柱之次第、いぬいの御柱遲參候間、七月廿一日、立納候、

一 御正殿より先御長をよてられ候、是の不謂と社家中ヨリ申候へ共、無承引候、以後之引懸こ成ましく候、向後の御正殿を先御立あるへき事よ而候、○下略、全文ハ永正十六年四月二十八日、正遷宮ノ條ニ收ム、

〔千家文書〕四 出雲

今度立願子細候而、太社御造營申付候、就其被仰越趣存其貞候、社方執行可被任治古事肝要候、委細者阿吾方へ申渡候、恐々謹言、

九月十九日

經久(花押)

千家殿

尼子民部少輔

千家殿 參御宿所

經久○千家々譜舊記寫異事ナシ、

〔千家文書〕五 出雲

出雲大社就御造營國造千家申上條々、○中略  
一 近代之御造營、國守尼子民部少輔經久御建立被仰付候時者、御柱立永正

永正七年六月二十四日

七七五



永正七年六月二十五日

七七六

七年六月廿四日ニ有之、北嶋方月ニ而候得共、如舊記最初之執行千家仕候、社法何モ任往古、執行可仕之旨、尼子經久ヨリ對千家被成御書候間、執行仕候事、○下略全文ハ、慶長十四年三月二十八日、豐臣秀頼杵築大社造營ノ條ニ收ム、

〔北島文書〕

○五 出雲

〔北島文書〕  
大社御遷宮入用之寫シ

兩國造ニ相分り造營方北嶋執行之覺

一 永正七年六月廿四日御柱立、庚午

〔杵築大社舊記御遷宮次第〕

一 尼子伊豫守經久御立願、御社頭ハ御柱立永正七年 庚午六月廿四日也、新初有テヨリ、九年ノ永正十五年 戊寅成就也、

勤行衆廿人下向也、

○正遷宮ヲ行フコト、十六年四月二十八日ノ條ニ見ユ、

二十五日、酉太白星、東井南轅星ヲ犯ス、陰陽頭土御門有宣、勘文ヲ獻ズ、

〔後法成寺尙通公記〕

六月卅日、寅晴、有風呂、久我女中被入之、

〔朱書〕太白犯東井南轅星勘文、  
有宣卿勘文進上之、  
〔主御門〕

今月廿五日寅時、太白犯東井南轅星、相去五寸所、

天文要錄云、太白東井星、天子慎之、

占云、太白犯東井者、大臣慎之、期一年、

又云、太白犯東井、兵起大亂、

又云、太白犯東井、其國有陰謀、盜賊多、

乙巳、占云、太白犯東井者、天下失珍寶、不出一年、同日午時太白晝見、經天、

天地瑞祥志云、太白經天見、君臣慎之、

又云、太白經天者、必有兵革、頭斬數年、

又云、太白經天見、疾疫有白衣之會、

荊州占云、太白經天見、其下戰流血、

又云、太白經天見、人民飢死、

永正七

六月廿五日

從二位有宣

北野社法樂連歌御會、

〔實隆公記〕

四十

六月廿五日、己酉晴、立秋節、御法樂連歌也、仍參內於小

御所有此事、下官、中御門大納言、按察甘露寺中納言、大藏卿三條宰相中將、左

永正七年六月二十五日

七七七



執筆五條  
爲學

三條西實  
隆御相伴

邦高親王  
ノ御書狀

永正七年六月二十六日

七七八

大辨宰相守光初參五條爲學朝臣執筆等也中間御小漬御連歌終時分二十首和歌探題各詠進之秉燭之後取重之公條卿讀申之了事了有御盃事女中陪膳予一身御請伴也二獻時天盃頂戴祝著畏申者也入夜退出

〔實隆公記〕

十〇永正七年七月十三日裏文書

昨日ノ御法樂の御會御拵りしく存候按察參候てやうても物語申候つる立秋の節入ていつしう昨日々ふも涼し衰心ちして候如何こ先日ノ御書の趣奉候御返事不申其恐候ニカ、ル、聖護院宮道應法親王薨去ノコト廿四日御題下され候て詠進申候て無念の事候

〽ハ 御返事

邦高

よしこのへまいる

二十六日戊庚陸奥會津蘆名盛高ノ臣松本源藏長尾爲景ニ應ジ、金上盛信等ヲ越後狐辰城ニ攻ム、尋テ、盛信等、撃チテ之ヲ却ク、

〔塔寺八幡宮長帳〕

〇岩代（後書）永正七年庚午六月廿七日、小川（後書東蒲原郡）のきつまもとしへ、松本けんさう殿、越後せいをひき、うちいられ候、ゑうてうつたち、七月の

廿六日、おしかへされ候、

越後勢ヲ  
率テ討  
入ル

〔異本塔寺長帳〕

四

（永正七年）

六月廿七日、越後國住人長尾爲景、小川庄津川狐辰城攻是輩名長臣松本源藏謀叛内應故也、然共城主金上河内盛信父子、兵庫頭

（金上）

盛備能防戰ス、仍長尾勢敗ノ、七月十六日歸〇上

〔會津舊事雜考〕

六

（永正）

七年庚午六月廿七日、依于松本源藏内應、越後賊兵據于狐辰城、

二十七日辛亥正四位下四條隆永ヲ從三位ニ敘ス、尋テ、右兵衛督ニ任ズ、

〔公卿補任〕

四十

非參議從三位藤隆永廿三

六月廿七日、右兵衛督、

督、

〔實隆公記〕

四十

七月七日、辛酉、薨〇中

四條三位

隆永、去月廿七日上、階當月二日合奏始、初參云々、

〔諸家傳〕

四條

隆永

同七年六月廿七日從三位廿三同年月日右兵衛督、

〇五月二十三日、大内義興、山縣平次郎ヲ、右兵衛尉ニ推舉スルコト、便

宜左ニ合敘ス、

〔萩藩閥閥録〕

山縣新左衛門

右兵衛尉所望事、可舉申公家之狀如件、

永正七年六月二十七日

七七九



永正七年六月三十日

永正七年五月廿三日

山形平次郎殿

大内義興ノ判

七八〇

三十日、寅後藤隆光、前關白一條冬良卜、山城一條町屋地ヲ爭ヒ、幕府ニ訴フ、是日、幕府ノ奉行松田長秀等、狀ヲ具シテ、義尹ノ裁決ヲ請フ、

〔大德寺文書〕

○山城

〔端裏卷〕

見案

後藤左京亮隆光并一條殿雜掌申一條町西頰屋地事

如隆光申狀者、彼地永享年中拜領仕、無相違之處、先年河州御陣以來不知行之、然雜掌以先御代之例、被申給之、任證文之旨、可被成下御下知云々、如雜掌解狀者、家門境內一條町西頰屋地四丁町事、從往古御知行之支證明鏡也、近年奉公輩以一旦居住之號、動令違亂之條、去々年被達上聞、被成御下知、被開喜悅眉之處、今度後藤左京亮致訴訟之間、被糾根本此時可被停止、向後違亂云々、各申狀雖端多、隆光出帶之證文者、彼地知行之時、預置別人預狀〔康正〕、并文明十六年十月廿六日、就地子無沙汰、雖有御成敗、任永享年中一圓拜領之旨、可領知之奉書一通、捧之、惣別永享年中花御所御移從之刻、御近邊敷地被

隆光申狀  
雜掌解狀

隆光出帶  
ノ證文

雜掌出帶  
ノ證文

仰付奉公輩雖然至地子者、被致沙汰之儀爲傍例歟、仍文明十六年隆光申給之奉書雖有、永享年中一圓拜領之文、言本文無之、可謂胸臆者歟、一旦被居住之段爲歷然哉、於可令隆光住宅者、可被任先例者哉、以永享以來之例可知行、一條殿御譜代稱號地之內事、不足信用歟、雜掌出帶之文書、〔此地或號花町〕、建長、弘安御手繼、曆應、文和、繪旨、院宣、寶德御教書、文明十年、同十六年兩度奉書、或被直務、或任先規、可有御進退、言在之、然者云爲古今證文分明、云御當知行旁以可被付雜掌乎、宜爲上意矣、

永正七年六月卅日

中務 丞秀秋

散 位元久

前丹後守長秀

是月、石清水八幡宮權別當善法寺興清、丹後佐野別宮ノコトニ就キ、樂人等ノ濫訴ヲ止メ、ンコトヲ、幕府ニ請フ、

〔石清水文書〕

六 菊大路文書

〔端裏卷〕

善法寺雜掌重支狀 永正七六

石清水八幡宮善法寺雜掌謹重支言上、

永正七年六月是月

七八一

善法寺雜  
掌重支狀



神樂用途  
下行物ノ  
減少

丹後國佐野別宮儀樂人申狀無謂條々  
一彼在所號此方押領言語道斷言上也御當家御師檀自初以來於公武御敬神者諸事致奉行抽天下安全御祈禱精誠哀不限彼在所者也然神樂用途事如形于今無懈怠但一亂以後諸國諸庄園如先々無之間下行物減少儀今更非自由之沙汰者歟

一就國錯亂令下行物減少者不致彼在所於上表哉言上是又可有其憚申事歟其故如何為御祈禱料所被成御判處曆然也雖然國有名無實儀者沙汰外題目也幸以有道御成敗守護押妨段者可歎申儀在々所々在之也爭可及上表哉

一彼庄內統秋先祖申奉行事如何但一旦社家以補任相拘爭在之其時節雖掠給院宣御判等無謂依為競望申返數代此方令知行事無紛之處經年序以證文號代々相傳之知行事以外濫訴也

右條々樂人巧言至訴申者可申上子細雖有之先略者也於御糾明者速被成御成敗者彌天下泰平御祈禱可為專一者也仍重而言上如件

永正七年六月 日

豐原統秋  
先祖奉  
行ストハ  
濫訴ナリ

善法寺雜掌重支狀 永正七八

石清水八幡宮善法寺雜掌謹重言上

丹後國佐野別宮之事樂人條々無謂間事

一彼狀云於神前御祈禱者善法寺一切無其沙汰云々言語道斷言上也於當山居置諸供僧奉祈長日天下安全事非一其上於寶前儀者彼等具不可存知者歟

一神樂用途之事於應仁已來之下行者一向不致其沙汰之旨言上第一謀訴也御寄進軍初者貳百餘貫也其時節者每朔御神樂執行之下行如往古其以來守護恣相計之及度々請口令減少者也殊應仁亂來守護京兆為御敵一味之人數上者丹後國之儀一向令無音訖至文明年中左京兆左為御殿樣歸參之後於社納猶不全之條下行又令減少者也然文龜三年丹後國延永石川取合已後打續武田入國已來國錯亂之段無其隱者也依之於御神樂下行者非自由無沙汰者歟然處應仁以來號五千貫未進衰以外言上也如先度申上如形下行于今在之并去年之下行樂人不請取之由申以

下行減少  
ノ理由

神樂用途  
ノ事

神前祈禱  
ノ事



永正七年六月是月

七八四

外妄語也、此方與力被官之外請取在之、其上於此訴訟者、神樂人數非一味之儀、如此之虛言多端者乎、

一院宣以下、大方先度如言上、樂人等掠給、在之、康永年中以來之證文、歟、以公武御沙汰、被棄置之乎、其以後、此方數代知行無相違之處、擬申亂之條、以外濫吹也、

一彼庄、衰者、從往古為社領、興清先祖存知之、然仁等持院殿樣中古御再興也、以一旦社家補任樂人、永可致存知之、衰不謂次第也、

一彼在所樂人等相拘、衰非一旦、令言上、雖然、以補任致存知者、代官也、代官者非一旦哉、

右條々、被聞食披、嚴重被成下御成敗者、彌御武運長久、可為御祈禱專一者也、仍重謹言上如件、

永正七年八月 日

〔京都御所東山御文庫記錄〕

丙四

樂所中各重謹言上、

佐野別宮事、乍致善法寺當知行、御神樂退轉之子細見申狀三通、訖於彼

院宣以下ノ事

足利尊氏社領ヲ再興ス

在所ノ樂人

樂人ノ訴狀

樂器備ノ事

十節衆

安居頭役人ノ事

神役ノ遲怠ハ樂所ニ依ルニアラズ

陳答者、悉以寄事於左右言上、歟、被聞召披、任先例全直務、可專神用之段、被成下御下知者、可忝畏存者也、

一令略樂器備御節之由、有先例云々、時代何此事哉、於樂所一向不存之者也、萬一為事實者、其時訴人交名并歎申子細何事哉、若號十節衆橘氏輩事歟、然者非當流先祖上者、各別之子細也、

一安居頭役人事、前々社務依無沙汰、五頭十頭令歎其役云々、每年卅二頭雖令差定、當時神方等任雅意不歎之間、強前々社務不可為越度歟、七月差定延引之事者、依相屆諸神方等、訴訟令遲々者也、如今度、以非例至令執行者、沙汰外次第也、而卅二頭差定之由言上、歟、更不珍子細也、

一今度相支神役歎申儀、更非率爾、去十月中旬已來、對善法寺雜掌并達所座中等、返狀可有兩三通之、被召出之、被備上覽者、非樂所緩怠之段、可被聞召披歟、

一於彼差定者、往古以來樂所不參無其例之處、如此執行之上者、自今以後於當社務職中、何神事執行之砌、可致樂所參歎哉、年中廿四節神事悉以為退轉之、定可被存社務條、太難測神慮次第也、而猶以不被改當職者、至近年如

永正七年六月是月

七八五



神用無沙汰

永正七年六月是月

七八六

形神事、去月三月初卯神樂于今闕怠也、并來年二月初卯神樂已下社役悉不可及樂器條、頗不吉之次第、不可過之者哉、既至佐野庄神用者、于今乍致知行、及五千貫無沙汰之條、以外次第也、當時於守護國方押領者無力歟、出社中如此所行、不及是非題目也、誠非御師職存仁者、一段可被加御成敗之條、不能左右子細歟、

一不限樂所、依訴訟相支神役歎申時、則被達上聞、預御成敗段、每度之儀也、依歎申子細非儀、縱後日雖被成返御下知、就神訴者、先御裁許之例、歷然也、況於理運之頭目者、不能左右、然如今度所行、一切不被達上聞、押而以新儀執行之條、先代未聞次第也、不被請神非例者、更不可成御祈禱者也、

右於樂所中、各拜領之社恩之地者、雖爲廿餘ヶ所、或社中押領、或依守護國民押妨、大略無足堪忍仕者也、所詮今月內侍所御神樂已前、○內侍所停メラル、コト、十二月二十九日ノ條ニ見ユ、嚴重不預御成敗者、可奉待時節無之上者、成樂道斷絕覺語、可致各別進退者也、此等之趣、具達上聞、爲奉仰御扶持、重粗謹言上如件、

永正七年十二月 日

樂所領地多ク押妨セラル

樂道斷絶セントス

七月大乙卯朔

二日、丙辰幕府、山城寶慈院ニ、同院領美濃大矢田郷運送紙荷公役ヲ安堵セシム、

〔日吉神社文書〕○五近江

公用進納ノ混亂、シム 叡慮ニ依リ安堵セシム

自美濃國大矢田郷運送紙荷公役事、江州枝村商人等、執急彼公用進納之云々、然此役各別之儀、不分明之條、雖被混亂諸國紙駄別役、依被歎申、叡慮無相違之上者、可令全領知給之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正七年七月二日

(諏訪信時) 彌在判  
(松田長秀) 前丹後守在判

寶慈院殿雜掌

七日、辛酉七夕御祝、詩歌御會立ニ御樂、

〔實隆公記〕三四十 七月七日、辛酉、露星節幸甚、自伏見殿草花一筒給之、

小浴祝著之儀等如例、人々稱禮來臨、及晚理性院僧正來、入夜中御門新大納言來臨、

相公羽林當番參入、御祝如例云々、詩歌懷紙獻之、御製又拜見、愚意分申入之、

永正七年七月二日 七日

七八七

邦高親王、草花ヲ三條西實隆ニ賜フ

(三條西實隆)



永正七年七月七日

七八八

御樂如例、花山前(政長)左府、菊第中納言等參入云々、地下堂上大略皆參、四條三位  
隆永、去月廿七日上階、(位隆永)永永、(從)從  
七、(日)日、(月)月、(二)二、(日)日、(合奏)合奏、始初參云々、(白川)白川、雅業王依重服不參云々、樂目錄  
等可尋記、北野御手水松(松)院送給之、

廿二日、丙子、天晴、(禮源)略、中  
統秋朝臣來、春鶯囀、當月御樂目錄也、此樂於舞者稱四ヶ曲、(皇帝)皇帝、團亂旋、春云  
々、於樂者雖非四ヶ曲、隨分祕說也云々、

○伏見宮及比諸家ノ七夕和歌會ノコト、便宜左ニ合攸ス、

〔實隆公記〕

四十 六月廿二日、丙午、晴、暑氣甚、(中)略

中書王七夕題事御所望、五首撰進之、

新秋喜涼 乞巧望月 殘照槿花 讀長恨歌 清夜琴興

〔實隆公記〕

四十 七月三日、丁巳、天晴、念誦如例、細川右馬頭七夕三十首題

所望、則書遣之處、又右京大夫所望七十首題、書遣之、明後日廣澤池蓮花可歷  
覽、逸興可出行之由有命、一向羽翼不叶之由報之、

八日、壬戌、晴、

右京大夫并右馬頭、昨日短冊一座裏書可染筆之由、申送之間、書遣之、

貞敦親王  
實隆二七  
夕和歌御  
題ヲ所望  
セラル  
細川尹賢  
及比高國  
實隆ニ所  
望ス

伊勢貞仍  
ノ歌

〔下總集〕

上 秋歌 永正七年七夕に、人々七首歌よみて、(三條西實隆)前内府へ御點申入侍

しに、鹿聲遙

雲のな夜うきてそほよふさ夜しうれこゑ吹のこす嶺のあらしふ

大内義興、犬追物ヲ興行ス、

〔犬追物手組日記〕

犬追物手  
組

犬追物手組事、(大内義興)於大内殿、(馬場)馬場有之、

左京大夫殿 (元吉)小笠原刑部少輔殿

内藤彦太郎殿 (與相)杉次郎左衛門尉

仁保次郎殿 仁保太郎

江口與三 飯田彌五郎

杉彦三郎 杉四郎

野田九郎 弘中小太郎

益田治部少輔殿 平賀藏人大夫殿

檢見 喚次

伊勢守殿 弘中次郎右衛門殿

永正七年七月七日

七八九

檢見伊勢  
貞陸弘中  
喚次右衛  
門



永正七年七月七日

於大内左京大夫殿有之、内衆計也。

○同月十九日、伊勢貞陸、犬追物ヲ行フコト、便宜左ニ合致ス。

〔犬追物手組日記〕

伊勢貞陸、犬追物ヲ興行ス。

犬追物手組事於伊勢守馬場有之。

小笠原六郎

伊勢左京亮殿

益田治部少輔殿

種村三郎殿

平賀藏人大夫殿

飯田彌五郎殿

長久郎左衛門尉殿

宮上野介殿

檢見

喚次

檢見伊勢貞遠、喚次鈴木小五郎。

伊勢右京亮殿

鈴木小五郎

永正七年七月十九日

十日、甲子第二皇子仁和寺宮、覺道三條西實隆ノ第二臨ミ、又參内セラル、

〔實隆公記〕

三十四 七月十日、甲子、晴、夕立雷鳴、

眞光院僧正被一荷兩種、今日二宮御方始而渡御也、表祝詞云々、不慮之儀、祝著迷惑之由對使者謝之、理證院大納言法印來今日御供也云々、對談了、二宮

御入室後始テ渡御

御方板輿懸下此法印并綱所二人各乘輿御供云々、直御參内裏云々、

○第二皇子仁和寺ニ御入室ノコト、三月十三日ノ條ニ見ユ、

十一日、乙丑大内義興、近江日吉社十禪師二、大藏經ヲ寄進ス、

〔實隆公記〕

三十四 七月十一日、乙丑、陰、行水念誦如例、

遣書狀於龍崎許、大藏經全部義興朝臣令寄進十禪師社、件寄進狀事、昨日談合也、其文言可然之由、以狀申遣之、

○寄進ノ日、詳ナラズ、姑ク本文ニ據リテ、掲記ス、

十二日、丙寅生御魂御祝、

〔實隆公記〕

三十四 七月十二日、丙寅、陰、夕立、略○中

禁裏御盃、猿樂入破等有之云々、

○邦高親王、生御魂御祝ヲ行ハセラル、コト及ビ諸家生御魂祝ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔實隆公記〕

三十四 七月十一日、乙丑、陰、行水念誦如例、略○中

及晚自竹園有召、故障由申處、重而以行季朝臣承之間、黄昏程參入、宮御盃御祝著之儀也、一獻及數盃酌、入夜退出、貳荷兩種、遣甘露寺了、女王被送樽、

永正七年七月十一日 十二日

龍崎道輔寄進狀ニツキ實隆ニ議ル

猿樂ヲ行ハル

邦高親王



實隆黃金  
ヲ賣ル

永正七年七月十五日

七九二

今日黃金一兩沽却辨所用者也

十二日丙寅陰夕立略

今日佳例祝著之儀在之万里小路送樽廿餘元長甘黃退出被宿此亭

〔後法成寺尙通公記〕四

七月四日午晴夕立頗雷數聲今朝從一乘院生見

玉一荷兩種如例年被送之御靈殿同生見玉一桶兩種被送之

九日亥晴略中 大祥院御生見玉ニ被來兩種一桶

十日子晴夕立雷數聲繼孝院一荷三種爲生見玉持來

十二日寅晴伊藏主來慈照寺爲生見玉一荷三種進上給一盞

十五日巳孟蘭盆會三條西實隆燈籠ヲ獻ス

〔實隆公記〕四十

七月十四日戊辰霽

未明催興詣嵯峨先禮清凉寺釋迦栖霞寺彌陀等次向二尊院於墳墓燒香長老來會被誦孟蘭盆經則於長老房數刻雜談十王廿五菩薩等拜見當院與之一字今年壞之云々仍只端一字也寒落不便々々傾一盞歸路向一原野墓所及晚歸宅窮屈忘前後者也晚頭水向等如例

燈籠飛白文ノ一進上禁裏相公羽林候番秀房代也

慈照寺

繼孝院

大祥院

御靈殿

通ニ生御

譽近衛尙

一乘院良

實隆第祝

飛白文ノ  
燈籠

十五日己巳晴

曉天靈供之儀如形今日終日法花經一部其外看經無他事及晚荷葉祝著之儀如例

自甘露寺荷飯一荷到來

伯山科九條万里小路等各遣樽如例

當年每事計會如形之儀也

十八日壬御靈祭

〔實隆公記〕四十 七月十八日壬申晴

於三位禪尼方權賞翫及大飲以外酌酌御靈祭神幸不及拜見儀也

十九日酉上杉憲房ノ臣長尾景春伊勢宗瑞ト共ニ長尾爲景ニ應ス上杉

朝良ノ部下上田政盛亦宗瑞ニ應ジテ武藏權現山ニ據ル憲房朝良ト

共ニ權現山ヲ攻メ是日之ヲ陷ル

〔歷代古案〕三

去三日之書狀同七日到來再三披見抑伊勢宗瑞至于武州出張既柵田自落朝良顯定ト武藏立河原ニ戰ヒ今川氏親宗瑞ト共無人數之間不可

永正七年七月十八日 十九日

七九三

上杉顯定  
書狀景長  
長尾ノ形  
關東ノ形  
勢ヲ顯定  
ニ報ス



永正七年七月十九日

七九四

拘之段兼日議定故、普請等及五六年止之間、城主由井移候歟、然間彼地翌日指懸之處、出合、遂矢師數多、打捕由、令注進旨、雖不始事、石井帶刀左衛門尉、勵神妙候、定而可爲同意候事、

一雪下殿御造意連續、當太田之庄火ノ手見へ候歟、公方樣被對當方、無餘儀之所、如斯之御勵、被就御變心之上者、不及力次第之候、老拙不存無沙汰之處、倭人ニ紛故、慮外之御擬、旁以天道之被相背上者、爭可被免候哉、

一大上樣上意不相替、累年上豹德齋并成田下總守如申越者、社家衆露御色候者、御發向御議定、依之下總守方へ御書次、築田大炊助書狀越候、如斯上者、不可有御別條之間、御動座ノ事申上候者、尤同名中其相談馳向、宗瑞可被遂一戰之段、可爲大感候、連々出語此時候、

一鉢形、忍兩城堅固專一之由之候、此一儀專申遣候、治部少輔入道建芳毛頭無疎略、定而可有其聞、當國進發之砌、互ニ露神名、以自筆成誓書故候、是又可心安候、孫太郎出陣之事、頻催促、太田大和守度々折簡成候、顯方諸每可申合候段、伊玄方參陣之一揆中、如書中者、帶刀左衛門尉號物詣馳候、一點不知之由、斷而載誓詞候、就而去七日夜中、令自火、伊玄退之趣、方々ノ說同

前之候、半信半疑候、事實候者、落所以夜繼日可被申越候、一當國凶事連續付而參陣之儀之候歟、然而雪下殿御企無紛故、見合遲々、同名掃部助可被下之處、宗瑞出張之間、延引得其意候、一相背伊玄、帶刀左衛門尉、石田一類、津久井山ニ移リ、宗瑞一味候哉、如顯先段、伊玄進退同前之樣聞候、不思儀之次第候、於同名中、老年中爲不憚身、一代兩度之不儀、併當方并名字中、時節到來迄候、如何覺悟候哉、○中略、全文、日、上杉顯定、長尾爲景、下、越後長森、原ニ戰ヒテ、敗死スル條ニ收ム、

永正七年六月十二日

可諱

長尾但馬守殿

〔武家事紀〕

四十

死○上略、上杉顯定、長尾爲景、高梨政盛、下戰ヒ、敗、長尾左衛門入道伊玄起逆意、彼同名六郎致一味、沼田之庄内ニ打入、號相俣地ニ令張陣候間、今ニ有此方

ニ取向候、古河樣無御餘儀、建芳毛無等閑候間、別條之子細無之候、伊勢新九郎入道宗瑞、長尾六郎下相談、相州ニ令出張、高麗寺并住吉之古要害取立令

蜂起候、然間建芳被官上田藏人入道令與力、神奈河權現山於取地利、致慮外

永正七年七月十九日

七九五



武藏南一

永正七年七月十九日

七九六

候間、建芳自身向彼地罷立候、然間自當方モ勢遣、成田下總守、澁江孫太郎、藤田虎壽丸、長尾孫太郎爲代官、矢野安藝入道、大石源左衛門、同名三人、長尾但馬守爲代官、成田中務丞、其外武州南一揆之者、罷立候、自去十一相攻彼權現山、同十九夜中令没落候、然間所々要害令自没候由、注進到來候間、相州口ハ先此分候、○中略全文ハ、八月三日、憲房爲景ヲ討タシコトヲ幕府ニ請フ條ニ收ム、

八月三日

藤原憲房在判

拜呈

上乘院 御同宿中

〔相州兵亂記〕 二 可諄討死事

○上略、顯定爲景ト戰ヒ、敗死スルコトニカ、ル六月二十日ノ條ニ收ム、此折節、顯定上杉ノ長臣無二ノ忠功ヲナシケル長尾左衛門尉景春入道伊玄逆心ヲ起シ、同名六郎ト一味シテ、已ニ打立ケレハ、近親ノ家子三戸駿河守、太田備中守種々諫メケルハ、昔ヨリ普代ノ主ニ向テ弓ヲ引人、一人トシテ運ヲ不持、必ス滅フトイヘリ、然ラハ今度ノ謀叛必ス味方ノ負ナルヘシ、思留リ玉フヘシト云ヒケレトモ、伊玄入道不用シテ、軍兵ヲ相催シ、沼田ノ庄ヘ陣ヲ張ル、亦小田原ノ城主伊勢新九郎

景春ノ近臣景春ヲ諫ム  
景春用ヒズ爲景ニ應ズ

宗瑞相模住吉城ニ入ル  
政盛神奈川ニ出ヅ

憲房周章ス

權現山合戦

顯定早雲モ、彼六郎ト一味シテ、已ニ相州住吉ノ城ヲ取立出張ス、此時上杉治部少輔入道建芳ノ被官上田ノ藏人入道、彼早雲カ下知ニシタカヒ、武州神奈河ヘ出張シテ、權現山ヲ城ニカマヘタリ、近年ノ亂逆ニ國衰ヘ、諸侯力ヲ屈シ、カハ、四夷弊ニ乘リテ、起事蜂ノ如シ、就中伊玄入道當家ノ重臣一門ノ耳目ナリシカ、不儀ノ六郎ト組シケルコソ、淺間敷ケレ、憲房ノ周章、只熱湯ニテ手ヲ濯カ如シ、

權現山合戦之事

去程ニ、上田藏人入道武州神奈川ヘ打出テ、熊野權現山ヲ城郭ニ取立、小田原ノ宗瑞ノ引合、ムホンノ色ヲ立ニケリ、早雲、小田原ニハ子息新九郎ヲトメ、吾身ハ松田、大道寺以下ノ軍勢ヲ引率シ、高麗寺山并住吉ノ故城ヲトリ立楯籠ル、上杉家ノ人々評定シケルハ、當方ノ人衆スクナシトイヘトモ、敵ノ勢ニクラフレハ、味方十人敵一人程ニモ不及、驚ヘキニアラスト、靜ニ手分ヲシテ、沼田ノ勢ヲ押落サハ、小田原、越州ナトノ敵ハ恐ル、ニ不足トテ、顯定管領ハ猶白井ニ御座シテ、伊玄入道ニ取向ヒ玉フ、亦神奈河ノ城タニ責落サハ、其外ハ自落スヘキ、但シ大將ニハ、末々ノ一門、國々ノ催シ勢ナト向

永正七年七月十九日

七九七



權現山ノ  
地勢

永正七年七月十九日  
七九八  
テハ不可叶ト、上田カ主ノ治部少輔入道建芳大將トシテ、神奈川へ押寄ル、  
管領ヨリモ加勢ニハ、成田下總守、澁江孫二郎、藤田虎壽丸、大石源左衛門、長  
尾孫太郎カ名代ニ、矢野安藝入道、長尾但馬守名代ニ、成田中務丞、其外武州  
ノ南一揆ヲカリ催シ、雲霞ノ軍勢ニテ、永正七年七月十一日、神名川權現山  
ノ城ヲ稻麻竹葦ノ如取卷タリ、彼山ハ、四方峻岨ニテ岸高ク、峙ヨリ南ハ海、  
北ハ深田ナリ、西ニハ小山續キタリシテ、其間ヲ掘キリ、山ニ續タル本覺寺  
ノ地藏堂ヲ根城ニトリ立テ、越州、小田原ヨリノ加勢ヲコメ、寄手ヲ見下シ、  
散々ニ射ル、寄手ハ大勢ナレハコトトモセス、喚叫テ切テ入、神奈川ノ住人  
間宮ノ某ト名乗テ、黒鎧ニ四ツ目結ノ笠シルシ、濱風ニ吹カサシ、木戸ヲ開  
テ切テ出、寄手モ是ヲ討トレトテ、射向ノ袖ヲ差簪シテ、一面ニ切ムスフ、城  
中ノ兵トモ、間宮討スナノト聲々ニ叫テ、追ツマクリツ、半時ハカリ戰ケ  
ルカ、終ニ打負テ後ノ城へ引テ入、寄手彌勝ニノリ、續テ城へ入ラントスル  
處ニ、籠ル勢トモ、不叶トヤ思ヒケン、木戸ヲオロシテ引籠ル、寄手ノ先陣武  
州稻毛ノ住人田島ト云モノ、カマ鎧ニテ木戸ノ繩ヲ切ホトク、是ヲ見テ、城  
中ヨリ大石ヲ十計ナケ出テ、田島甲ノ鉢ニ打アテラレ、コロヒ落ケレハ、續

城ヲ火イ  
テ北グ

ク兵皆一同ニ引退ク、然レトモ後陣ノ軍兵重テ押寄、十一日ヨリ廿九日マ  
テ、夜晝廿日責ラレテ、其上出城ノ本覺寺山ヲトラレケレハ、不叶トヤ思ヒ  
ケン、城ニ火ヲカケ、同廿九日夜中ニ、上田ヲ初メ、行方不知落ケレハ、皆悉ク  
敗北ス、○下略、憲房爲景ヲ討タシ、幕府ニ請フコトニ、  
カ、ル、八月三日ノ條ニ收ム、鎌倉九代後記、異事ナシ、  
〔鎌倉管領九代記〕六 長尾景春入道叛逆  
略○上杉家乃長臣長尾左衛門尉景春入道伊玄ハ、忠功比類あき股肱乃良  
士と頼ミ思之れたる所、長尾六郎爲景ヨ一味して、逆心を企テ、山乃内  
殿を取のき々れハ、親屬乃家比子三戸駿河守、太田備中守諫言しをるる、  
むろしよ、こ乃ろ、譜代恩顧乃主ヨ向ひテ、楯を抜き弓を引し者、一人と  
して運乃盡ざる事あし、然るを今たちまち逆心改企テ給ふ事、ひとへ  
ヨ家運乃ろ、ふく端成を、たゞおかし決しとほり給へといひ々れども、  
伊玄入道此諫言を用ひて、軍兵をもよをし、沼田乃庄ヨ陣を張テ、上杉  
家を責（伊勢守）、へきとろ、をぞい、しける、是をヨ難儀と思ふ處、小田  
原乃城主北條新九郎入道早雲、駿豆兩筋に跨り、相刃を去のぎ、長尾六  
郎ヨ一味して、相模國住吉乃城を取立、弊を伺、ふて出張さし、上杉治

宗瑞爲景  
ニ應ズ



永正七年七月十九日

八〇〇

部少輔入道建芳が被官上田藏人入道まで北條早雲が下知し隨がひ軍勢をあげて武刃神奈川に押出つゝ權現山を城郭として謀反の色をさてゑり東西狼逆し南北蜂起して敵とあり味方とあり互に峙ちて亂をさる有様戰國乃七雄起立て權をあらそひたる古しへも角やとぞ覺えたふ山内上杉乃人々は更に驚く色もあくてあらとくしる何れぞ事り有べき敵の軍勢多しといふと味方十人に一人宛ふを及ふべうらま縦彼大義のとりとをあはといふと蟻燿乃ひうらの大陽乃明なるに當らし精衛が巨海を填まんとし蟻嶺が隆車を遮きまおあじうるべきもの也とて靜うよ手分をして伊玄入道が沼田乃陣をぶ追くづさば小田原北越乃敵のおそるゝ不足らず自亡べしとて管領五郎憲房の白井乃城に在ながら人數を出して沼田を押へさま治部少輔入道建芳を神奈川ふそつうとされき建芳入道手勢を率して打立りまの管領よと乃加勢として成田下總守澁江孫次郎藤田虎壽丸大石源左衛門長尾孫太郎が名代矢野安藝入道長尾但馬守が名代成田中務丞其外武刃乃南一揆を駆催し軍勢都合二萬よ騎永正七年七月十一日神奈川權現山の城ふ押よ

憲房白井  
城ヲ戍ル

權現山城  
ノ守備

せさり彼山乃躰たらく四方嶮岨にして切岸たうく南の洋海漫々として雲乃浪煙の波天ふ陸らなりて涯なく北は深田乃底をえらす馬乃足更ふ立へうらま西乃うらまの小山のつゞきさる其間を掘切て本覺寺に地藏堂をは根城に拵らへ越後駿河乃加勢をもつてかゝ先は東乃大手より大將藏人入道軍勢甲比緒をえ先弓の弦喰えめし矢束とたて待りけり寄手二万餘騎稻麻竹葦乃とく城の三方を取かこえ時乃聲をあきたれり城中にを時を合せよ天地震動し山鳴海湧て煙塵れこり晴天たちまちに霧晦し寄手乃先陣成田下總守五百よ騎うづき上り逆茂木を引破る神奈川乃住人間宮彦四郎と名乗て黒糸威乃鎧小四目結の笠符を濱風に吹うざし五尺餘り乃大太刀を抜もち木戸を開きて切て出つゝ馬人をいと當るを幸ふ難倒し打おとせ寄手は大勢これを真中ふ取こえ討取て高名をんと懸寄る間宮更に物ともをに射向乃袖を指かほし四方に打とらひ一面よ追まくとその勇猛乃勢師子象乃とく也たれり成田乃五百よ騎間宮一人よ切立らま村々よ成て引えりぞく二陣つゞきて懸よすふあら手の三百よ騎息をもほがせず戦うひしうば彦四郎までふあやうく

間宮彦四郎ノ勇戦

永正七年七月十九日

八〇一



武藏南一

攻撃九日  
ニ及ブ  
守備衰フ

みえりをり、城中に兵共、間宮討ちあど聲々お喚叫て、二百よ騎突て出つ、追ひまくつ半時計を、ろふ、寄手乃三陣入替り、手いさく責をせしうバ、城に兵、さ、りひ疲れて引あぐ、寄手勝お乗て、つゞいて城に押入らんと、城中の軍勢を木戸をおろして引こを、寄手乃中武易稻毛の住人田嶋新五郎と云者、鎌鎧をもつて、木戸に繩を切ると、城中これを見て大石を投出せよ、田嶋が甲の鉢を打らる、目眩きて轉落、ををれを、後に續く兵ごをみな一同に引えりぞく、後陣にひろへる武易南一揆乃者とも、五百よ騎入替りて押し、ろ、搦手乃大將藤田虎壽丸八百よ騎よて、たゞ一揉よ責落さんとおめき叫で詰ろく、北越、小田原に加勢三百よ人、山の上よ、寄手を見おろし、下、寄手に引つ、散々に射ければ、面にま、む兵廿八騎、矢庭に射をされてう、寄手すこしえらきて、足並えごろに成所を、得ろりや、打て出、ろ、寄手入替り、堀切をさろふて、矢軍に時をうめ、七月十一日乃午に刻よ、同き十九日の晩景にいる迄、夜る晝九日責戦ろふ、寄手のあら手を入替、ろ、人馬乃息をせがせて押懸、城中ふの小屋勢なれ共、要害よけをば、たやまく破らる、はを共三方の敵を多き、小屋

本覺寺山  
陥ル  
政盛奔竄  
ス  
憲房爲景  
ヲ撃タン  
トス

燃焼く火矢を打ぎ、に、兵糧を喰るき隙もあし、終よの城乃うし、後の要害よ頼る本覺寺山を藤田よ責取をしり、か、あ、じごや思ひ、十九日、夜半計、城に火をうけ、其煙ふまき、大將上田入道をせじ、免て、軍勢あ、ろ、く行方、ろ、を落ろ、ろ、管領憲房大よろこひ、木村式部少輔入道をとつて使者として、京都乃將軍へ訴申、長尾六郎追伐の義をぞ謀をける、○關東管領  
記異事ナシ、

○憲房、上杉顯定ノ戰歿ヲ報ジ、爲景ヲ討タンコトヲ幕府ニ請フコト、  
八月三日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔新編武藏風土記稿〕

小机十領 橘樹郡十三 七軒町 本覺寺 西側ニアリ、海道  
命院下號ス、千光國師榮西、嘉祿二年、草創ノ道場ナリ、其頃ハ臨濟宗ニテ、京  
都建仁寺末派ナリ、按スルニ、榮西ノ建保三年、寂元、吉當寺ニ住シ、全ク勸請ノ  
開山ナルヘシ、其後、天文元年、雲松院、第三世、陽廣元、吉當寺ニ住シ、全ク勸請ノ  
宗ニ改メシト云、本尊地藏ハ行基ノ作、坐像長一尺八寸、諸記録ニモ、本覺寺  
ノ地藏堂ナシト、記シテ、古クヨリ世ニ聞エアリシ、本尊ナリ、客殿ハ間半ニ  
七間半、門ハ兩柱ノ間、此門内ニ南向ナリ、裏門ハ東ノ方ニ、權現山ノ門外ハ陸  
田ウチヒラケシ、地ナリ、此門内ニ南向ナリ、裏門ハ東ノ方ニ、權現山ノ門外ハ陸  
トナリト云、又寺ノ後ノ方ニモ、今城跡ト云、本覺寺ノ地藏堂ヲトコミテ、要  
カ、當所權現山ニ、岩ヲカマヘ、アタリ近キト云、本覺寺ノ地藏堂ヲトコミテ、要

本覺寺



地藏堂

權現山砦

古來古據  
シノ群盜多

高麗寺城跡

永正七年七月十九日

八〇四

害トモ見ユルハ、サモアルコト、古戦ノ記地藏堂裏門ノ立像ニシテ、臺坐トモハ

尺許アリ、權現山砦跡、宗興寺ノ觀音堂ノ山ニツ、被官上田藏人入道北條早雲ト

當所ヨリハ、七八丁モ南ニアタレリ、又按略ニ、僧萬里カ梅花無盡藏ニイヘル

權現山ノ詩モ、當所ニテ、同日、有山、曰權現堂、即相武兩道之界、古羣盜之入武

藏國ト云、題ノ自注ニ云、驛樹風聲、入武州、山名權現、無樓、旅衣未脱、昏鴉、相

聊借民不、然蓋昔有堂、歟、驛樹風聲、入武州、山名權現、無樓、旅衣未脱、昏鴉、相

ト武ノ里ハ、他國ヨリハ、程ケ谷ノ邊、ハ、コヘキ、モ、ナ、相、武、ノ、界、ハ、イ、カ、ハ、ア、ラ、ン、マ、リ

モリニヤ、コトノ詩ハ、文、明、地、ナ、レ、ハ、十、月、朔、上、田、入、道、ナ、リ、是、リ、タ、レ、ハ、昔、ト、セ、シ、ナ、ル

略〇ニ下ヤ

〔新編相模國風土記〕 四十一宮庄 高麗寺 村 高麗寺 陶綾郡 三 高麗寺城跡 今蹤跡

詳ナラサレト、高麗寺山上ニ在シコト識ルヘシ、永正七年、上杉民部大輔顯

定ノ老臣長尾六郎爲景、主ニ叛キシ時、北條新九郎早雲是ニ同心シ、松田、大

道寺等ヲ引率シテ、當所及ヒ住吉ノ古城ヲ取立、楯籠リシ事アリ、略中廢セ

シ年代詳ナラス、

豐前守護大内義興、同國宇佐郡ノ段錢ヲ以テ、宇佐宮神用錢ニ充テ、佐

田泰景ヲシテ、之ヲ勘渡セシム、

〔政所惣檢校益永家職掌證文寫并諸事〕

永正六七年  
兩分神  
用錢

宇佐宮年中御神用錢、拾六貫參百文云々、任社家所進旨、仍永正六七兩年

分、以上百五十貳貫陸百文之事、任京都奉書一廿三也、旨以宇佐郡今秋段錢

之内、對社家役人有勘渡之、如先例、執置彼請取狀、追而可被遂散用之狀如件、

永正七

京清判

七月十九日

貞頼判

正種判

弘依判

弘詮判

佐田大膳亮殿

二十日、御生母贈皇太后朝子御正忌、御法會ヲ山城般舟三昧院ニ修セラレ、

〔實隆公記〕 三十四 七月廿日、甲戌、霽、及晚夕立、雷鳴、

今日伏見御經供養、著座公卿冬光朝臣一人云々、御願文和長卿草之、御導師

等可尋記之、大藏卿來臨、勾當内侍被謝昨夜罷向之儀也、

永正七年七月二十日

八〇五

東坊城和  
長御願文  
ヲ草ス



五條爲學  
布施取

修理勸進  
帳ノ草案  
竝ニ清書  
ヲ實隆ニ  
依賴ス  
高野驗記  
繪

勸進聖阿  
本高親王  
邦高親王  
塔勸進ノ  
勸裁ヲ仰  
ギ奉ル

永正七年七月二十一日

〔拾芥記〕

七月廿日、天晴、及晚夕立、於般舟院爲贈后正諱、有御經供養、御導師花園、予參御布施取、願文諷誦大藏卿草進之、

二十一日、乙亥、紀伊金剛峯寺二大塔修理ノ繪旨ヲ賜フ、

〔實隆公記〕

三四十 七月十六日、庚午、晴、略、中

自照禪院有御使、大藏卿云々、高野大塔修理勸進帳事御所望也、於清書者、如形可沙汰進上之、草事可被仰別人之由申之處、猶草共可致了簡之由被仰之、木食聖高野驗記繪携之來、先可加思案之由申了、

十九日、癸酉、晴、略、中

高野大塔修理勸進帳、今日且草之中、書付大藏卿進照禪院、則以大藏卿被謝仰之、

廿日、甲戌、霽、及晚夕立、雷鳴、略、中

万松軒光臨、高野大塔勸進聖阿本勸裁事、申請之儀、竹園御執奏也、其事便宜可得其意之由、御演說奉之由申了、

廿一日、乙亥、晴、略、中

有女房奉書、大塔勸進繪旨事、有仰之旨、

廿二日、丙子、天晴、略、中

右少辨秀房來、高野大塔修理勸進繪旨事談之、愚存分粗示之、案文可調遣之由報之、

廿五日、己卯、雨降、

早朝自勝善院御使來、高野勸進聖勸進帳料紙持來之、今日則清書之、及晚付大藏卿進了、

廿六日、庚辰、陰雨、略、中

彼勸進帳可加奧書之由、自勝善院有仰、則染筆進了、

廿七日、辛巳、雨降、

高野大塔勸進、木食上人柳二荷兩種送之、不慮事也、

〔實隆公記〕

二〇 永正七年七月二十七日、裏文書

かうや大ゑうのくゑんしんひしりうゑの事、ふしえとのよりとり申され候、くゑんえんよつきて、えよこくのおやえよも、ゑんしをあされ候やうよと、おねしく申され候、御れうくへくゑんしんちやうの事申とて候、えのき、せうしならぬ事、て候やらん、ゑんしんひりうやのやん寺へいて候へ

永正七年七月二十一日

八〇七

勸進帳清  
書成ル

奧書ヲ加  
フ

女房奉書  
邦高親王  
阿本香衣  
請ハル

八〇六



永正七年七月二十一日

八〇八

先ツ香衣  
ヲ勅許セ  
ラル

きう、又その身もあてゝいて候へんするやらん、御心えのふめ、くしく申され候へ、よろこひおぼしめし候へく候、大さうのこんりうの、いけの御代まで候やらん、まゐるしる物もいま御らんせられ候へす候、御申まつきて、うらゑとくり御さふまで、まゐるしるまけをうれ候ていけ候へき、うのゆへに、うらゑとくりまゐるしるのまゐるしるをこそ御心こけられ候とのふしよて御入候よ、このうへよ又、これも大くまゐるしるの事よて候よ、まゐるしるのくまゐるまゐるをすゝめられ候まゐるしるをいふされ候へき事、いやあうへなるやうよやとおぼしめし候、さきかうら、うやうの事、一寺まゐるしるのぬうちよもおぼせいふされ候て、さらよくるしうらぬ事やらん、まゐるしるの事を猶うんようよ申され候、御事よて候、返々、くしく申され候へ、御うれしき御事にて候へく候、さては御月なみ廿四日に御さふ候、御事にて候、御まいりを、あならまごこしいらせをいし、まゐるしる候よし申とて候と、御心え候へく候、かしく、

御局へ

〔高野古文書集〕

勸進帳

勸進沙門阿本敬白

請特蒙十方檀那助成紀伊國伊都郡高野山金剛峯寺大塔企修理狀

夫吾大師者、智惠峯たうく、菩提月朗なり、遠く鯨波の嶮危（厄カ）をこして、まさふ龍樹乃密祕を得たり、將來に志ひこへ、利世撫民に要路（路カ）あり、誰の人うらふりさらんや、もし興隆（凡イ）の寺院、都鄙山林にその數ありといへども、殊此高野山の、少年に昔經行歴譚するお、神靈のならひあきと洩うゝとて、つゐる弘仁の聖朝よ奏請せしめ、結界四至の表白をあらわし、禪定三昧の幽居をトせり、おゝに大塔あり、彼南天に鐵塔をもて、此南山の紺宇よ宮はまこと也、それたうさ十六丈、空輪昊天に聳、寶鐸星辰（星カ）もゆらあをり、誠是様よれるよよらに、さちまち雲漢に入、妙藥をなめ、神仙をまると洩えふりといふるし、まゐるよ草創の基よをきて、いはらま雷火のふめに烟雲よのほりぬ、近衛院御宇久安年中、中務大輔平清盛朝臣安藝守を兼せし日、繪言をくさされ、國務の任限をのへて、塔婆の造畢をまじむ、成功に私あきと洩感して、大師のまのあふり示現のむねあり、いふして太相國の任をきり、免、一天下に柄をどれり、件（處歟）の度心柱よは、當山開闢のはしめ出現する所の五尺に

平清盛造  
營ス

永正七年七月二十一日

八〇九



永正七年七月二十一日

八一〇

寶劔をねさめて、鎮護國家の標幟とて、其後寛喜の比、いさゝる修飾の勸進をめぐらし、元應に夏のはしめ、供養の儀則をととのへて、飛行乃參詣ふと、ひ光を照らし、法會に諸式あらたまをのをおせり、あるまじき星霜はるるに、ゆをり、雨露まきりおをりして、もては顛倒も及ぶ、満山に衆徒まざるに、玄のひまといへとも、終の經營をえましかさし、小僧ひさしく穀粒を斷、つらよ更賦をなむ、ひとへは佛法をあふくある光、さらよ身命をうへりまを、おほよ十方は檀越をまゝめ、一基の修理をくむとて、んと欲する處、うさしけおく嚴主に勅裁をあしくさされ、おあしく武命の敬信をろせうあらを、機縁時いたりぬ成就うたりふへきよあらを、經云、聚沙爲佛塔、皆成佛道と、いうよいとん哉、兩部結界の靈場、三密上乘に大塔、寸鐵尺木をも投し、同心與力をいさしめ、をせむくは阿育八萬四千に造立よもあま、多寶過去全身に親近よひとしからんを、仍勸進のむ縁とあふ所うくれとし、敬白、

永正七年八月日

勸進沙門阿本敬白

(栄華)  
一三 寶院以藏本令一按了、

高州院  
秀花押

○僧受才ヲシテ、金剛峯寺護摩堂ヲ再興セシムルコト、六年四月十一日ノ條ニ見ユ、

二十五日、已幕府、吉田兼満ノ、近江平野社務職及ビ同社領等ヲ違亂スルヲ停メ、之ヲ内藏權頭吉田兼永ニ還付セシム、

〔平野社文書〕江〇近

平野社務職、同社領等事、吉田神主號進止、去四月十六日、兼満朝臣雖掠給御判、被蒙糺明、任運之旨、被返付内藏權頭兼永訖、可被存知之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正七  
七月廿五日

(常盤)  
啟基 判  
(松田)  
英致 判

當社神官中

平野社務職、同社領境內等事、吉田神主號進止、去四月十六日、兼満朝臣雖掠御判、被遂糺明、任運之旨、被返付内藏權頭兼永訖、早年貢以下嚴密可致其沙汰之由、所仰出之狀如件、

永正七年七月二十五日

八一



永正七年七月二十九日

永正七

七月廿五日

八一二

時基判

英致判

當社境内沙汰人中

二十九日、未山城建仁寺清住院如意軒、廣橋守光及比同國大雲寺ト、北岩倉中殿分敷地、田島等ヲ爭フ、是日、幕府、之ヲ裁シ、守光及比大雲寺ニ、其半分宛ヲ安堵セシム、

〔實相院文書〕〇五

山城

〔備考〕中殿御下知正文、堯仙坊ニアリ

城州北岩倉中殿分敷地田島山林等事、建仁寺清住院如意軒雖申子細、糺明之處、彼軒證文不分明於廣橋家者、云御判等文書、又云大雲寺證跡、任公驗炳焉之旨、被裁許訖、任契狀之旨、守先例、各半分宛可被全領知之由、所被仰候也、仍執達如件、

永正七年七月廿九日

〔松田致致〕對馬守 在判

〔飯尾貞運〕近江守 在判

〔藤原基基〕美濃守 在判

如意軒證文不分明

上書

〔岩城カ〕北倉大雲寺雜掌

大雲寺雜掌

對馬守英致

是月、結城政朝、陸奥近津社ニ、同國山菅生湯川在家竝ニ石井郷堀内ノ租ヲ寄進ス、

〔八槻文書〕〇二

磐城

〔岩城カ〕近津別當ニ參

政朝

奉寄進

近津大明神

山菅生湯川在家 并 石井郷堀内、毎年可進申候、仍爲後日狀如件、

永正七年庚午七月吉日

〔結城政朝〕〔花押〕

近津別當ニ參

永七年七月是月

八一三



永正七年八月一日

八月乙酉盡

一日乙酉八朔御祝、廷臣、物ヲ獻ズ、

〔實隆公記〕四十 七月卅日、甲申、陰、八朔方事、如形申付之、

八月一日、乙酉、晴、行水念誦如例、早朝御賴廿進上、

禁裏 硯一面 杉原十帖、相公太刀 金、一腰

宮御方 蟲籠一 相公短冊二百首、十帖

室町殿 金覆輪一腰

伏見殿 同

三日、丁亥、晴、略

禁裏御賴御返、段子□□一端、□扇二本、十帖、中將方若宮御方筆十管、中將方茶碗、花瓶、十帖也、□伏見殿御返太刀、□引合一帖賜之、遣□勸修□

十月十一日、甲午、晴、略

伊勢下總來、八朔武家御返持來之、

〔宣胤卿記〕八朔 同七年、庚午、

三條西實隆同公條上父子ノ獻

邦高親王ニ金覆輪ノ太刀ヲ獻ズ

御返

中御門宣胤物ヲ獻ズ 義尹ニ進ム

勸修寺尙顯實隆ニ物ヲ遺ル

伊勢貞陸 松田親元

内裏 檀紙十帖 蟲籠一、御返同十帖、御筆十管、三日給之、

室町殿御太刀、卅日付御承仕、御返御太刀、三日進、又裏申如去年到來、

勸修寺 太刀使者、以使者又遣之、太刀

〔後法成寺尙通公記〕四 八月三日、丁亥、晴、禁裏、竹園、大樹等御憑、御返被送之、

○諸家ノ八朔贈遺ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔實隆公記〕四十 八月一日、乙酉、晴、略

勸修寺金覆輪携來、

大慈庵勸西堂來臨、勸一蓋、今日客來數十人、終日忿々、略

御牧衆賴如例、入夜中村獻賴、如形也、比與、

〔御狀引付〕一

爲八朔祝儀、菴廿枚、海月二桶、贈給候、嘉悅之儀、懇志之至候、仍太刀一腰、糸進

之候、併表吉慶候、猶□□可申候、

九月十一日

松田豐後守殿

貞伊勢貞陸

越後守護上杉定實、中條藤資ノ戰功ヲ賞シ、同國奥山莊内及ヒ荒河保内

永正七年八月一日

八一五

八一四



永正七年八月一日

ノ地ヲ知行セシム、

〔和田中條文書〕

○伊佐早謙氏所藏

定實宛行  
狀  
關澤孫三郎分  
金山四郎右衛門尉  
長橋分  
石川駿河守分

去年可諄從關東發向之間、國中一變畢、○顯定于憲房ト共ニ越後ニ入リ、長尾爲景ヲ伐ツコト六年七月二十八日ノ條ニ見ユ、然處被存忠信、於所々被勵軍功之條、蒲原郡奥山庄内關澤孫三郎分、金山四郎右衛門尉分、長橋分、瀨波郡荒河保内石川駿河守分、爲忠賞、可有知行之狀如件、

永正七年八月一日

〔長尾〕  
定實〔花押〕

中條彈正左衛門尉殿

長尾爲景  
添狀

去年以來、於所々御忠信、被感之、蒲原郡奥山庄内關澤孫三郎分、金山四郎右衛門尉分、長橋分、瀨波郡石川駿河守分、任去月一日判形之旨、御知行不可有相違之狀如件、

永正七

九月三日

〔長尾〕  
爲景〔花押〕

中條彈正左衛門尉殿

○定實、佐藤修理亮ニ、越後五十嵐保内ノ地ヲ、土澤掃部助ニ、同粟生田内ノ地ヲ知行セシムルコト、便宜左ニ合敘ス、

〔歷代古案〕

六

蒲原郡五十嵐保内大浦分事、可令知行之狀如件、

永正七年八月廿日

定實

佐藤修理亮殿

佐藤修理  
亮ニ大浦  
分ヲ知行  
セシム

蒲原郡五十嵐保内大浦分之事、任御判旨、可有知行之狀如件、

永正七年八月廿日

爲景

佐藤修理亮殿

〔讀史堂文書〕

○伊佐早謙氏所藏

蒲原郡粟生田内田中又次郎分、爲忠賞、可令知行之狀如件、

永正七年八月廿三日

定實〔花押〕

土澤掃部助殿

土澤掃部  
助ニ田中  
又次郎分  
ヲ知行セ  
シム

二日、丙戌、義尹、廷臣ヲ招キ、宴ヲ張ル、

永正七年八月二日

八一七

八一六



參會ノ人々

永正七年八月三日

八一八

〔實隆公記〕四十 八月二日丙戌晴

依室町殿仰、人々參入、未下刻相公羽林同參仕、有盃酌、時宜快然云々、中御門（三條西公條）新大納言甘露寺中納言、大藏卿、冷泉宰相、相公羽林、頭中將、雅綱等參入云々、（元也）阿野、烏丸、伯中將、藤侍從等同參候云々、（永宣）入夜退出、

三日、（亥）關東管領上杉憲房、父顯定ノ戰歿ヲ幕府ニ報ジ、長尾爲景ヲ討タンコトヲ請フ、

〔武家事紀〕四十

御上洛之路次如何無御心元候、抑一心院事、大概無相違相調候處、去年越州（美）エ罷立以來、彼寺領等有違亂之族、相煩口惜存候、然而不圖御上、於其偏失本意候、雖然於時宜者、事成候間、門主之御前、公方樣被得上意、被差越御代官等、御刷候者、定治部少輔、入道建芳モ不可及、兎角、拙子モ、彌涯分可致異見候、不可有御退屈候、抑去六月十二日、於椎屋一戰、失利候、所存之外候、然處、長尾六郎、高梨攝津守、競來候間、同廿日、遂一戰、可諄討死、（顯定、爲景ト越後長森原條ニ見ユ、不及申次第候、椎屋一戰之後者、妻有之庄ニ其立馬候、國中如此之）

椎谷ノ戰  
顯定戰死

關東ノ形勢

伊勢宗瑞  
爲景ニ應ズ

爲景兩代  
亡ノ主人ヲ

細川高國  
島山尚順  
等ニ幹旋  
ヲ望ム

永正七年八月三日

八一九

上者力不及、關東（江）エ入馬、白井ニ候處、長尾左衛門入道伊玄起逆心、彼同名六郎致一味、沼田之庄内（エ）打入、號相俣地ニ令張陣候間、今（子今）在此方取向候、古河樣無御餘儀、建芳無等閑候間、別條之子細無之候、伊勢新九郎入道宗瑞、長尾六郎ト相談、相州（江）エ令出張、高麗寺前并住吉之古要害取立、令蜂起候、然間、建芳被官上田藏人入道令與力、神奈河權現山於取地利致慮外候間、建芳自身向彼地罷立候、然間、自當方モ勢遣、成田下總守、澁江孫太郎、藤田虎壽丸、長尾孫太郎爲代官、矢野安藝入道、大石源左衛門同名三人、長尾但馬守爲代官、成田中務丞、其外武州南一揆之者、（長尾）罷立候、從去十一日、相攻彼權現山、同十九日夜中令沒落候、（憲房、政盛ヲ權現山ニ攻メテ、之ヲ見ユ、然間所々要害令自沒候由、注進到來候間、相州ハ、先此分候、將亦長尾六郎非殺民部大夫房能耳、重而可諄身體如斯之條、爲家郎亡兩代之主人候事、天下無比類題目候歟、關東越州之爲體、幸淵底御存知之事候上者、以御次而被達上聞、彼六郎并高梨被加御追伐候樣、御申奉頼候、然間、近國之諸士之方エ被成御内書候者何モ可應上意候、特細川右京大夫、島山尾張守、大内左京大夫、伊勢伊勢守方、此分寄々有御傳語、可然樣ニ申御沙汰頼存候由、御届可爲肝要候、關越如斯之上、



永正七年八月四日

八二〇

剩可諄討死之間、公方様御入洛御禮可申上候事延引彌罷失本意候、少モ靜謐之形ニ候者、可言上仕覺悟候、隨而就武州松山之儀、被成下御内書候間、○義尹、顯定、憲房ニ命ジ、伊勢盛正ニ、其舊領越後松山保ヲ見ユ、先其御禮、亦者越州之還付セシムルコト、六年十二月二十四日ノ條ニ見ユ、先其御禮、亦者越州之體、如此之次第、爲可達上聞、雖老者候爲御請木村リ、○武家雲箋中村ニ作式部入道差上候、能々有御面談、可然様御取刷憑入存候、萬端難盡紙上候間、令付與彼口上候由、可得尊意候、恐惶敬白、

八月三日

(上杉)藤原憲房在判

拜呈 上乘院御同宿中

○武家雲箋歷代古案、古證文異事ナシ、

〔相州兵亂記〕 二 權現山合戰之事

○上略、憲房上田政盛ヲ權現山ニ攻メテ、之ヲ收ム、則憲房使者ヲ以テ、京都ヘウツタルヘ申、六郎ヲ可誅ヨシサ、ヘ申、其狀ニ云、○書狀、武家事紀ニ同ジキニ依リ、略ス、

〔足利季世記〕 二 義晴御誕生之事

(政世)信濃ノ高梨攝津守、爲景ニカタラハレ、越後エ打越、椎屋ノ合戰ニ打勝、顯定ヲ打取シカハ、憲房不叶上州エ歸リケリ、此由京都エ注進ス、○上略

四日、子、戊二尊院念空純宗參内ス、

〔實隆公記〕 三四十

八月四日、戊子、天晴、○中略

二尊院長老宗念、空參内、予内々申入之、御對面云々、

八日、辰、壬近畿大地震、大神宮ヲシテ、二星合、地震等ノ變異ヲ祈禳セシメラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕 〇甲百二

〇山城

二星合并地震、禁中恠異、炎旱、天變地妖、彗星、止雨等御祈之事

二星合并地震御祈事、別一七ヶ日可抽懇祈之由、可被下知神宮之狀如件、

永正七年  
八月八日

(正親町實地)右中將判

(小堀野元)四位史殿

〔後法成寺尙通公記〕 四

(案書)大地震事并勅文、  
八月八日、辰、壬晴、曉大地震兩三度、驚入事也、

今月八日、寅時大地震、傍通天王所動也、

天地瑞祥志云、傍通天王所動也、

京房云、天王所動者、天子吉、大臣受福、

天鏡經云、地動有音、必其國有陰謀、

又云、地動有音、六十日內兵革起戰競、(蜀カ)

永正七年八月八日

八二一



永正七年八月八日

又云、地動有音、天下疾疫大喪事、

永正七年八月八日

從二位安倍朝臣有宣

八二二

九日、巳晴、今朝猶地動、

廿四日、申晴、及晚地、夜又地震、

〔實隆公記〕

三四十 八月八日、壬辰、晴、

今曉大地震、有聲頗大、動數ヶ度、以外事也、占文可尋之、

廿四日、戊申晴、略

今日地震三度、入夜又動、以外事也、

廿七日、辛亥、降、略

伊勢下總來天王寺事有申旨、

九月三日、丙辰晴、早朝地震、

〔拾芥記〕

中 八月七日、夜寅剋大地震、天王寺、廿一社悉顛倒云々、可謂佛法

破滅之時乎、

〔永正元年記〕

七年 八月

一八日、今曉七之過程大地震、在々所々破損、以外之儀也、

天王寺及  
社顛倒

諸所破損

河內剛琳  
寺勸進狀

〔剛琳寺文書〕

内 河

勸進沙門敬白、

請特蒙十方檀那恩助再興河州剛琳寺根本伽藍狀

右當寺者、聖武皇帝勸願建立之伽藍、行基菩薩開眼供養之梵場也、略 于茲

去明應第二癸丑夏、依一國亂、罹兵火者、樓門、中門、三重大塔、六十六部奉納所、

鎮守并業平朝臣造立與院等悉燒失訖、雖然本堂一宇、塔一基、巍然而有之、仍

衆等之願望、相殘蹤跡、憑諸檀那之合力、所欲興梵刹之舊基、永正七年八月八

日曉、依大地震、一寺滅亡、萬民之愁歎不能言詞、雖然本尊無恙、前蹤未聞、希代

之神變也、一刹伽藍之退轉者、衆生捨化之方便也、誠歎之中悅也、略 全文

トシ 剛琳寺、ニ 某、同 寺ヲ再興造營セシム

〔續史愚抄〕

後 柏原院中

八月十日、甲午、被仰地震及二星合御祈於神宮、社

及諸寺、等 同歎、可爲七ヶ日者、時 元

〔岐阜縣古文書類纂〕

五

寫本大般若經與書文節略

飛驒國吉城郡細江村  
所有壽樂寺

十七卷 異筆

永正七年八月八日

八二三

堂塔倒壞



山城大和  
大風

永正七年八月九日

八二四

于時永正七年庚午八月大和山城大風大地震仕天王寺石鳥居ユリ崩シ、  
同藤井寺ノ本堂忽ニクツレヌ、前代未聞ノ世間ノサタナリ、即時ニ旦那  
鳥居同藤井寺モ造立候、

〔曆仁以來年代記〕

當今後柏同七、

高潮

八月七日夜大地震、天王寺石鳥居崩ル、浦々高鹽充滿、波荒ノ人家損失云々、

〔天王寺誌〕

乾

後柏原院

天王寺如意輪觀音  
頭破損ス

庚午永正七年八月八日大地震、金堂如意輪御頸破損、

〔華頂要略〕

多武峯寺雜記

今年天下大地震、天王寺以下廿二ヶ所顛倒、

〔異本塔寺長帳〕

八月七日大地震、

〔足利季世記〕

義晴御誕生之事

同年ノ八月七日ノ夜、大地震ヲヒタ、シクシテ、國々堂舍佛閣顛倒シ、天王  
寺ノ石鳥居モタラレケリ、其地震七十餘日不止、仁記異事ナシ、應

餘震七十  
餘日

九日、癸巳禁中御樂、

春鶯囀

〔實隆公記〕

三十四 八月九日癸巳晴、略○中

今日御樂春鶯囀珍重曲也、可聽聞由有仰、明日又室町殿可有御參、可參之由  
等同仰也、可隨躰之由申入了、雖然不參、

今日春鶯囀一具祕曲舞立云々、御所作風管人々、參仕人可尋、及晚甘黃入來、  
神祇權大副吉田兼俱、幕府ノ諮問ニ依リ、神職輩自身殺害ノ事ニツキ、意  
見ヲ具申ス、

〔侍所沙汰篇〕

一 神職輩自身殺害事 永正七八九

制戒勿論也、但爲他有取懸之儀者、爲拂災臨期及不慮之殺害事者、不可爲  
自科之由、先段事舊訖、神道者以道理爲正直之謂、將亦仰他人致其沙汰事、  
古今不及猶豫者也、就中父雖有自身殺害儀、其子補神職例連綿哉、奉公外  
様諸國御家人等、乍居大社神職致合戰、并自身殺害事眼前哉、慙以代官勤  
其神役件神領自專事不可勝計者哉、以之存之、殺害之咎不可及其子孫者  
乎、

八月九日

吉田從二位兼俱

永正七年八月九日

八二五

父自身殺  
害ノ事ハ  
ルモ子ハ  
神職ニ補  
スルノ例  
諸國家人  
等神職ニ  
アリテ合  
戦ニ出ヅ  
ル場合



大内義興、犬追物ヲ其第二興行ス、

〔實隆公記〕四十 八月九日、癸巳、略○中

細川高國  
參會ス

今日於大内宿所有犬追物、右京大夫等罷向云々、

長尾爲景、舊ニ仍リ、越後長松院領及ビ其末寺領ヲ郡司不入ノ地ト爲シ、諸課役ヲ免除セシム、

〔上杉家文書〕

當院領并諸末寺領事、任永正五年十二月廿七日御判旨、郡司可爲不入、次去文安六年六月五日性景（長尾邦景）同實景如判形、院領永代停止諸役者也、仍如件、

永正七年庚午八月九日

平爲景（長尾）

長松院

仲懷和尚

○越後守護上杉定實、長松院領及ビ其末寺領ヲ郡司不入ノ地ト爲ス  
コト、五年十二月二十七日ノ條ニ見ユ、

十日、甲午義尹、參内ス、

〔實隆公記〕三十四 八月九日、癸巳、晴、略○中

明日又室町殿可有御參、可參之由等同仰也、

十日、甲午雨降、

實隆參内

武家柳十荷、折十合被進禁裏、可有御參之由、内々勅定處、八過程可有御參云々、阿野來臨、委細演說、（李綱）○中 申刻許、室町殿御參内、中御門新大納言（松木實綱）以下參會、擁笠相公羽林遲參、不參會、有召之間、予參内、於御三間有一獻事、予御請伴也、予前言綱朝臣、宗藤、又時々、隆康朝臣役送也、公武時宜快然、七獻也、三獻室町殿御酌、五獻予候御酌、七獻相公羽林候御酌、殘天酌也、種々御言談等有之、人々歌舞快然、退出之後、夜半鐘動、

十一日、乙未、霽、略○中

早朝冬、（鳥丸冬光カ）朝臣爲室町殿（行カ）爲御使來、被仰昨夜御祝著之儀、畏奉之由申入之、

〔拾芥記〕

中 八月十日、雨降、室町殿内々御參内、

十二日、丙申邦高親王、伏見ニ赴カセラル、

〔實隆公記〕四十 八月十二日、丙申陰、略○中

今日李部王、令趣城南給、時正中御看經云々、

十八日、壬寅、晴、

永正七年八月十二日



實隆ニ物ヲ賜フ

永正七年八月十三日

自城南柿餅等鬚籠ニ賜之

八二八

御歸還

廿二日丙午晴

伏見殿今日自城南還御入夜參入有盃酌數刻御雜談

十三日丁酉大内義興京都上下米場座中ヲシテ洛中諸口駄米ヲ其座以外ノ小賣在所ニ付シ、マタ他所ニ於テ市ヲ立ツルヲ禁ゼシム、

〔古文書〕 三集

米場座中

洛中諸口駄米事背先規近日付置小賣在所次於他所立市事爲新儀之條如先例可付場之由任御下知之旨堅固可申付之狀如件

永正七年八月十三日

興重

興宣

弘胤

上座下座 米場沙汰人所異古文書事ナシ

○幕府米場座以外ニ於テ洛中諸口駄米ヲ賣リ、マタ別ニ市ヲ立ツルヲ禁ズルコト、六年四月二十二日ノ條ニ見ユ、

十四日戊戌義尹、猿樂ヲ興行ス、

〔後法成寺尙通公記〕四 八月十四日戊戌晴今日於大樹有猿樂高國細川申沙汰

云々三條西院前内府以下公家方數輩參申云々、

〔實隆公記〕三四十 八月十四日戊戌霽略○中室町殿猿樂細川申沙汰也、

十五日己亥太白星、軒轅宮星ヲ犯ス、尋テ、陰陽頭土御門有宣勸文ヲ獻ズ、

〔後法成寺尙通公記〕四 八月十七日辛丑雨降略○中

〔宋書〕太白犯軒轅宮星勸文事、有宣卿勸文如此、

今月十五日寅時太白犯軒轅宮星、相去七寸所

天文要錄云、太白犯軒轅宮星者、四兵相攻撃、

又云、五星犯軒轅宮星者、大將軍慎之、

又云、五星犯軒轅宮星者、有逆賊臣、天子慎之、

黃帝曰、五星犯軒轅宮星者、必火災起、

又云、五星犯軒轅宮星者、天下亂万人驚也、

永正七年八月十六日

從二位安倍朝臣有宣

連歌御會、

永正七年八月十四日 十五日

八二九

細川高國申沙汰實隆等參會ス



永正七年八月十五日

八三〇

〔實隆公記〕

三四十 八月十五日、己亥、陰、略、中

及晩參内、御連歌也、中書王、中御門大納言、甘露寺中納言、冷泉宰相、姉小路宰相、(宣施) 綱朝臣、(中山) 康親朝臣、執筆、入夜更終功退出、

○邦高親王、和歌會ヲ行ハセラル、コト及ビ倉内貞季、和歌會ヲ行フコト、便宜左ニ合敘ス、

〔實隆公記〕

三四十 八月十五日、己亥、陰、伏見殿五首和歌、(邦高親王) 内府三首、(備法輪三條實季)

〔下總集〕

秋下 永正七年八月十五夜、民部丞貞季、倉内、もことにて、おなし心

夜よめる、

夜もすあらおきゐてまゝふ心、夜わらふく月も空ふゑるらん

幕府、山城松尾社神人山田兵庫助某ノ、前將軍義澄ニ通ズルヲ疑ヒ、其給恩田ヲ、同社家ヲシテ進止セシム、

〔松尾神社文書〕

〇四 山城

松尾社神人山田兵庫助事於進退者、與同御敵實否可被遂糺明、至給恩田地者、任先例、爲社家、令進止之、可被專神役之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正七年八月十五日

(飯尾之秀) 下野守(花押)

(飯尾長徳) 散位(花押)

當社神主殿

十六日、(庚子)山城實相院門跡領同國岩倉郷内大工田沙汰人某出奔ス、山本兵庫助、郎從ノ跡ト號シ、其地ヲ押妨ス、是日、幕府、之ヲ停止シ、同門跡ヲシテ、所務ヲ全ウセシム、

〔實相院文書〕

〇二 山城

御門跡領城州岩倉郷内大工田事沙汰人左衛門太郎男、依過分私曲、令遂電處、山本兵庫助、號郎從跡、無謂相語土屋與次押妨、言語道斷次第也、爲門跡進退、自今可被成補任云々、退違亂之族、可被全所務由、被仰者也、仍執達如件、

永正七

八月十六日

(松田) 英致(花押)

(飯野) 長俊(花押)

實相院御門跡雜掌

實相院御門跡雜掌申、城州岩倉郷内大工田沙汰人左衛門太郎男、依過分私曲、令遂電之處、山本兵庫助、號郎從跡、相語土屋與次、無謂押妨、太濫吹之至也、

永正七年八月十六日

八三一

土屋與次  
ト共ニ押  
妨ス

執筆中山  
康親

邦高親王  
和歌會  
倉内貞季  
和歌會

伊勢貞仍  
ノ歌



永正七年八月十八日

八三二

自往古爲門跡成敗被成補任、被申付之上者、任本所下知之旨、年貢等嚴密可沙汰渡當代官之由也、仍執達如件、

永正七

英致(花押)

八月十六日

長俊(花押)

當所名主沙汰人中

十八日、壬寅、御靈祭、

〔實隆公記〕

三四十 八月十八日、壬寅、晴、略、中

御靈祭也、

前權中納言從三位柳原量光薨、

〔公卿補任〕

三四十 前權中納言從三位藤原量光、六十八、八月十八日卒、今秋自因

是秋因幡  
スヨリ上洛  
法名明寂

〔實隆公記〕

三四十 八月十八日、壬寅、晴、量光卿今日逝去云々、不便々々、

十月十日、癸巳、晴、略、中

師象朝臣來、左兵衛權佐資定除服復任、今日宣下云々、今日則出仕、初度也、

子資定除  
服出仕

十四日、丁酉、晴、略、中

遣使者於柳原、資定一昨日

〔公卿補任〕

二四十 參議正四位上藤原量光、二十、父正二位行權大納言資綱卿、

官歷  
初名尙光

母、享德三年正月五日敍爵、康正三年正月五日從五位上、寬正二年三月廿

八日任右兵衛佐、同四年正月五日敍正五位下、同十二月五日任右少辨、同十

月廿日敍正五位上、同五年十二月十九日補藏人、文正元三月廿九日轉左少辨、

同四月廿八日爲大嘗會悠紀所行事、同十月日兼近江守、大嘗會應仁元十一

月一日轉右中辨、文明元十一月二日轉左中辨、同十二月廿日敍從四位下、同

二年三月廿七日敍從四位上、同十二月十八日補藏人頭、同三年四月十一日

敍正四位下、同九月六日兼文章博士、同四年正月廿一日敍正四位上、改量光

同六年右大辨、同七年正月廿八日任參議、元藏人頭、右大辨如元、同八年十二

月廿九日被仰敷奏、同九年正月六日敍從三位、八月十五日轉左大辨、

同日補造東大寺長官、十二月卅日任權中納言、同十六年十二月廿一日辭、同十

八年七月廿三日還任、同日兼右衛門督、爲檢別當、八月七日辭諸職、

永正七年八月十八日

八三三

量光  
ト改



永正七年八月十八日

〔尊卑分脈〕

藤原氏 内鷹孫  
柳原

八三四

資綱

量光 權中、從三、檢別當、右衛門督、參木、左大辨、近江守、右兵佐、永正七八八、薨、六十三、法名明寂、

資緒 從五世下、

資定 權大民部卿、按察使、右兵佐、參木、左大辨、

女子 權中納言、隆康室、

〔諸家系圖纂〕

日野一七下系圖

資綱

量光

策、五藏頭、文章博士、參議、左大辨、檢別當、右衛門督、權中納言、從三位、獻大嘗會和歌、文正、本尚光、永正七年八月十八薨、六十三歲、

資定

〔參考〕

〔花押彙纂〕

部中之 柳原量光

蘭墨女

○公爵近衛文麿氏所藏  
柳原量光國郡卜定次第

十九日、癸卯、權大納言松木宗綱、伊勢二下ル、

〔公卿補任〕

五十四 權大納言正二位藤宗綱、六十八 八月十九日下向勢州、

〔實隆公記〕

三十四 八月十七日、辛丑、雨降、○中

中御門新大納言可令下向勢州云々、爲暇請晚頭來臨、勸盃、息侍從同道、  
十九日、癸卯、雨降、○中

中御門新大納言今晚下國、

〔嚴助往年記〕

上 八月十九日、里下國、

二十三日、丁未、邦高親王、三條西實隆二物ヲ賜フ、

〔實隆公記〕

三十四 八月廿三日、丁未、天晴、

永正七年八月十九日、二十三日

八三五

子息宗藤  
ヲ同道ス



永正七年八月二十四日 二十七日

八三六

自伏見殿茶十袋賜之、

二十四日、戊申義尹、内書ヲ越後守護上杉定實ニ贈リ、入國ヲ賀ス、

〔御内書案〕 乾

今度入國之事、早速達本意由注進到來、目出候、委細細川高國右京大夫可被申候也、

八月廿四日

上杉兵庫頭とのへ

○定實、長尾爲景ト共ニ佐渡ヨリ越後蒲原浦ニ入り、上杉顯定之ヲ撃  
タントシテ、久下信濃守ヲ軍ニ會セシムルコト、本年四月二十日ノ條  
ニ、又顯定、爲景ト越後長森原ニ戰ヒテ、敗死スルコト、同六月二十日ノ

條ニ見ユ、

二十七日、辛亥遠江海嘯、今切崩ル、

〔皇年代略記〕 七年永正八月廿七、遠州今切崩出云々、

〔足利季世記〕 二 義晴御誕生之事

今切ノ渡

八月廿七日、廿八日兩日ノ間ニ、遠江國ニ大浪オヒタ、シク來リ、陸地忽ニ  
海トナル、今ノ今切ノ渡ト申ハ是也、略上

三十餘町  
海トナル

〔重編應仁記〕 十 前公方家御没落事

今茲永正六年永正ノ秋、略中八月廿七日、同廿八日ニ、遠州ノ海邊夥ク波打來テ、  
數千ノ在家ヲ流シ捨テ、死亡スル者數ヲ不知、陸地三十餘町悉ク海ト成テ、  
旅人俄ニ船ヲ設テ往行ス、其レヨリ此所ヲ今切ノ渡リト名付ケリ、略下  
○諸國地震ヒ、遠江海溢レ、荒井崎ヲ壞リ、濱名湖ト通ズルコト、明應七  
年八月二十五日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔丙辰紀行〕 今切

遠州荒井の濱より、奥の山五里あり、海となりて、大舟を出入る、むろし舟  
山に控ゞきた陸地ありしが、中比山よりやられ貝おびさし、しをぬけ出  
て、海へ入ける、其跡かくのとく、海とありて、今切と名づく、古よし、古老いひ  
たりといへど、其むろしいう、侍りきむ、むろこし乃華山を巨靈ヲ擘開して、  
水をやど、多事侍るにや、

一葉扁舟寄旅身、潮波通信遠州濱、海山何借巨靈手、我國元來造化神、

永正七年八月二十七日

八三七

山中ノ螺  
貝海中ニ  
入ル



〔新居橋本古事〕今切之事

一今切なる事、永正八年八月廿七日、又明應八年己未六月十日トモ高波の大變有、前澤西荒海切込、湖水一面ふなる、橋本の驛、日ヶ崎、猪鼻、濱名橋、海邊の民家不殘流失、溺死す、溺死ス海邊の田畑凡壹万五千餘白砂となる、よつぐ白菅より荒江村に往來を作り、前澤の宿迄舟ニテ通路する、領主より舟越のもの四拾餘人地所免許せられ、上下に渡舟いふに也、明應百三年後、慶長五年に初く御關所をえらむ、神君關ヶ原御陣の時、江馬與右衛門與力同心相具し關を守る、番所を、山崎村刑部左衛門の家を引て、船小屋の隣に建く、同六年、御代官彦坂文右衛門荒江支配となる、元和元年、天下一統なし給ひて、御關所地所廣免御作事有て、御法度正敷、荒江并東西海川に法令御觸有て、此時御關所へ五千石付給ふ、服部權大夫、同奎之助與力拾人、同心廿人、江戸より在番として、江馬氏に代く相勤む、在番の士者都呂村に屋敷在て、代り合相固ル、

〔遠江國風土記傳〕一 濱名拾郷

三箇日 舊名英多、阿加後云中之郷、今十三村、在猪鼻湖四邊、說名如郡、關正北五里、至本坂六里、慶長以後號三箇日、略下

橋本驛等 没ス

番所

關所領

三箇日

驛家 西至本坂岑、一里十五町、東至引佐山、一里餘、

按、續日本後紀曰、雖淳和天皇天長十年猪鼻驛廢、更令興復云、後小松天皇應永十二年、後土御門天皇文明七年、明應八年、後柏原天皇永正七年等、有急波湖水變爲潮海、○應永十二年及文明七年、蓋當此時、猪鼻驛水没、古道廢、而新以英多郷中三箇日、爲驛家乎、俗以新井宿曰猪鼻者非也、

宇志 高三百七拾三石三升三合、  
舊地水没、而百姓移居高平之處、猪鼻湖中礎石存、  
大崎 高四百七拾三石四斗五升壹合、

大崎與館山相對之海中一里、古老曰、昔細江之橋場也、本坂道通猪鼻驛之橋場也、故濱名橋有二所、橋本與大崎也、

猪鼻岩與下尾奈相對、セト迫戸、渡凡三十步、自迫戸北猪鼻湖也、東號細江、

下尾奈 高三百九拾石五斗八升壹合、地高平、在湖西、蓋猪ノ鼻驛水没、而百姓移于茲乎、

猪鼻驛 今七

續日本後紀曰、淳和天皇天長十年冬十月癸酉、遠江國濱名郡猪鼻驛家廢來稍久、今依國司言、遣使檢其利害、更令興復、式、濱名郡猪鼻湖神社、驛馬曰

宇志

大崎

迫戸渡

下尾奈

猪鼻驛



永正七年八月二十七日

八四〇

猪鼻、按湖水為潮海、地理大變矣、猪鼻驛所在、當猪鼻岩之海中也、與荒井宿不同、今視之、驛社共沒而存者一小社、與猪鼻岩而已、

新井

濱名郡中之鄉、村五、關ノ西北十町、

新井、本字荒井、古歌詠安禮乃崎、乃崎、高三百七拾五石、四斗四升、貳合、

荒井、舊非鄉村宿驛之名、而海岸石碕之名也、此所南海非時波洲渚大荒、故曰荒也、萬葉集高市連黑人歌曰、何所爾可船泊為良武安禮乃崎、榜多味行之棚無小舟、後為村號、舊荒井中荒井等地、水沒亡人家、古老曰、今荒井者、古中之鄉也、古荒井在關東海中十二三町、應永十二年、文明七年、明應八年、及永正七年等、有急波、破荒井崎、湖水變為潮海矣、日箇崎、千古、北山千古、舊荒井、中荒井、同時為海、於今切所、號本荒井、於松原中、云中荒井也、礎石於今存焉、而後寶永四年十月四日、地震大波、關東十二町水沒、地形大變矣、昔時橋本、新井各千戶鄉也、ト云リ、

驛家同所、水驛、

關同所、新井、住吉社、在白洲濱、

自關西至橋本、新道八町、又西至舊白須賀、八町、

橋本鄉

荒ノ崎

富永政愈ノ記事

橋本鄉、村三、關ノ正西十五町、湖水與潮海之間、有洲崎、昔ハ通舞澤驛家、湖水入海所、渡黑木橋、故曰橋本、

荒之崎、萬葉集高市連黑人、詠安禮乃崎、註新井宿、西起源太山、東對舞澤驛家、長

一里、廣或拾町、或二三町、有松、古驛路也、崎中央有莊塚之碑石、紫、赤、碑石合、

村越崎南北相對、是昔二郡之堺乎、呼是碑石、謂庄塚之石、碑文如、有若無、

寶永四年、關司政愈書曰、應永十二年、大波破此崎、或曰、文明七年、明應八年、

六月十日、甚雨大風、潮海與湖水之間、驛路沒、日箇崎千戶水沒、在關東南、

年八月廿七日、波濤中斷於驛路、又破橋矣、從是以來、湖水變為潮海、橋本

驛家沒置、新井宿也、寶永四年十月四日、地震、舉波三度、各高壹丈計、崩關

潰家三百四十八戶、溺死二十一人、亡船四十八艘、渡海絕五日、吉田城主

牧野祭酒之臣富永政愈、為關戊、當難所誌置也、寶永四年十二月筆記、

今切海關與前驛中間、海路壹里、政愈曰、渡海二十七町計、船百八艘、水主三百

六十人、一日渡船廿五艘、水主五十人、夜番船九艘、水主十八人、舞坂結船十

六艘、水主三十二人、充非時之用、非番船六十艘、水主百廿人、充要用、謂夜番

船、曰部番、

永正七年八月二十七日

八四一



永正七年八月二十八日

切所度ハカリ時開時塞不常也

海路至氣賀五里通舞坂凡廿七町渡中立落漂昔立之於細江

〔遠江國風土記傳〕

二 敷智郡倭名 鈔淵

所以號敷智者淵也細江之水爲淵故號敷智乎

昔廻澤與橋本之間陸地驛路也半途有庄堺石石與村越崎南北相對是濱名與淵二郡之堺歟堺内有村號蛭田赤坂柴江舊荒井應永十二年明應八年永正七年等有波斷驛路併鄉村水沒爲海故二郡之舊地大變矣

〔東海道名所圖會〕

三 今切後土御門院御宇明應八年六月十日大地震して入海さあるこれ今切といふ其後後柏原院御宇永正七年八月廿七日螺の貝出て山崩き川埋もれ舞坂の原淺破り深淵さなる ○下略

二十八日壬子善法寺興清水石清水八幡宮寺社務職卜爲ス

〔石清水文書〕

菊六 大路文書

やとさの玄やむの事さんかう寺興清こう源盛さい申候よし御心え候さんさちし候ては玄うるへうらむ候興清ヲシテ石清水八幡宮造立ヲ沙汰セシメラルコト八年十二月十五日ノ條ニ見ユろさくそ望やくなくいりき申さし候ゆめてさく御得しめし候へく候るをまての玄よくの事御心え候よし心えてよく申つうとされ候へ

女房奉書

く候よし申とて候し源盛

〔切封ハ巻〕

ひやうゑのりまごのへ

長橋局消息

さんかうし玄やむ返々めてさくこそ候へとさくし迄百疋給候思ひもより候ぬ事よて御さつうしくこそ候へ昨日ひひ万入候てきさんよも入候て心のやうに思ひ万いらを候さてく御得しめすまよ候はんをるごよく御心え候てつさへ万いらをられへく候し源盛

〔石清水文書〕

菊六 大路文書

〔折封ハ巻〕 善法寺雜掌

前丹後守長秀松田

石清水八幡宮寺社務職事早任先例可被執務之由所被仰下也仍執達如件

永正七年八月廿八日

前丹後守花押

上野介花押菅原重基

永正七年八月二十八日

八四三



永正七年八月二十八日

善法寺雜掌

○興清ヲ石清水八幡宮寺社務職ト爲ス日明カナラズ姑ク幕府ノ奉書ニ據リテ揭書ス、

義尹、山城曇花院ニ臨ム、

〔實隆公記〕四十 八月廿八日、壬子、天晴、略 中

初度

今日大樹渡御曇花院云々、初度也、

山城本圀寺權僧正日了寂ス、

官歴

〔本圀寺年譜〕七 明應七年、戊午、十一祖法令如式、二月、百卷山主兩役呼召、密

日堯本圀

寺ヲ退キ

唐ニ弘教

セントス

日堯ノ讓

ヲ受ク

語曰、不計受讓主于當山既而十年、欲退職隱栖、勿駐矣、兩役聞驚矣、再止師既

今壯年何退去、云山主密有思、抑之在懷、遂持師行跡、憶弘教于唐、爲之將切磋

琢磨、在于寺務事不密、故退山修之也、役駐之無道也、乃報隨意、山主曰、然則補

處定堯師百卷嫡弟勸行院日了、行解兼備警德無物、請之爲山主足、兩役諾矣、堯師

手書讓狀與之、三月朔去山、隱栖攝州尼崎長遠寺、年三十八、隱栖尼崎、意赴唐非也、

第十二世勸行院日了聖人、十三年在位、入請待登山如先規、

八年、己未、十二祖、法務如先規、

九年、庚申、十二祖、寺務如常、莊嚴講如先代、三問一講、月以爲常務之、

文龜元年、辛酉、十二祖、寺務如定、

二年、壬戌、十二祖、寺務如常、

三年、癸亥、十二祖、法務如常、三月九日、十二祖日了任權僧正、年五十四、口宣

參內如先規、著緋衣長絹、長柄乘輿、

永正元年、甲子、十二祖、寺務如定、

二年、乙丑、十二祖、山務如常、

三年、丙寅、十二祖、山務如常、

四年、丁卯、十二祖、山務如常、四月朔、百卷傳師百年忌營大會如先規、五月廿七日、

堯師小祥忌營法會、五月日堯寂スルコト、永正三年五月二十七日ノ條ニ見ユ、

五年、戊辰、十二祖、寺務如常、

六年、己巳、十二祖、寺務如定、

七年、庚午、十二祖、法務如常、正月十二日、百卷經師百遠忌營法會、如先格、

八月廿一日、感微疾、兼知死期、召兩役告終焉、補處弟子法性院日遵、既先任官、

永正七年八月二十八日

權僧正ニ

任ズ

疾ム



寺ヲ日遵  
ニ讓ル

十三祖日  
遵

太田持資  
ノ季子

略傳

勸行院ト  
號ス

太田持資  
道契アリ

永正七年八月二十八日

天氣秀發者、宜應山器、兩役諾、乃手書讓狀與遵、遵固辭不止、遂領矣、廿八日、召遵告浴、著新衣、唱題誦經、以未下刻安祥化矣、年六十一、葬儀修喪如先格葬、

第十三祖法性院日遵聖人、在位十二年、

此師俗姓太田道灌齋、請式登山、令如先格也、

〔本化別頭佛祖統記〕

勅賜本國寺歷代列傳

第十二代勸行院日了上人傳

師諱日了、號勸行院、智行兼備、德蓋一會、成華山家猶子、任僧正位、鎌倉上杉家臣有太田左衛門太夫持資者、聞師德風、道契尤厚、長祿中、持資新築武州豐嶋城、有天照八幡兩社、神異靈驗、持資振護法力、千里易地、引于本國寺、是時寺門不振、松永彈正久秀造三光堂、咸言師道化之餘澤、在位十年、以永正七年庚午八月二十八日泊然而化、

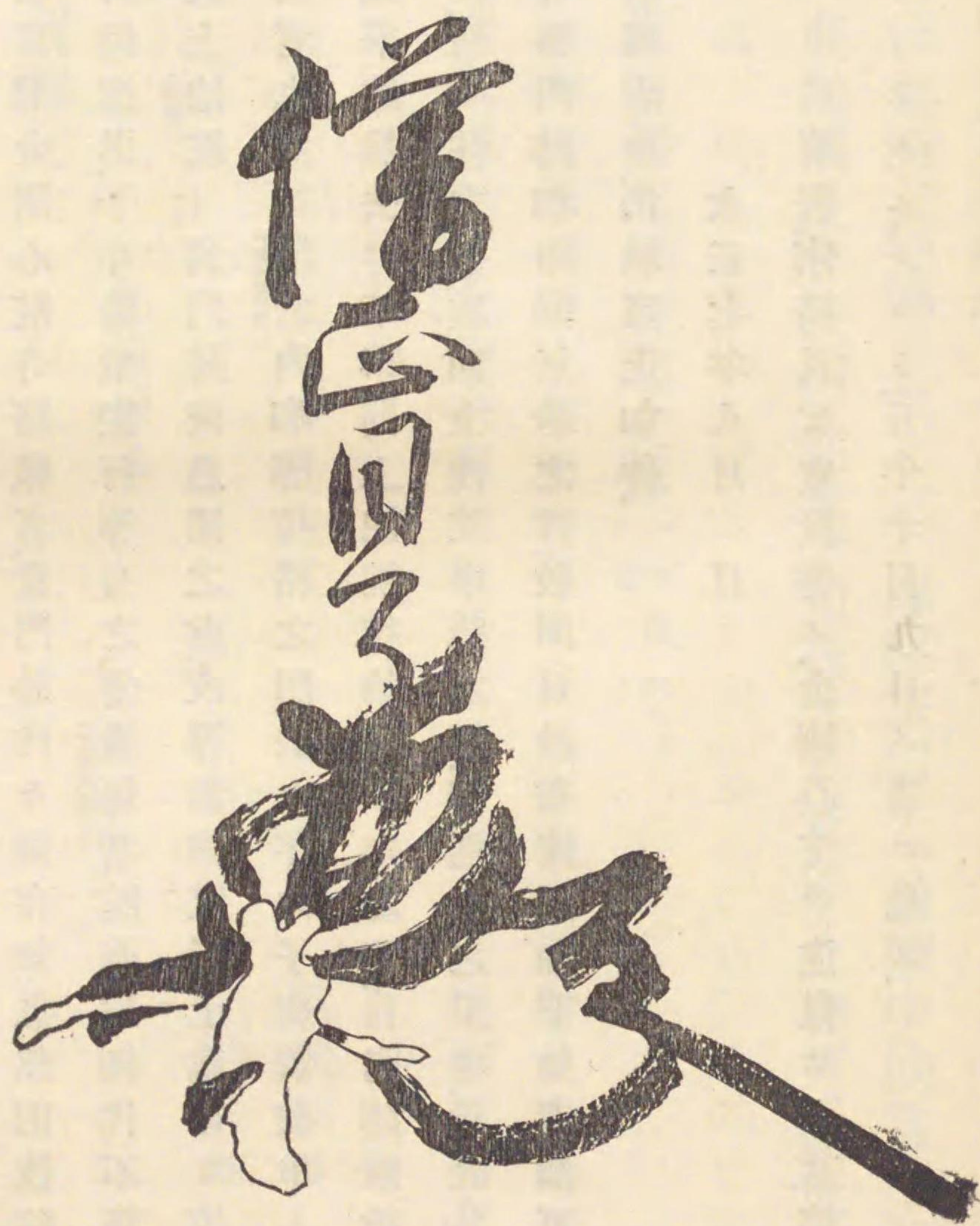
○日了ヲ權僧正ニ任ズルコト、文龜三年三月九日ノ條ニ、幕府、日了ヲシテ、訓經ヲ講ゼシムルコト、同年十月十六日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕

之釋家

日了



○本國寺文書(企城)  
永正三年丙寅閏十  
一月十九日附讓狀

是月、醍醐寺三寶院、上池院宗精及比舟橋宣賢等ノ、同院門跡領鳥羽金剛心院寺務職ヲ違亂スルヲ、幕府ニ訴フ、

永正七年八月是月

八四七

八四六



永正七年八月是月

〔三寶院文書〕

五十三  
○山城

〔三寶院〕  
〔三寶院御門跡雜掌申狀 永正七八金剛心院〕

三寶院御門跡雜掌謹言上

右鳥羽金剛心院寺務職者當門跡代々御存知也然則彼院家敷地心院剛事、  
爲御進退于今嚴重勲行等有之爰後〔三寶院〕智院准后御代不斷御藥被用之間一  
且上池院〔宗廟〕仁爲門跡被恩補之處彼等無謂直歷上裁每々掠給之條不及御覺  
悟者也同又清宮內卿等掠給之間去々年此子細依被申入之如此被成御下  
知畢雖然去年不事問上池院掠給御下知之間自門跡雖被歎申之不及御糾  
決以一往之儀重而上池院申給之條御迷惑之至也所詮具被遂御糾明爲彼  
寺務門跡御領知無紛之旨被聞召披被成返如下知者彌可被抽天下安泰御  
祈禱者也仍粗言上如件

永正七年八月 日

○幕府宗精及比宣賢等ノ金剛心院ヲ違亂スルヲ停メ三寶院ニ安堵  
セシムルコト五年十月九日ノ條ニ見ユ

三寶院義  
賢藥料ト  
爲ス

九月大寅盡

二日、乙幕府、叡慮ヲ奉ジ、下津屋宗信ノ前權中納言中院通世所領加賀  
額田莊加納及比八田莊等ヲ知行スルヲ停メ、尋テ、通世ヲシテ、之ヲ安堵  
セシム、

〔京都帝國大學所藏文書〕

中院文  
書二

家領加賀國額田庄加納八田庄等代官職事號朝日跡雖被仰付下津屋修理  
亮宗信爲叡慮之條被返付訖所詮任當知行之旨彌可令全直務給之由所被  
仰下也仍執達如件

永正七年九月二日

下野守〔殿之卷〕判  
對馬守〔松田英政〕判

中院家雜掌

〔康親卿記〕

加賀國額田庄加納八田庄等之事爲元祖〔元祖〕以來之領知支證明鏡之處下津屋  
修理亮宗信稱朝日知行分掠取武家下知云々雖然爲叡慮嚴重就被仰出召  
出兩方證文任理運之旨爲武家重及直務之成敗由被聞食訖永退非分之族

永正七年九月二日

繪旨  
武家ノ下  
知ヲ掠取  
ル

幕府奉書



永正七年九月二日

八五〇

爲直務之地、子々孫々可令全領知給之由、天氣所候也、仍上啓如件、

永正七年九月十一日

左中將(花押)

謹上 中院前中納言殿

上書名字

○京都御所、東山御文庫記錄、康親卿別記及比康親卿貫首拜賀次第、異事ナシ、

〔實隆公記〕

二十四

四月十七日、壬寅晴、

季綱朝臣來話、中院家領事、號朝日跡、

下津屋已拜領之、

代被成御下知了、御失念且者、思他所之由云々、所詮

如朝日代官職事、可被申付下津屋之由、被仰下處、於其儀者、忽牢籠之基也、難治之由、就公家歎申間、自禁裏被仰出、勅定上者、不可有子細、但在國之儀、別而可被答仰之處、却而如此、御引汲、難得其意、惣而所領或緣者等、隨其分、面々必可在之、以其好、令在國者、誰人可致朝廷之拜趨哉、在京奉公之輩者、隨分忠節也、賞罰似無其隔、天憐雖殊勝、餘無風味歟、以次此趣、可申勾當內侍之由、武命之由語之、尤無豫儀事也、又號禁裏御倉、當時兩所被塞之、不可然、前々□所也、於今一々所事、可被略之由、執事代訴訟云々、此儀又勿論事也、但勾當等有不受風歟、頗無勿躰事也、

〔參考〕

勅諭ナラ  
細アニハ子  
マ

額田莊  
八田莊

〔越登賀三州志〕

二十四 概覽五

額田庄加納、加納ノ地不可考、八田庄、自正治元年至

中院家所  
領タルコ  
ト三百八  
十年

天正八年、中院家領ト云フ、及ヒ中院ノ慈徳院權中納言通世卿、十一、永正十六年十二月二十二日、於加州薨、同ク慈西院內大臣通爲公、十三、永祿八年九月三日、於加州山内薨ト云フ、文化十一年、中院家ヨリ彼家ノ記録ニ在ト見ヘテ問來ル、然レハ、額田、八田ハ、其頃中院家領ニシテ、而モ通世、通爲、此領地ヘ下向シ玉フト思ハル、其領自正治元年至天正八年ナレハ、其間三百八十箇年也、略上

○紀伊安原及ヒ池田莊國衙分等ノコト、便宜左ニ附收ス、

〔實隆公記〕

二十四

六月十六日、庚子、天霽、

季綱朝臣申紀州安原國衙、田殿并池田等國衙分事、譜代相傳地也、根來塗屋坊致執沙汰之事也、而近年混合御料所之條、迷惑也、可申沙汰之由、一昨日有書狀、今日早申入也、勅答、於池田事者、御料所御代官二見越後守先年所申請也、其外事無御存知之由、有女房奉書、則以書狀申遣此趣云々、

十七日、辛丑、略中

阿野有使者、外田平池田事也、左衛門

紀伊安原  
國衙池田  
等國衙分  
塗屋坊

永正七年九月二日

八五一



永正七年九月二日

八五二

十九日癸卯雨降略○中阿野申池田事以相公（三條西公條）內々申勾當者也御料所二見越後請文被下之何様可見遣阿野也

幕府大内義興ヲシテ山城櫟谷七野社二同國七野内所々散在同社領返付ノコトヲ遵行セシム

〔櫟谷七野神社文書〕○山城

〔附錄〕  
七野神領證文

神宮寺僧徒等嘉吉以來押領ス同志ノ百姓ヲ追放ス

高砂大明神社領之事蓮臺寺領分紛失及難義之由訴申之間所々相改糺明候處支證顯然之上者悉被返付社領畢神宮寺僧等以私之契約嘉吉已來於令下々押領同志之百姓等被爲成追放候七野之内所々散在之田畠早可被沙汰付高砂領之由所被仰下候也仍而執達如件

永正七年九月二日

近江守（飯尾貞連）花押  
下野守（飯尾之秀）花押

大内左京大夫殿（兼興）

〔參考〕

〔雍州府志〕三葛野郡 七野社 在船岡山東南文德天皇貞觀元年冬十

七野社

高砂山下稱ス

一月二十七日（藤原明之）因染殿后所願而所勸請春日明神也則爲内野北野萩野蓮臺野紫野上野平野等七野之惣社因號七野社一說安和年中因冷泉院之所願本社春日明神之外勸請伊勢八幡賀茂松尾平野稻荷六社依之稱七社云爾後宇多天皇之后因失寵祈斯社依靈夢以白砂築大和三笠山之狀遂得寵如初自是諸人有祈願則置白砂於社前依之俗或稱高砂山神職與西氏守之

三日丙辰石清水八幡宮權別當善法寺興清（元長）ヲ同宮護國寺檢校ト爲ス

〔石清水文書〕六菊大路文書

上卿甘露寺（元長）中納言

永正七年九月三日 宣旨

權別當權少僧都興清 宜爲石清水八幡宮護國寺檢校

藏人頭右近衛權中將藤原實胤（正親）奉

〔實隆公記〕四十 九月二日乙卯雨降○中略

八幡別當職善法寺（元長）少僧都補之云々

五日戊午幕府石清水八幡宮權別當善法寺興清ヲシテ變異ヲ祈禳セシメ

永正七年九月三日 五日

八五三



尋テ、マタ東寺ヲシテ之ヲ祈禳セシム、

〔石清水文書〕

六 菊大路文書

天變地妖祈禱事、近日專可被抽懇誠之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正七年九月五日

對馬守(花押)

前丹後守(花押)

幕府奉書

善法寺雜掌

〔廿一口方評定引付〕

五 山城

九月十三日、

一天變地妖、武家御祈事、

自武家傳奏奉公并別當之書狀到來之間、令披露之處、任奉書之旨、自明日

十四 如例上衆尊勝供、下薦仁王經轉讀、一七ヶ日抽精誠、可被進御卷數之

由、衆議所治定畢、

同十五日、

一就天變地妖之御祈之儀、武家奉書到來之間、令披露衆中處、既先日自傳奏

室町殿御祈禱之事、被仰出之間、如例御祈禱勸修之上者、別ニ不及被修、御

卷數二枝、奉行松田對馬守方へ可遣之由、衆議所也、

九日、<sup>戊、壬</sup>重陽節供御祝、廷臣ヲシテ、詩歌ヲ詠進セシメラル、皇子<sup>仁、知</sup>モ亦著  
到百首和歌御會ヲ始メラル、

〔實隆公記〕

四十

九月九日、壬戌、陰雨、重陽幸甚、

詩歌懷紙父子詠進之、<sup>○中</sup>

相公<sup>(三條西公實)</sup>羽林御祝參内、若宮御方著到百首和歌、自今日被始之、詠進之由相語之、

十二月十九日、辛丑、天晴、<sup>○中</sup>若宮御方御著到和歌、今日結願、相公參入、

〔鳳鳴集〕

貞敦親王詩選鳳鳴集

黃花獨有香 永正七年重陽、

菊迎佳節十分黃、秋晚唯看傲曉霜、蓮悴菊衰風露底、此花獨帶麝臍香、

義尹、猿樂ヲ行フ、

〔後法成寺尙通公記〕

四

九月九日、<sup>戊、壬</sup>雨下、細彌九郎來、令對面、勸一盞、今日

大樹ニ有猿樂云々、<sup>(島山義元)</sup>能州守護申沙汰云々、

〔實隆公記〕

四十

九月九日、壬戌、陰雨、<sup>○中</sup>

武家今日猿樂、能登守護申沙汰云々、

結城政朝、其族小峰政重ト陸奥白河ニ戰ヒ、敗レテ、下野上那須ニ奔ル、

永正七年九月九日

八五五

三條西實隆公條父子詠進ス

著到百首和歌結願

貞敦親王御詩

島山義元申沙汰



永正七年九月九日

八五六

〔塔寺八幡宮長帳〕

○岩代

此年（結城政朝）白川殿九月九日（小幡政重）小之殿ゆゑ□□□と

候間、白川殿の上あすへおちらる、（此方へおち申候、）

〔異本塔寺長帳〕

四

九月七日、仙道岩屋ノ兵共、白川小峯城ヲ攻、是家臣一

族小峰隼人政重謀叛内應故也、城主（政朝）結城氏敗ノ上那須ニ走、其子五郎ハ會津ニ逃來、

〔會津舊事雜考〕

六

同七年庚午九月九日、因小峯氏内應而、岩城賊兵入白

川、故白河氏走上那須、同五郎來會津、○會津四家合考、異事ナシ、

〔諸家系圖纂〕

白河七上城

直朝

政朝

彈正少弼道號心江法名道總、上洛ノ時、爲彼飛鳥井殿、イナハ堂ノ内於西房、一日、鞠御會、是饗細川殿一日御請待、於越中（今出川御所對面、永正七年、庚午九月十日没落、）

顯頼

資永

○政朝、岩城親隆ト盟ヲ爲スコト、文明六年二月二十日ノ條ニ、磐城白河鹿島社前ニ、一萬句發句會ヲ興行スルコト、同十三年三月二十三日

ノ條ニ、陸奥石川莊ヲ、同國近津社ニ寄進スルコト、永正二年三月十二日ノ條ニ、同社神人ニ命ジテ、其別當ノ命ニ從ハシムルコト、同四年五月十五日ノ條ニ、又同社ニ、棟別ヲ課スルコト、同七年三月十日ノ條ニ、同國山菅生湯川在家、竝ニ石井郷ノ地ヲ、同社ニ寄進スルコト、同年七月是月ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔白河古事考〕

三 結城歴世事實上 政朝

○上略、政朝、白河鹿島社前ニ、一萬句發句ヲ興行スル條ニ收ム、會津舊事雜考ニ、永正七年九月九日、小峯氏の内應ニよつて、岩城の賊兵白川ニ入、故ニ白川氏上那須へ走り、同五郎ハ會津へきゝるとあり、此小峯内應ノ事詳に知り、さしと雖も、田島むら清光寺の位牌ニ、政朝、永正七年九月十日死すとあり、又相樂七郎右衛門所持ノ結城系圖ニ、永正七年九月十日没落とあり、（結城）此れ等に據れば、政朝乃生害ハ、小峯ヲ岩城を引入、政朝打れしなれべし、入道宗廣以來、白川ハ大家ニ威勢も有し、（結城）諸書に見へ、（結城）此れニ、永正の比より衰、（結城）此れに似たり、此亂などより領地を削られし、（結城）略

永正七年九月九日

八五七

政重謀叛  
内應  
結城五郎  
會津ニ逃

世系  
道號心江  
法名道總

政朝

政重内應  
ノ事明カ  
ナラズ  
自殺スト  
ノ説

結城氏ノ  
衰微



永正七年九月九日

〔花押彙纂〕

部之

結城政朝

八五八

癸酉

○八槻文書(二)

永正七年三月十日書狀

○八槻文書(一)

永正七年七月吉日寄進狀

十二日、<sup>丑</sup>幕府、細川高國ヲシテ、波々伯部盛重ノ、東寺八幡宮領山城上久世莊公文職内本所分ヲ押領スルヲ停止セシム、

幕府奉書

〔東寺文書〕

城○山

東寺八幡宮領城州上久世莊公文職内本所分事、寒河還住之處猶以波々伯部三郎左衛門尉本役押領云々、太無謂云、嚴重伽藍云、無外之靈社、神事法會闕怠以外之次第也、速可止其妨之旨、堅可被加下知、更不可有遲怠之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正七年九月十二日

(松田英教)  
對馬守(花押)  
(曾原基雄)  
美濃守(花押)

(細川高國)  
右京兆代

〔東寺百合文書〕

○ノ山<sup>八</sup>城<sup>三十三</sup>

當庄本所分事、可直務覺悟候處、從寒川方、公文分之未納五拾石之爲請切、預ケ候ヘノ由、此間以安富民部方、石田四郎兵衛方、色々申候、如何候て可然候哉、其の事此方與力ニ申、在所案内者之儀候間、談合可申候、然者報恩寺孫左衛門尉同道候て、急度可有御上候、恐々謹言、

永正七年九月十二日

八五九

盛重書狀



永正七年九月十三日

八六〇

永正七

九月廿四日

波々伯部三郎左衛門尉

盛重(花押)

和田太郎左衛門尉殿

松田英致  
書狀

〔東寺百合文書〕

○イ百二十八之百四十八  
山城

松田對馬守

永正七

東寺雜□御房進之候

英致

久世庄事、房州へ爲上意、懇に被仰出候、我々飯尾近江守兩人爲御使罷向候、

自房州又右京兆へ入魂候て、御返事被申候、且可然候、其子細使者可申候、能

人を進申候、恐々謹言、

十二月十六日

英致(花押)

東寺雜掌御房進之候

十三日、丙寅觀月連歌御會、御夢想ニ依リ、連歌師宵柏ヲ召サセラル、

〔後法成寺尙通公記〕

四 九月十一日、甲子雨降、及從午刻晴、宵柏上洛、一兩日

中可來由被示、

〔實隆公記〕

三 四 十月十一日、甲子晴、略、中

宵柏上洛

宵柏樽代  
及ビ柿ヲ  
獻ズ

宵柏上洛、及晚來臨清談、

十二日、乙丑、天晴、

宵柏來臨、可令進上御樽於禁裏、聊爾不可然歟、不苦者可進上之由也、有何事哉之由返答之處、代物參百疋被進上之、木練柿一折同進上、不思召寄之由勅答、明日良辰御連歌、宵柏可參入之由被仰、則傳達了、

十三日、丙寅、晴、

參内、於小御所有御連歌、中間御小漬如例、宵柏請伴、入夜百句了、有一獻事、相公羽林候陪膳、三獻天酌、宵柏同被召出之、面目至也、四獻御盃引重奉之、予候御酌、各召出之、今日時宜快然、珍重、明月言語道斷殊勝也、於南殿暫見月、宵柏、甘黄等同道退出、同被宿愚亭、

十月三日、丙戌、朝間雨、晝晴、略、中

宵柏申連歌御點被下之、

十一月廿九日、辛巳、晴、略、中

〔春夢草〕  
夢庵今朝歸國、掣電被立寄請暇、

永正七年九月十三日

八六一

宵柏御宴  
ニ侍ス

御點ヲ賜  
フ

宵柏歸國  
ス



永正七年九月十三日

八六二

永正七年八月十一日夜

禁裡御夢想の事承りて、上洛をせし先、御會ままいり、あまさへ發句を申へきやうは有し、い、ごらく申上よをよとに申侍、過分ども、中々申よたへぬとなすき、其夜心中よつゝけ侍し、

およひなきやとの雲の夢うつゝあやしき身共おもやゆる哉

御夢のうちよりは次第をえるしと、先<sup>(三條西實隆)</sup>さき由を、前内府よえきりよ

申え、筆に染らを侍るを、<sup>(後土御門)</sup>に記をくをたなり、

さいは比内のみあるの御夢よ、先皇の御代御連歌あるへたて、發句の宵柏法師申るきよしありしと、まつうちよ御覽ありさきよし、當代のおや務となりしよ、發句よをきて、當座よ申るし、此歌の心よてなむ風情を思ひめぐらし侍とて、

あし曳の山と夜き月を空よをたて月かきさうきすゑのかたし、と云うよ夜申上よりを御覽せられぬるよし、かよりおやせられしと、さてをめぐらるにありありと系りける御とあるな、天曆以往の歌よとてを、はさしく柿本、山邊風體の外、か、たのまをよやあらん、もとより凡夫の見

實隆御夢想記ヲ書ス

宵柏夢庵ト號ス

發句宵柏

協御製

ふ所よあらさきと、凡慮の所詠よ、あらさるへし、おやよ青雲紫宸の夢よ入さくひ、もろこしよ、傳野の遺賢の舟楫輔佐の名を殘し、巫山の神女の雲雨妖艶の情となせるよめしも、そこら有きむ、今この老法師のあゝと葉をきこえあきぬと、叡慮をおとろあしきぞ、いみしへ今道ええよとる事よ、こゝ年比夢庵とよひきさりけるを、かゝふへき事の識の文よやとまであやしくおほえ侍しと、折ふしよ、おに文つとてはつてよ、おをくりしと、思ふこをえぬる感悅、手の舞、足の多む所をえらほとて、九月十日の程よぬりとへのやりきさられしを、ほとにるさしき心さしなるを、おなしき十三日、空のけし、心よく晴て、吾國乃月の名を、おひありぬへきおれなを、御連歌ありとさるへし、彼老人めしくし、おはふらぬへし、發句の下官申へきよし仰られしと、此事を思出て、さらはわさくしよあひたつるへきよし申う、か、法師の發句なり、

空よをきて見む世やい々世秋乃つき  
脇のすあそち御製よて、  
庭よくをらぬ玉し、たのつ花

永正七年九月十三日

八六三



是をせあまふさふらひ言御一座くせむ程は御所のむんあしおもて  
 色つきわさるる山々けりしき御まへの庭の梢をひこつ見せさ終て  
 月いせさる真木の戸口をえむな程とよ夜よい望て事は言御く物  
 などおておやみき万い程昨日うちく見さくしへつて上林下若乃ま  
 う姿彼老人いさか申事侍しをもてせやさるをもむきまや御さあつ  
 ききひくはなれて天酌よてをおなしくたまえ勢し老のめいやく道の  
 先くみつく山のかげよれをしきくして昔の袂にほるまらう  
 れしさは身をつきてありかぬくをさしき取くをのく既醉をうさ  
 ひてほるつるやとよ玄とらく南殿の月をきてそれまあひこもなひつ  
 清光をふみて蓬屋は歸りぬれと宮漏や多きか縁のこる半更をつ  
 参りさる参ふの良辰賞心樂事はとよあひあえすといふるきにこせ

永正第七暮秋記之

古槐散木御判

〔春夢草〕

○紀伊金剛 禁裏御夢想の事ありて宮ノ中よて御會ニ参リ侍

しよ、勅よて發句控りふまつて侍る、九月十三夜、  
空よをたて見ん世や幾夜秋の月

王道の末代迄あらんと、御繁榮ノ事ヲ祝言ニまよてより、空ニ月ヲ置て見  
 ん世いくよご也、日月地ニ不落ト云心也、天子ハ日月ノ位ニテマシマセハ、  
 よそへ侍り、足引の山遠き月ヲ空ニヲキテ月影高キスエノカケハシ、  
 さうき名をおもひせぬ月の夕なり  
 大名はおもひするり、やく出さる也、  
 月ハ待程面白也、十三夜ノ月なれと、早ク出テ諸人ニマツトおもてせぬ  
 ト也、

名に光くゆるる月の一夜なり、名譽アル月ニ相應して、光も一段あきら  
 りあれど、名ニ光くゆるるといへり、  
 よしや月名の世よとてることよひなり  
 くをるごもくるしりらまご也、

〔翰林葫蘆集〕

六 禁裏御夢想紀

維時永正歲次庚午八月十一日夜、今皇帝夢侍先帝、々々曰、命僧肖栢作連歌  
 發句、肖栢諷詠和歌一篇而言、某以此歌意爲句、々則可臨席以奏焉、其歌曰、葦  
 曳之山遠、月於空仁置、而月影高之末之梯、宮漏傳呼、帝夢覺矣、遂以夢事告三



宵柏ヲ攝  
津ヨリ召  
サル

玉杯ヲ賜  
フ

伊勢貞仍  
ノ歌

永正七年九月十六日

八六六

條前内府、々々傳之宵栢、々々于時寓津陽、構一菴號夢、其名不浪設者乎、感嘆無措得々入雒、帝即召見殿前、仍帙筵而連歌、宵栢奉詔首唱曰、空仁置而見世、耶幾世秋月、御製續之曰、庭仁不曇玉敷之露、百句成章、々々畢傳玉杯、帝親酌焉、榮莫以若焉、實九月十三夜也、本朝以此夕、與八月十五夜併以賞之、昔者般高宗夢得說、乃審厥象、俾以形旁求于天下、說築傳岩之野、惟宵、作說命、般道與矣、爾來未聞如是瑞夢矣、帝恭默思道、輔弼良佐、自此而升矣、宵栢其族出自天曆、(皇孫子)後中書王、所謂言通具、(久我)通光者、其祖宗也、俾予記之、不克辭、謹記其略云、

○大館尙氏第觀月和歌會ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔下總集〕 永正七年九月十三夜、伊與守尙氏朝臣亭社會に、月出山、

たうさまや尾上よほもる松乃とれちりよりいつふ秋のよれ月

十六日、(北條)權大納言四辻實仲ヲ罷メ、權中納言北畠材親ヲ權大納言ニ任ズ、  
ズ、尋テ、前參議六條有繼ヲ權中納言ニ任ズ、

〔公卿補任〕 五十四

權大納言正二位藤實仲、(西社)八十九月日辭、

權中納言正三位源材親、(北條)三十九月十六日任權大納言、

正二位源有繼 十月十六日任、(六才)七十

〔京都御所東山御文庫記錄〕 十九

北のさけの中納言玄やうしんをられ候、中納言所まうの時も、色々申入事  
よて候つとも、このさちなにのうともあきやう候、さいおくの身か  
くへちどの申あうら、くむんの事をのく、所存ある事よて候、人よより  
さる御はさ事よ候へりて、ううれぬめ、もつさいあく候、くれく、いきんも  
おほをのやうに、なんちの事よて候へとも、色々申され候事よて候、(前條等附)ま  
まりせをうれ候事よて候、は候、左大辨して申され候へく候、うならま  
このさひのまりりのりて、さいうれぬも申候やうよ、かしく猶おほをられ  
候へく候と申て、あふらの小路さい京して、代くむんにほうさうをいさし  
きさり候事よて候を、うれもいま、一ううにさい國いれなき事よて候、  
この事のをん御代にも、おほしへおほをの事にて候つる、(未造)さしもち在京の  
事も、かしく申と、のへ候やうに、事をつめておほを下され候へく候、

〔實隆公記〕 一四

永正六年十月十三日、辛丑、晴、(有繼)六條前宰相中將來、材  
親卿、(中略)材親ヲ正三位ニ敘スルコト、(略)亞相昇進事所望也、更不可然歟之

永正七年九月十六日

八六七

女房奉書

材親ヲシ  
テ上落シ  
テ拜賀シ  
申サシム

材親權大  
納言ニ昇  
進セシム  
トテ望ム  
見隆ノ意



有繼伊勢  
二下ル

永正七年九月十六日

八六八

由再三命之

十二月八日乙未天晴○中伊勢國司返事今日下之六條相公今日下國云々、  
遣太刀於藏人許謝昨夜申次事了、

〔實隆公記〕

二四十 永正七年四月四日己丑天晴○中

新中納言（廣經）守光來相國座次事等談之○前關白近衛尙通前官ニテ一座宣テ

見ニ伊勢國司亞相所望事同談之勸一盞數刻雜談、

五日庚寅天晴○中

北畠中納言昇進事六條書狀到來、

六日辛卯晴○中

有繼卿有書狀材親卿昇進所望事也遣愚報了、

〔實隆公記〕

三四十 八月十六日庚子晴朝間雨○中

材親卿昇進事以書狀（自之）禁裏有勅答、

十七日辛丑雨降、

（松木宗綱）中御門新大納言可令下向勢州云々爲暇請晚頭來臨勸盃息侍（宗盛）從同道

廿六日庚戌天陰入夜雨○中

六條前相公來材親卿昇進所望□狀案談合之間愚意分申了、

九月十五日戊辰晴○中

六條前相公來材親卿書狀到來昇進事以愚狀內々執申入之處勅許之分也、  
猶以左大辨可申入之由申了、

十六日己巳晴入夜雨、

招六條前宰相彼勅答之樣申聞之以左大辨可披露之由申合了、

十月五日戊子晴○中

抑伊勢國司昇進御禮貳千疋令進上禁裏愚狀相副之進了私禮五百疋送之、

六日己丑晴、

國司御禮物以外不思議之物云々件間事以使者六條問答取替進上之云々、

十日癸巳晴○中

材親卿昇進事宣下云々（師象朝臣來）

十二日乙未雨降入夜風烈、

抑有繼卿中納言所望事御談合以外公條卿昇進事內々有勅問事有仰旨愚  
存申之彼是別繼之、

永正七年九月十六日

八六九

勅許

材親卿昇進  
御禮トシ  
テ二千疋  
獻上

取替ヘテ  
獻上ス

宣下

有繼權中  
納言ニ昇  
進セシム  
トテ望ム



永正七年九月十六日

八七〇

十五日、戊戌晴、六條新中納言參内、於此亭用意、相公冠借之、勸一盞了、十六日、己亥、晴、

師象朝臣來、今日可令下向勢州云々、書狀所望之間書遣之、有繼卿同今日下向云々、抑今度材親卿昇進事、并有繼卿昇進事等、條々仰之子細等別注之、

〔四辻家譜〕

實仲 永正七年九月日八十歲辭退、〇實仲ヲ權大納言ニ任ズルコト、明應十年十二月二十九

日ノ條ニ見ユ、同年月日出家、〇諸家傳異事ナシ、

〔諸家傳〕

十一條 有繼 永正七年十月十六日、權中納言、八十歲

〇材親、出家スルコト、八年三月二日ノ條ニ見ユ、實仲、權大納言ヲ辭スル日詳ナラズ、姑ク是日ニ掲グ、又烏丸冬光、右大辨ヲ兼ヌルコト、便宜左ニ合敘ス、

〔公卿補任〕

五十四 參議正四位下藤冬光、廿八十一月十三日兼右大辨、

〔諸家傳〕

六下 冬光 永正七年十一月三日右大辨、

安藝毛利興元、福原廣俊ヲシテ、其父貞俊ノ家督ヲ相續セシム、

〔福原家文書〕

福原家督之事、任親父貞俊讓與之旨、不可有子細候、堅固可被主務者也、仍爲

後證之狀如件、

永正七年九月十六日

興元 御書判

福原彌五郎殿

廣俊興元  
刀錢馬太  
ヲ呈ス

其方遺跡相續、千秋万歲候、仍爲祝言御禮儀、烏目、千疋馬、太刀到來、祝著候、是も太刀一腰進之候、表祝儀計候、恐々謹言、

九月十六日

興元 御書判

〔福原家譜〕

八 系圖并傳書

貞俊

廣俊 彌五郎左近

永正七年九月十六日、任貞俊讓與旨、可相談之由、有興元公御判、同日以御書被賀家督、賜太刀一腰、

前關白近衛尙通、連歌師肖柏ヲ招キ、源氏物語ヲ講ゼシム、

〔後法成寺尙通公記〕

四 九月十六日、己晴、小雨洒、

永正七年九月十六日

八七一



永正七年九月十六日

八七二

今日源氏物語講尺（兼書）源氏物語講尺宵柏（兼書）丁聞飛鳥井少將（兼書）細川彌九郎等來講尺終有三獻之

義京兆從母義三荷三種被送之

十八日未晴今朝有講尺前藤中納言勸修寺細川彌九郎同三郎等來

廿日酉晴今朝有源氏講尺前藤中納言勸修寺飛鳥井少將細川彌九郎伊勢下總守丸等來吉阿彌來

廿二日亥晴時々雨下風吹午刻有源氏講尺飛鳥井少將細川伊豆入道同彌

九郎伊勢下總丸玄清等來勸一盞

廿三日丙子有講尺

廿四日丁丑有講尺

廿六日己卯晴有講尺

廿七日庚辰晴有講尺

廿九日壬午有講尺晴

十月一日甲申朝間小雨洒晴有講尺前藤中納言勸修寺飛鳥井少將万里小路

辨理覺院細川伊豆入道上野遠江守仁木式部少輔入道杉原伊賀守泉州將

監宮丸澤宗長竹田法眼吉祥坊奈良修理大田藏人富田入道井上又五郎進

藤信濃入道

六日己丑晴有講尺人衆如例心中念誦如例

宵柏師弟子玄清招請朝飯各來

七日庚寅晴有講尺

八日辛卯及晚小雨下晴有講尺

九日壬辰朝間小雨下晴有講尺（飛鳥井中納言上洛以後始來一荷兩種召宵柏勸一盞濟首座來勸一盞）

十日癸巳晴晝時分地動有講尺

十二日乙未雨下有講尺勸修寺飛鳥井万里小路理覺院以下武邊者如每度

十三日丙申晴小雨濺有講尺（相模法眼備後等來令對面給一盞）

十四日丁酉晴有講尺

十五日戊戌晴有講尺德女中久我女中宵柏入夜來數刻令雜談

十六日己亥晴日待也（也）有講尺晝也各給一盞沙汰一盞土器物二前五荷進上之

頗及大飲人數之事細川伊登入道伊勢下總守宗長千秋將監西郡兵部少輔

宮備中守杉原伊賀守澤丸竹田法眼等也

十九日壬寅晴有講尺宵柏玄清石文等召朝飯

永正七年九月十六日

八七三



永正七年九月十六日

八七四

荻野宗歡

廿一日、甲辰晴、有講尺、  
 廿五日、戊申夜來雨下、從午刻晴、有講尺、  
 廿六日、己酉陰、七時分雨降、有講尺、  
 廿九日、壬子晴、有講尺、  
 十一月一日、癸丑晴、有講尺、宵柏宗碩、石文等召朝飯、  
 二日、甲寅晴、有講尺、  
 三日、乙卯朝間雨下、從午刻晴、有講尺、  
 四日、丙辰晴、及晚雨下、有講尺、飛鳥井來、種々令雜談、今夜荻野宗歡持參之間、宵柏宗碩、石文等召寄、勸一盞也、  
 五日、丁巳晴、有講尺、今朝各勸一盞、頗及大飲、昨夕若概(概カ)食籠、密柑一、燒笸鉢一二、荷、太田藏人折二合二荷、宗碩土器物一、荷進上之間給之、  
 六日、戊午晴、有講尺、心中念誦如例、  
 七日、己未時々雨下、有講尺、  
 八日、庚申晴、有講尺、  
 十二日、甲子晴、今朝冷泉少將上洛以後始來、令對面、有講尺、年內無餘日之間、先

一續一折  
興行

權卷二至  
ル

伊勢貞仍  
ノ歌

損耗アリ  
ト稱ス

今日マテ、講尺相殘分來春ト相約有一續并一折興、及大飲、各沉醉以外事也、  
 一續詠上了、奉公衆京兆衆等有之、

〔實隆公記〕

四十

十一月十五日、丁卯、晴、

略

中

陽明源氏講尺、今日終功、至權

卷云々、

〔下總集〕夏歌

永正七年霜月、前關白左大臣近衛家夢庵、肖柏源氏物語の講尺せられたる次、人々に御題を給て、歌佐かう万つりしに、朝更衣、  
 さゝ包けしあさけのさけのちりへて春ふわゆる、袖を露々た

十七日、庚午幕府、山城遍照心院領西八條ノ名主百姓等ノ、年貢ヲ減納スルヲ停ム、

〔東京帝國大學所藏文書〕

遍照心院  
文書十一

遍昭(顯)心院雜掌申寺領西八條田地年貢事、年々藍(藍)熱瓜等乍作之、無謂乞執損亡、令減少納所云々、猛惡之至太不可然、所詮於向後、構自由儀者、速可被處罪科、若又有子細者、可明申之由候也、仍狀如件、

永正七年九月十七日

信祐(顯)(花押)

永正七年九月十七日

八七五



永正七年九月十七日

八七六

當所名主百姓中

(散尾)之秀(花押)

幕府、大神宮祭主藤波伊忠ヲシテ、同宮祭主職、内造宮使及ビ御師職ヲ安堵セシム、

〔室町殿御教書并奉行奉書〕

○岩崎文庫所藏

太神宮祭主職内造□使并御師職事

權少副宣蔭(大中臣)權少副持直等三□或被支申之、或被訴申之條、旁被遂糺決、

各被訪意見之爰於壽詞奏神祕者、非分別所覃之段言上之、至自餘之儀□見

于意見狀歟、而如宣蔭解狀者、兩家相分後、隆世(當世)以來之神祕未口傳、曾彼壽詞

奏不勤仕之旨差申之間、被尋仰一條殿次官外記輩之處、當流定世卿(當世)已來大

嘗會壽詞奏度々例、慥被注進之上者、不能是非者也、然者任御判已下證文、被

返付訖、但内造宮使御執奏于細在之御師領諸國所々目錄在如元全領知、可被抽長日御祈

禱懇□□所被仰下也、仍執達如件、

永正七年九月十七日

(松田長秀)前丹後守(花押)

左□□(花押)

大中臣宣蔭等ノ訴訟

幕府祭主壽詞奏ヲ實隆ニ問フ

祭主三位殿(藤波伊忠)

(齋藤基雄)美濃守(花押)

〔實隆公記〕

四十九月三日、丙辰、晴、

早朝地震、時(小堀)元宿禰(稱小路)師象朝臣等來、祭主壽詞奏事、爲武家有御尋事其間事不

審之事談之、愚存分演說之、

四日、丁巳、晴、

招六條前相公勸一盞、師象朝臣來會、壽詞奏事有談旨、宣賢朝臣來、談同事、

二十三日、(丙)幕府、舊二仍り、攝津守護代藥師寺長忠ヲシテ、攝津多田院領

同國多田莊七郷及ビ加納分米谷村等二、御即位段錢ヲ課スルヲ停メシム、

〔多田院文書〕

五○攝津

多田院領攝津國多田庄七郷并加納分米谷村、山本村、小戸村等御即位段錢事、先々爲免除之地條、可被止催促之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正七年九月廿三日

(附錄)諏訪信濃守長俊(花押)

(附錄)齋藤美濃守基雄(花押)

永正七年九月二十三日

八七七



永正七年九月二十三日

八七八

守護代

(辭)松田左衛門大夫  
長秀(花押)  
(附)攝津守中原  
政親(花押)

多田院領攝津國多田庄七郷并加納分米谷村、山本村、小戸村等御即位段錢事、先々爲免除之地條、被止守護催促之上者、早可致沙汰彼代、更不可有難澁之由、所被仰出之狀如件、

永正七年九月廿三日

長俊(花押)  
基雄(花押)  
長秀(花押)  
政親(花押)

當所名主沙汰人中

段錢ヲ造  
替料トシ  
テ寄附ス

攝津國多田庄七郷并加納分米谷村、山本村、小戸村當院領等御即位段錢事、任每度之例、被寄附造榮料訖、宜被存知之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正七年十月十一日

散位(花押)  
美濃守(花押)  
前丹後守(花押)  
攝津守(花押)

多田院雜掌

○義尹、多田院ニ、同院領ヲ安堵セシムルコト、十一月十二日ノ條ニ見

二十七日、庚辰九條尙經、興福寺一乘院良譽ヲ、維摩會講師ト爲ス、

〔後法成寺尙通公記〕

四 九月廿九日、壬午晴○中

甘露寺長者宣送之、

被長者宣稱、少僧都良譽可爲去應永廿二年分維摩會講師之由、宜遣仰者、長者宣如此悉之謹狀、

永正七年九月廿七日

左少辨伊長

謹々上 興福寺別當僧正御房  
ウハカキ此分也、有禮紙也、  
謹々上興福寺別當僧正御房左少辨伊長

永正七年九月二十七日

八七九

長者宣  
應永二十  
二年分



永正七年九月二十七日

別當修南院也、去延德度之正文上之間、則遣之、件宣此分也、  
被長者宣稱、權少僧都光俊可爲去應永十九年分維摩會講師之由、宜遣仰者、  
長者宣如此、悉之謹狀、

延德二年六月三日

左少辨宣秀

進上 興福寺別當大僧正御房 政所

大乘院別當之時也、然間政所之二字加之云々、

從儀師ニ長者宣ヲナサレ候ヘハ、其下ミナ注記ニ申付云々、今度者直ニ注記ニナサル、由注進、先規如何、猶可尋之、彼役先年從儀師、與注記相論云々、

〔參考〕

〔興福寺別當次第〕

三 權僧正光慶廣橋大納言綱光 自明應九庚申至永

正八辛未、十二ヶ年執行、依維摩會武家亂入等之儀、不被施行、仍權官令闕如之間、未補次座也、

幕府、山城松尾社前社務東相冬等ノ、同社領ヲ違亂スルヲ停ム、

〔東文書〕

〇山城

松尾社々務并正祝職等事、依有不儀義子細被改易之處、前社務相冬、就神用號

不義ニ依  
リ正祝職  
及ビ社務

ヲ改易ス  
前司ノ負  
債ハ後任  
メニ負ハシ  
メズ

有借錢、職田及違亂之條、太不可然、縱雖事實、前司負累不懸、後任之段、先例之上者、早退其妨、可專神用之旨、對當社務相鄉被成御下知訖、宜被存知之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正七  
九月廿七日

貞運(松尾)花押

英致(松尾)花押

谷諸本所中

〔松尾神社文書〕

〇山城

松尾社々務相鄉申當社々務職并社領田地等事、任繪旨、被成公方御下知於相鄉之處、號有前社務相冬父子之借書ニ、齋藤兵衛大夫以私之折紙、押置當所務條、言語道斷之次第也、所詮任公方御下知之旨、被退違亂之族上者、令存知其旨、於自然之儀者、可被合力當社務相鄉之由候也、仍執達如件、

永正七  
十月十九日

秀兼(松尾)花押

當社近所

諸侍中

○松尾社神主相鄉ヲシテ、日供神事ヲ沙汰セシメラル、コト、九年十

永正七年九月二十七日

齋藤兵衛  
大夫私ニ  
所務ヲ押



永正七年九月二十七日

月十三日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔東文書〕

○山城 東系圖

相冬

補三宮禰宜、同正祝、同神主、先官辭職、又補正祝、文明十八年 再補神主、

相郷

補神主、敍從四位下、神主解職、永正七年九月十三日還補神主、

○左ノ文書、年代詳ナラザレドモ、相郷ノ松尾社神主職補任ノコトニ  
カ、ルヲ以テ、便宜茲ニ附收ス、

〔松尾神社文書〕

○山城

當社神主職事、對相郷、被成下給旨并御下知訖、萬一神人等有緩怠者、彼相郷  
於可令合力候、可被成其心得候也、恐々謹言、

十月十七日

松尾一社中

内藤 國貞(花押)

内藤國貞  
書狀

松尾社神主職事、對相郷、被成下給旨并御下知訖、萬一神人等致緩怠者、彼相郷  
於可令合力候、可被成其心得候、恐々謹言、

十月十七日

山田沙汰人中

谷諸本所代官中

内藤 國貞(花押)

松尾社神主職事、對相郷、被成下給旨并御下知訖、萬一神人等致緩怠者、彼相郷  
於可令合力候、各被成其心得有用意、一左右可被相待候、恐々謹言、

十月十七日

西岡 與力衆御中

内藤 國貞(花押)

松尾社神主職事、對相郷、被成下給旨并御下知訖、萬一神人等致緩怠者、彼相郷  
於可令合力候、被成其心得、急度有用意、一左右可被相待候也、恐々謹言、

十月十七日

中路修理亮殿

内藤 國貞(花押)

永正七年九月二十七日



永正七年九月二十八日

中路七郎五郎殿

中路次郎殿

二十八日、巳辛後土御門天皇聖忌、御法會ヲ、山城般舟三昧院ニ修セラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

乙三十二  
康親卿記別記

來廿八日、奉爲後土御門院聖忌、於般舟三昧院可有御經供養、御導師可令參  
勲給者、依天氣執啓如件、

九月五日

謹上 尊勝院僧正御房

左中將康親

三條西公  
條ヲ參仕  
ルセシメラ

來廿八日、於般舟三昧院、可有御經供養、可令參仕給者、依天氣執啓如件、

九月五日

謹上 三條宰相中將殿

左中將康親

飛鳥井賴  
孝ヲ御布  
施取トセ  
ラル

來廿八日、於般舟三昧院、可有御經供養、御布施取可令參勲給者、依天氣執達  
如件、

九月五日

謹上 飛鳥井少將殿

左中將康親

高辻章長  
ヲシテ御  
願文ヲ草  
ルセシメラ

來廿八日、奉爲後土御門院聖忌、於般舟三昧院、可有御經供養、御願文可令草  
進給者、依天氣執啓如件、

九月五日

謹上 新宰相殿

左中將康親

追啓  
同諷誦文可令存知給候也、

光什請文

來廿八日、奉爲後土御門院聖忌、於般舟三昧院、可被行御經供養、御導師可令  
參勲之由、被仰下候訖、可存知之狀、謹所請如件、

九月五日

追申  
題名僧一口可令伴參之由、被仰下候、同令得其意候也、

權僧正光什 請文

公條請文

三條宰相中將請文云、  
來廿八日、於般舟三昧院、可有御經供養、可令參仕之狀、所請如件、

永正七年九月二十八日

八八五

八八四



永正七年九月二十八日

九月六日

上書同前  
右中將公條(三條西)請文○康親卿貫首  
拜賀次第  
異事ナシ

八八六

〔實隆公記〕

四十 九月廿八日、辛巳、天晴、

早朝相公羽林參城南般舟三昧院、衣冠藤圓薄色、指貫(上綱、尤可、下結、事也、)冷泉宰相來、  
合刷衣文乘輿、雜色一人、(於城南著、狩衣云々、)青侍兩三、御經供養、御導師光什僧正、

題名僧一口云々、御導師前被物兩度取之、著座公卿相公一人云々、御布施取  
殿上人隆康朝臣、六位藏人源諸仲(五辻)極薦、出納、

預所參仕云々、次第如例云々、

御願文章長卿草進、清書行季朝臣、御經供養了、大光明寺以下所々歷覽云々、  
夕陽歸京直參內、今日儀等申入退出之由語之、

〔願文集〕

五 後土御門院

夫太平元無象、四時行百物成、至政猶以新、五義正三統起、衆攸仰止德也、偶然  
者乎、伏惟、先皇陛下、文思垂風、叡哲蓋世、天顏日角、万姓久戴照臨、淵合雷同、九  
夷競唱聖化、上有堯下有禹、儉讓無私、右爲褒左爲函、宇內式泰、鼓吹墳典、且嘆  
禮樂之興、篋笥于將、時笑倡優之拙、制規有存者、禎祥無應哉、加旃八音、克調媯

御願文

著座公卿  
三條西公  
條  
御布施取  
驚尾隆康  
出納五辻  
諸仲

清書世尊  
寺行季

簧龍吟魚躍、六義更回周頌、鬼泣神驚、吁嗟曾不得望幸、一世餘阿房宮、遂今纔  
記上壽五十九、集靈臺空、蘿洞月椒坊春、忽乖金闕宴、平湖雲長陵雨、徒供瓊戶  
愁、爰眇身叨列丹辰之高班、偏恐素庸之登達、寤寐思佐、渭濱豈遺太公、羽翼不  
成、商山欲徵四老、內省猶耻慈訓之淺、每祭仰訴追慕之深、因茲奉供養釋迦如  
來尊像一幅、奉摺寫妙法蓮華經一部八卷、并開結心阿等經各一卷、迺命權僧  
正法印大和尚位光什、爲唱導師、材之杞梓宗之模楷、法如月、論如花、從古希有、  
定是雲惠是雨、於今爲尊、實稱一時美談、况爲百衲師表、觀夫蒼松枝偃、風傳夕  
梵之聲、紅樹葉翻、霜埋古砌之跡、遙記前朝故事、彌感卽日愁懷、然則尊靈速開  
正覺之門、轉法輪於不退、直登菩提之岸、渡慈航於多生、乃至有情非情、自界他  
界、回向不貳、得益無邊、敬白、

永正七年九月 日

敬白

請諷誦事

三寶衆僧御布施

永正七年九月二十八日

八八七

諷誦文



右先皇聖靈晏駕期既來更起逝者之嘆追福年猶淺未盡悲哉之詞方今讚玉  
偈貫花之文祈金臺極種之品泗濱之逸韻恭驚鵝玉高聽淮槎之寶熏遍遶  
座智見乃至妄境成就佛心仍諷誦所修如件敬白

永正七年九月 日

草 章長

前關白近衛尙通ノ子道增聖護院道興ノ附弟ト爲リ是日入室ス、

〔後法成寺尙通公記〕四 六月十九日卯雨下心中念誦如例作善之儀如形

付本滿寺聖門附弟事以狀

廿日甲辰晴入夜小雨下從阿野許昨夕被披露之處

八月廿三日丁未晴備後來聖門禮之事也

廿四日戊申晴中上乘院來令對面勸一盞聖門御禮事內々申入處廿八日ニ

可申之由以阿野被仰出

廿八日壬子晴以上乘院聖護院御禮於被申大樹有對面云々上乘院ニ勸一盞

九月廿八日辛巳晴今日聖門御入門入下衆以下爲禮來華臺院僧正上乘院僧正

若王子法印坊官中大路坊菊坊今辻坊端坊榎坊藤坊藏務坊岩坊伊勢法眼伊豫

法眼介備中駿河備後了阿彌福阿彌理覺院僧都不具間今朝來余ニ馬代五  
百疋小童ニ杉原十帖段子二端北方ニ杉原十帖綿二屯御乳母ニ百疋長泰  
朝臣ニ竹布一端送之一獻次第 ムツカシキ間以折土器物勸一盞盃三マイ  
ル也時宜快然也

〔近衛家譜〕

房嗣

政家

道興法務大僧正

尙通

植家

道增大僧正

○十一月二日三條西實隆ノ子桂陽喝食得度スルコト便宜左ニ合敘  
ス

〔實隆公記〕

二十 文龜二年七月三日癸酉天晴中向大慈庵了庵和尚則

對面中

永正七年九月二十八日

八八九



實隆息

永正七年九月二十八日

八九〇

有一盞、愚息桂陽喝食等對面、

〔實隆公記〕

四十 永正七年十月十四日、丁酉晴、氷始結、略中

今日喝食（桂陽）新衣等令載之、

廿二日、乙巳、晴、

桂陽喝食早朝詣御靈、北野等社、午後參曇（文珠）花院殿、向大內左京大夫許、各樽等

携之云々、入夜歸了、

廿三日、丙午、晴、略中

桂陽參禁裏、令進沈、賜天盃云々、同參（邦高親王）伏見殿、

廿七日、庚戌、晴、略中

桂陽喝食參室町殿、御對面御雜談云々、參入江殿、茶碗一合進上之、

廿八日、辛亥、晴、略中

喝食齋後歸大慈庵、今日寺中請暇、來月二日可落飾也、

十一月一日、癸丑、天晴、月朔幸甚、行水念誦如例、

自東福寺才藏主（衛藏主房）來、明日桂陽得度事必定、巡堂并侍者轉位可爲同日云々、山中諸老可有短冊云々、條々委細謁談之、勸一盞了、

東福寺不  
二軒ニテ  
得度ス

二日、甲寅、天晴、

桂陽喝食（七歲）今朝於不二軒落髮、則巡堂、立侍者於不二軒有齋、午時於堆

雲軒諸尊宿會合、有短冊云々、二荷兩種送遣之了、今日每事無爲千秋萬歲、可

遂東福寺禪之入院嘉瑞、珍重至祝々々、

四日、丙辰、霽、

早朝遣輿丁以下於東福寺、

杉原十帖、香合一（唐）百五十疋計物、相阿付代、遣不二軒、相副消息、謝陽侍者得度

自愛之由了、

〔實隆公記〕

〇永正七年十一月四日、裏文書

一昨詣閣下、對顏延刻、剩野吟、汗却高聽候、恐懼之至、万々爲難盡也、尊使歸院

涓取吉辰、就土僧之列、叢社光輝、家門彌御繁榮、瞻々仰々、至祝至禱、戒師之事、

門中老宿星列、不可及、愚老必書入候、以後以參拜可伸心緒候者也、恐惶頓首、

小春廿八日

守懌（花押）

拜答

聽雪相公台閣下

永正七年九月二十八日

八九一

守懌書狀



永正七年九月三十日

〔實隆公記〕

十〇永正七年八月十九日裏文書

船主和尚尊體無恙由皆々申傳候、千万目出

大

慈差使僧被下候、御喝食早々御上洛、先々御得度候て目出存候、さ様之事山中老僧衆

御書にも 御申 要候、無爲御

狀候、一山大慶 必以參拜可申入候、恐惶敬白、

仲秋三

守擇(花押)

拜進

三條西

閣下

守擇

〔翰林葫蘆集〕

十三

大明皇華了菴大禪師有鐘愛子、諱曰陽、余嘗字之曰鳳崗、今年趨京得度于惠日、畢事即回禪師以一偈示之、兼見及余謹次韻致

其賀、且祝來春朝貢事、

海角船居望日昇、本朝貴族姓其藤、奉天殿上從師處、可道來儀鳳有僧、日

下野釋周麟、桂陽僧桂悟、從ヒテ、明ニ赴カン、

三十日、癸未、盡和漢聯句御會、

〔實隆公記〕

四十一 九月卅日、癸未、雨降、及晚晴、

禁裏和漢御會也、於小御所有此事、中務卿宮、宗山下官、甘露寺中納言、兵部卿、

桂陽字ハ、鳳崗、桂悟ノ附弟下爲ル

小御所ニテ行ハル人祇候

々々 執筆高辻章長

御製

姉小路宰相、新宰相、執筆、宰相中將季綱朝臣、爲學朝臣、肖柏等也、三折了有御

小漬、其後則有小盃酌、一巡、入夜終百句功退出、甘黄肖柏等被宿此亭、

御製 神無月時雨も々ふの秋もかし

有春霜紫紅、下官、

永正七年九月三十日

八九三

八九二



永正七年十月一日 二日

十月甲申朔

一日、甲申越後守護上杉定實、神餘昌綱ノ功ヲ賞シ、同國大積保ヲ知行セシム、

〔泉涌寺文書〕

○二山城

山東郡内大積保寺社共判門田清、左衛門尉分事、爲忠賞、去一日被成細判候、任其旨、御知行不可有相違候、仍如件、

永正七年 拾月十日

(長尾)爲景(花押)

神餘越前(昌綱)殿

二日、乙酉三條西實隆、史記ヲ書寫ス、

〔實隆公記〕

○四十

九月廿二日、乙亥、天晴、風吹、

史紀十二本紀大有和尚被借送之、

十月二日、乙酉、晴、入夜雨、

史紀五帝本紀今日立筆、

十七日、庚子、陰、雨濺、

(尊德)眞光院僧正來談、遊仙窟本被持來、五帝本紀終書功、

判門田清  
左衛門尉

五帝本紀  
立筆

五帝本紀  
終功

〔史記〕

○第一 五帝  
宮内省圖書寮本

永正七十月二日立筆、同十七日終功、實隆ノ自筆ニカ、ル

〔實隆公記〕

○四十

永正八年三月三日、癸丑、天晴、略中

今日史記般本紀終功、周本紀立筆、

十二日、壬戌、晴、略中

史記周本紀七丁書之、

十三日、癸亥、晴、入夜雨降、略中

史記周本紀終功、

十四日、甲子、雨降、午後霽、

史記秦本紀立筆、

十六日、丙寅、晴、月蝕、略中

終、百書、史記、

廿一日、辛未、晴、略中

今日史記秦本紀終功、始皇本紀一枝立筆、

四月四日、甲申、霽、略中

永正七年十月二日

般本紀終  
功本紀立  
筆

周本紀終  
功

秦本紀立  
筆

秦本紀終  
功  
始皇本紀  
立筆



永正七年十月二日

八九六

終日始皇本紀書之、無事、

十日、庚寅、雨降、○中

史記始皇本紀今日聊書之、自去六日以來、恩々沈醉等拋筆、踈懶也、

五月六日、乙卯、霽、○中

今日史記項羽本紀終書功、則漢紀立筆、

七日、丙辰、晴、

月舟（寄桂）和尚來談、○中史記新寫令見之、頗被感嘆、數剋言談有興、

六月十二日、庚寅、雨降、及晚晴、入夜雷鳴、○中

今日史記高祖紀終書功、呂后紀立筆、

廿二日、庚子、雨濺、○中

史記文帝紀今日終書功、

廿七日、乙巳、宿雨已刻晴、

史記景帝紀終功、武帝紀立筆、

〔實隆公記〕

四十五七月五日、癸丑、○中

史記十二本紀漢武帝紀今日終書寫功、自愛々々

項羽本紀  
漢紀立筆

新寫ノ史  
記ヲ書桂  
ニ示ス

高祖本紀  
終功  
呂后本紀  
立筆

孝文本紀  
終功

孝景本紀  
終功  
孝武本紀  
立筆

十二本紀  
終功







五帝本紀第一

史記一



凡是徐氏義稱徐姓名以  
 解并集衆家義。其故曰本紀又  
 其事而記之故曰本紀又  
 帝王書稱紀者古為後代  
 正義。又冲虛謂之德紀天地在  
 帝按太史公依世本大戴禮以黃帝  
 唐堯虞舜為五帝兼周禮宋均皆同而孔安  
 尚書序皇甫謐帝王世紀亦氏注世本並以  
 伏羲神農黃帝為三皇。又高辛唐虞為  
 五帝。兼稱之史曰云天子稱本紀諸侯曰世家  
 本者繫其本系故曰本紀者理也。統理衆事繫  
 之。年月名之曰紀。策者次序之目。一者舉數之  
 由。故曰五帝本紀第一。又曰禮曰動則左史  
 書之言則右史書之。正義云左陽故記動右陰  
 故記言言為尚書事為春秋按春秋時置左右  
 史故云  
 史記也

這史記本紀如補史記九冊去冬以來凌老眼條惡筆使

諫議羽林郎公條卿摸點了所謂舊本者紀傳朱點也  
 而今為令易讀劬江湖之新樣用朱墨一點蓋非  
 不存固實於其點者無毫釐之差後昆可知而已

永正辛未孟秋上旬

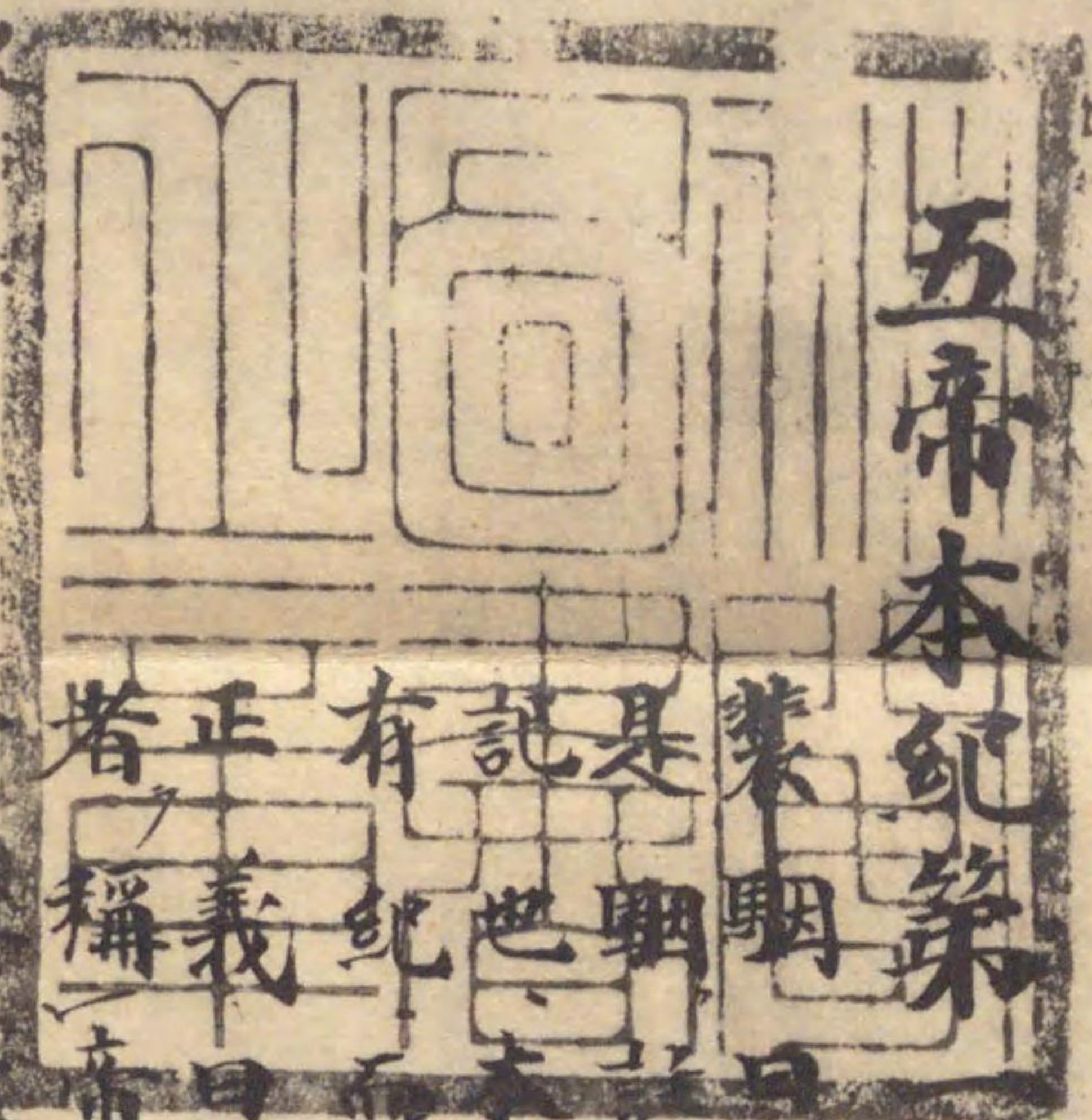
槐陰遜虛子

〔史記〕第十之十二 宮內省圖書寮本 景帝武帝  
 永正八年七月五日終書功矣 實隆ノ自



五帝本紀第

史記一



凡是徐氏義稱徐姓名以  
 解并集衆家義。司馬貞  
 是也。其事而記之故曰本紀又  
 有紀也。鄭玄注中候勅省圖云德合五帝坐星  
 正義曰鄭玄注中候勅省圖云德合五帝坐星  
 者稱帝又坤靈圖云德配天地在正不在私曰  
 帝按太史公依世本伏羲禮以黃帝顓頊帝學  
 唐堯虞舜為五帝。誰周應劭宋均皆同而孔安  
 國尚書序皇甫謐帝王世紀孫氏注世本並以  
 伏羲神農黃帝為三皇少昊顓頊高辛唐虞為  
 五帝。裴松之史目云天子稱本紀諸侯曰世家  
 本者繫其本系故曰本紀者理也。統理衆事繫  
 之年月名之曰紀。第者次序之目。一者舉數之  
 由。故曰五帝本紀第一。又曰禮曰動則左史  
 書之。言則右史書之。正義云左陽故記動右陰  
 故記言。言為尚書事。為春秋按春秋時置左右  
 史。故云  
 史記也

這史記本紀

加補史記  
九冊

去冬以來凌老眼添惡筆使

諫議羽林郎公條卿換點了所謂舊本者紀傳朱點也

而今為令易讀恸江湖之新樣用朱墨一點蓋非

不存固實於其點者無毫釐之差後昆可知而已

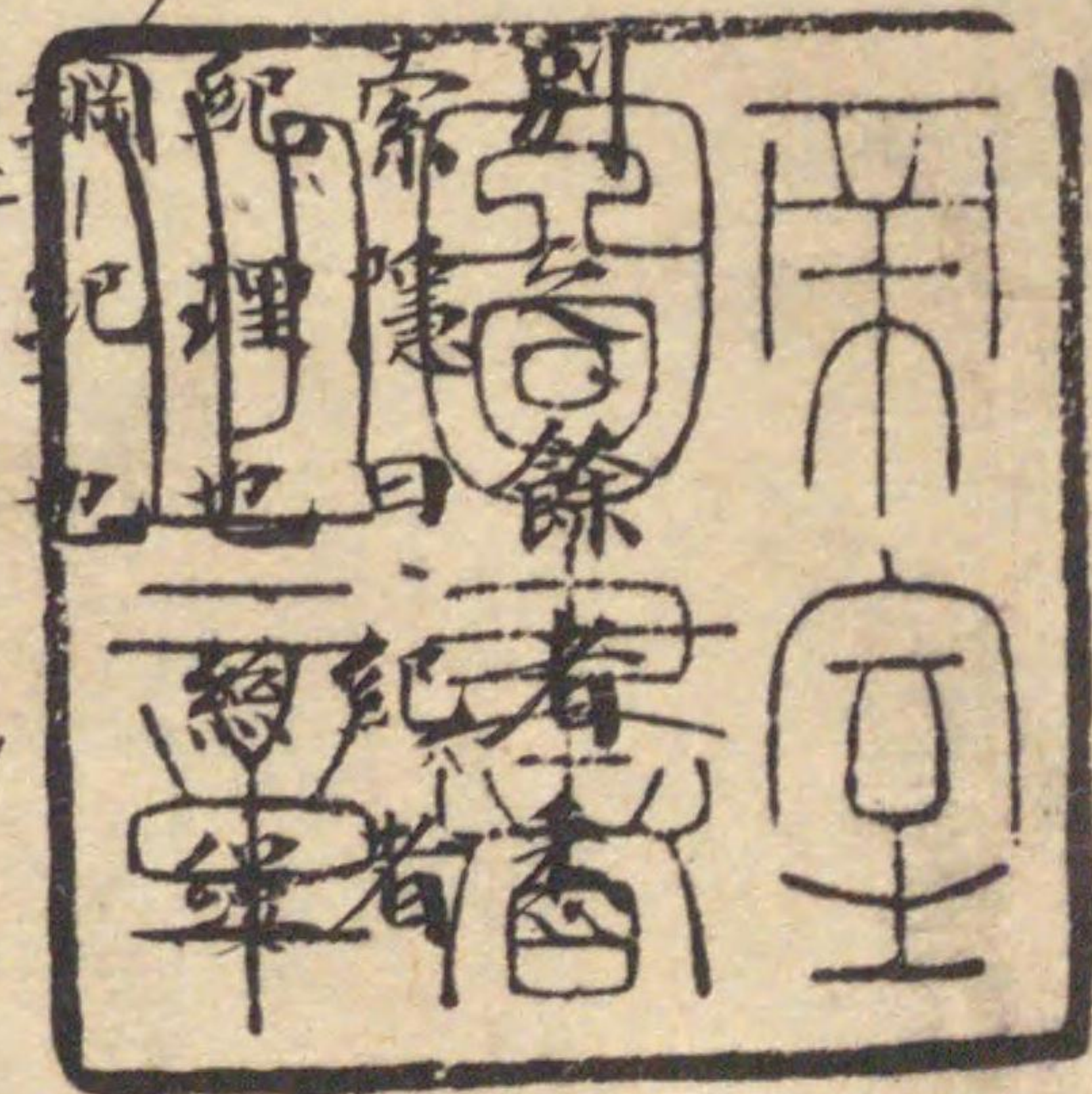
永正辛未孟秋上旬

槐陰逸虛子



五帝本紀第

史記一



凡 是 徐 氏 義 稱 徐 姓 名 以  
 解 并 集 衆 家 義 司 馬 貞  
 是 也 其 事 而 記 之 故 曰 本 紀 又  
 有 紀 也 帝 王 書 稱 紀 者 言 爲 後 代  
 正 義 曰 鄭 玄 注 中 候 勅 省 圖 云 德 合 五 帝 生 星  
 帝 按 太 史 公 依 世 本 次 載 禮 以 黃 帝 顓 頊 帝 嚳  
 唐 堯 虞 舜 爲 五 帝 誰 周 應 劭 宋 均 皆 同 而 孔 安  
 國 尚 書 序 皇 南 謚 帝 王 世 紀 孫 氏 注 世 本 並 以  
 伏 犧 神 農 黃 帝 爲 三 皇 少 昊 顓 頊 高 辛 唐 虞 爲  
 五 帝 裴 松 之 史 目 云 天 子 稱 本 紀 諸 侯 曰 世 家  
 本 者 繫 其 本 系 故 曰 本 紀 者 理 也 統 理 衆 事 繫  
 之 年 月 名 之 曰 紀 第 一 者 次 序 之 目 一 者 舉 數 之  
 由 故 曰 五 帝 本 紀 第 一 又 曰 禮 曰 動 則 左 史  
 書 之 言 則 右 史 書 之 正 義 云 左 陽 故 記 動 右 陰  
 故 記 言 言 爲 尚 書 事 爲 春 秋 按 春 秋 時 置 左 右  
 史 故 云 史 記 也

這史記本紀

加補史記  
九冊

去冬以來凌老眼涿惡筆使

諫議羽林郎公條卿摸點了所謂舊本者紀傳朱點也

而今爲令易讀劬江湖之新樣用朱墨一點蓋非

不存固實於其點者無毫釐之差後昆可知而已

永正辛未孟秋上澣

槐陰遜虛子啓







四日、亥子御祝、幕府亥子祝、

〔實隆公記〕<sup>四十</sup>

十月四日、丁亥、晴、<sup>○中</sup>今夜御祝、相公羽林參内、

禁裏嚴重相公携之退出、私祝著儀如例、

五日、戊子、晴、

早朝室町殿昨夜嚴重自阿野持送之、

○十六日、亥子御祝ノコト及ビ十七日、幕府亥子祝ノコト、便宜左ニ合

敘ス、

〔實隆公記〕<sup>四十</sup>

十月十六日、己亥、晴、<sup>○中</sup>

御祝、相公參入、私祝著儀如形、

十七日、庚子、陰、雨、濺、<sup>○中</sup>武家嚴重今朝到來、

幕府、大外記押小路師象ノ請ニ依リ、佐野三郎左衛門尉ヲシテ、紺灰問屋商人等ノ、濫ニ掃部寮領紺灰課役ヲ賣買スルヲ停止セシム、

〔京都帝國大學所藏文書〕<sup>古文書纂</sup>

二十一

〔附錄〕  
當御代御下知

當御本所御申さへもんに、ふしくとされ候、  
三郎さへもんに、ふしくとされ候、

大外記師象朝臣申掃部寮領紺灰課役事、近年紺灰問屋商人等、背舊法、猥令商買云々、太無謂、所詮任先規、可再興之旨、被成奉書訖、早令存知之、相觸彼問屋中、嚴密可致其沙汰之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正七年十月四日

佐野三郎左衛門尉殿  
上野介 在判  
近江守 在判

佐野三郎左衛門尉殿

五日、<sup>戌</sup>幕府、丹波守護代某ヲシテ、山城松尾社領丹波小川神戸田ニ、御即位段錢ヲ課スルコトヲ停メシム、

〔東文書〕<sup>○三</sup>

山城

松尾社領丹波國小川神戸田<sup>號湯井村</sup>御即位段錢事、先々爲免除地之上者、可被

停止國催促之由候也、仍執達如件、

永正七  
十月五日

基雄(花押)  
長秀(花押)  
政親(花押)

守護代

永正七年十月五日

湯井村下  
號ス



永正七年十月十日

九〇〇

十日、巳前將軍足利義澄、大友親治、義長父子ニ書ヲ與ヘテ、京都ノ恢復ヲ謀ル、是日、復命ジテ九州ノ事ヲ圖ラシム、

〔大友文書〕

〇七 筑後

小笠原元宗書狀

備前守殿御報

元宗

小笠原刑部少輔

親治使者木上大炊助

預御札候、委曲拜見令申候、仍木上大炊助方爲御使上洛候、路次等之儀、無事參洛、誠以珍重候、然間御内書之御請、早々參著候、御感候、殊以五郎殿ヨリ熨斗付之御腰物、并花氈御鞍覆御進上候、遠路ニ申、一段神妙之由上意候、於國彌可被廻御計略事、可爲腰肝要之由被仰出候、就其被成御内書候、將又御武略之次第等、具大炊助方可被申候、次段子參端被上下候、毎々御懇切之儀、畏存候、爰元ニ不思議ニ山居候程、過御察計候、萬端大炊助方ニ可被申候之條、不能一二候、恐惶謹言、

十月二日

元宗(花押)

備前守殿御報

〔大友文書〕

〇六 筑後

(紙)

五郎殿御報

小笠原刑部少輔

元宗

預御札候、委曲拜見申候、仍木上大炊助方爲御使上洛候、路次等之儀、無事參著、誠以珍重候、然間御内書之御請、早々參著、御感候、殊以熨斗付之御腰物、并花氈御鞍覆御進上候、則致披露候處、遠路ニ申、一段神妙被思召候之由候、就其被成御内書、同御太刀一腰被差下候、從私心得可令申旨候、於國彌被廻御計略候段、可爲肝要候由上意候、將又御武略之儀等、具大炊助方可被申候條、不能一二候、恐惶謹言、

十月二日

元宗(花押)

五郎殿御報

〔大友文書〕

〇八 筑後

大友備前守御報

就可爲入洛、早速可致忠儀之由被仰處、不可有如在之由言上、欣悅候、連々別

永正七年十月十日

九〇一

義澄内書



永正七年十月十日

九〇二

而懇志之條、尤以神妙候、仍手遣事、澄元可向口、依遲々延引候、雖然堅加下知間、可相催候、彌迴武略、此時勵忠勤候者、可感悅候、併於九州之事、可依大功候條、憑被思食候、委曲猶元宗可申下候也。

十月十日

(花押)

大友備前守とのへ

〔大友五郎とのへ〕

就可爲入洛、早速可致忠節之由、被仰之處、可勵忠儀、由言上、感悅候、連々別而無如在之條、一段神妙候、然手遣事、澄元可向口、依遲々延引候、雖然堅加下知間、可相催候、彌迴武略、此時抽別忠候者、可爲快然候、併於九州之儀者、可依大功之條、憑被思食候、次刀一腰、金熨斗付花氈鞍覆到來、悅喜候、將亦太刀一振、吉房遣之候、猶元宗可申下候也。

十月十日

(花押)

大友五郎とのへ

〔大友文書〕

〇六

筑後

小笠原澄長書狀

小笠原又三郎

〔無紙〕

五郎殿 〇〇 人々御中

澄長

義長肥後筑後ヲ服ス

乍御報尊札誠以畏令存候、如尊意罷上候以後者、朝暮御床敷存候、尤細々雖可令啓上候、依遠路不得便宜候間、于今罷過候、於心中非疎略候、仍段子壹端、鏃十、國益上給候、毎々御懇切、一段畏存候、就中肥後、筑後之儀、早速被入御手候、千秋萬歲候、拙者迄も大慶不過之候、爰許御武略儀、具雖可申入候、委曲刑部少輔申入候間、不能其儀候、萬端期後信候、恐惶謹言、

〔永正八年〕  
卯月十日

澄長(花押)

五郎殿 〇〇 人々御中

小笠原岩増書狀

小笠原

〔無紙〕

五郎殿 參人々御中

岩増

猶々申入候、をし鳥一番、若子へ令進覽候、水こ入候へは、うね候、被入候て可被御覽候、

雖未令啓候、一筆申入候、仍去年木上大炊助方上洛之時、段子上被下候、毎々

永正七年十月十日

九〇三



永正七年十月十二日

九〇四

御懇之至、畏存候、兼又雖立御用候、御腰指一腰分令進覽候、尙以丸山左京亮可申上候、恐惶謹言、

卯月十四日

岩増

五郎殿 參人々御中

○義尹、細川高國等ヲシテ、義澄ヲ近江ニ擊タシメ、高國等敗ル、コト、二月十六日ノ條ニ、義澄、義長ヲ修理大夫ニ任ジ、忠節ヲ致サシムルコト、十一月十七日ノ條ニ見ユ、

十二日、乙前權中納言從二位高倉永繼薨ス、

〔實隆公記〕 十月十七日、庚子、陰、雨、濺、

深草ニ葬ル

藤中納言入道今朝葬禮深草云々、

廿四日、丁未、晴、入夜雨、行水、

弔藤中納言入道事、

官歴

〔公卿補任〕 非參議從三位藤永繼、應仁元年四月廿六日、敍從三位、父入道權中納言永豐卿、母、同二年四月十五日任參議、文明二年六月七日

敍正三位、同七年正月日服假母、同八年正月六日從二位准后御給、

上四十九、〇以同九年十二月卅日辭、未拜賀、五十、同十一年月日還任、同十二年

三月廿九日兼備前權守、三十、同十四年七月十八日任權中納言、同十七年六

月日辭、上四十九、〇以

〔諸家傳〕 八上 永繼 永豐卿 應永卅四年誕生、嘉吉二年正月日從五位下、

十六 寶德二年正月六日正五位下、康正二年正月五日從四位上、長祿二年二

月十三日正四位下、應仁元年四月廿六日從三位、同二年四月十五日參

議、四十四 文明二年六月七日正三位、四十四 同七年正月日喪母、同八年正月六日

從二位、五十 同九年十二月卅日辭、賀、未拜 同十一年月日還任、三十 同十二年三

月廿九日備前權守、同十四年七月十八日權中納言、六十 同年十二月十四日

直衣始、同十七年六月八日辭、同日敍 永正七年十月十二日薨、八十四歲、法名常祐

〔高倉家譜斷絶庶流譜〕

永豐

永繼 永豐男、從二位、前中納言、永正七年十月十二日薨、

永康

女子

永正七年十月十二日

九〇五

正二位ニ  
敘セラレ  
トノ説ル  
法名常祐

世系



永正七年十月十四日

九〇六

○永繼ヲ正二位ニ敍スルコト、明カナラズ、姑ク諸家傳ニ據リテ揭記  
ス、足利義尙、著到百首和歌ヲ興行シ、永繼等ヲシテ詠進セシムルコト、  
文明九年九月九日ノ條ニ、同義政、叡旨ヲ奉ジ、永繼ヲシテ、其弟永熙ノ  
遺跡相續人ヲ選バシムルコト、同十一年四月十三日ノ條ニ見ユ、

十四日、幕府、越後守護上杉定實ニ、修理替物要脚等ヲ徵ス、

〔上杉家文書〕

〔折封ハ卷〕

上相兵庫頭殿

伊勢守貞陸

修理替物要脚事、任先例、可被致其沙汰之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正七年十月十四日

〔齋藤基雄〕  
美濃守(花押)

〔伊勢貞陸〕  
伊勢守(花押)

〔藤原〕  
上杉兵庫頭殿

〔折封ハ卷〕

上相兵庫頭殿

美濃守基雄

治部四郎  
左衛門尉  
給物

治部四郎左衛門尉給物拾貫文事爲越後國役、任先例、致其沙汰、可被執進請  
取狀之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正七年十月十四日

美濃守(花押)

伊勢守(花押)

上杉兵庫頭殿

〔折封ハ卷〕

上杉兵庫頭殿

近江守貞運

小舍人等  
給物

小舍人等給物事、々書如此、早任先例、可被致其沙汰、由、所被仰下也、仍執達如  
件、

永正七年十月廿日

〔飯尾貞運〕  
近江守(花押)

〔齋藤時基〕  
上野介(花押)

上杉兵庫頭殿

永正八年  
院飯要脚

明春御院飯要脚事、任先例、可被致其沙汰之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正七年十月廿八日

美濃守(花押)

〔松田英教〕  
對馬守(花押)

上相兵庫頭殿

永正七年十月十四日

九〇七



永正七年十月十四日

九〇八

朝夕正宗  
衣料

(折封ウハ卷)  
上杉殿

美濃守基雄

朝夕新右衛門尉正宗衣料拾貫文事、任例爲越後國役、可被致其沙汰之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正七年十月廿八日

(附書)諏方左近大夫

散位(花押)

(附書)齋藤

美濃守(花押)

上杉殿

(給渡書)  
長授院

每年相定國役注文

越後國役  
注文  
采女養料

五貫文

采女養料

拾貫文

御境飯料

貳拾貫文

御修理替物

拾貫文

治部四郎左衛門尉給物

拾貫文

朝夕新右衛門衣料

五拾貫文

小舍人雜色等給物

以上百五貫文京著定

永正七年十一月十日

神餘越前守  
昌綱(花押)

長授院

義尹、大内義興ノ第二臨ム、

〔實隆公記〕

三四十 十月十四日、丁酉晴、氷始結、略中

大樹今日渡御義興朝臣宅云々、盡美之事云々、九時分還御云々、

十七日、庚子、陰、雨濺、略中

早朝遣書狀於大内許、賀先日渡御事、午後返事到來、

二十日、卯、幕府、政所議事ノ條規ヲ定ム、

〔建武以來追加〕

同條々 永正七十廿、

一 毎月十日、廿日、晦日、三ヶ度、會合之時刻

一 披露之次第可爲如先々事、

毎月三ヶ  
度會合  
披露ノ次  
第

永正七年十月二十日

九〇九



一箇條毎  
認メシム

著座後撰  
ニ退座ヲ  
許サズ  
披露ノ篇  
目ハ日限  
次第タル  
ベシ

勅諭ニ依  
ル

永正七年十月二十三日 二十七日

九一〇

一意見一ヶ條事切之時、被相定右筆、於當座被認草案、其以後可有披露自餘之儀事、

一披露之時、不可被相交別儀、至其事者、不及是非事、

一著座之時、於非公儀之事者、各不可被立座、

一披露之篇目、任先例、可爲日限次第事、

一意見終後、各一同可被退座事、但於御宿直者、各可被相談之、

○幕府三社及ビ四大寺以外ノ寺社方以下大工職ノ訴訟ヲ停メ、本所ヲシテ、之ヲ處斷セシムルコト、四月二十日ノ條ニ見ユ、

二十三日、丙午飛鳥井賴孝、小島時親ヲ禁中小番ニ候セシメラル、

〔實隆公記〕四十 十月廿日癸卯、陰入夜雨、略○中

賴孝小番事有仰旨、

廿三日、丙午晴、略○中

抑賴孝、時親被入小番之事、有勅定旨、

二十七日、庚戌圓滿院仁悟法親王ヲ、熊野三山檢校職ニ補ス、

〔圓滿院文書〕江〇近

繪旨

熊野三山檢校職事、圓滿院宮被宣下候、各可令存知者、天氣如此、悉之以狀、

永正七年十月廿七日

左少辨（花押）

園城寺衆徒中

〔實隆公記〕四十 十二月十四日、丙申晴、略○中

廣橋中納言來、圓滿院宮熊野三山檢校事、聖護院近代相續之體也、武家沙汰

之次第、被補圓滿院之條、卒爾聖斷由有之云々、此事、被相談之、愚意分述之、聖

護院襍褌之仁也、非沙汰之限乎、每事當時之儀、不可說沙汰也、

十五日、丁酉晴、寒風甚、

廣橋中納言來臨、昨日之儀也、愚意分又述之、不能委記之、

廿七日、己酉晴、略○中

相公當番參入、熊野三山檢校事、圓滿院、聖護院申狀可披見之、由被仰之、加一

見、聖護院申狀有若亡、言語道斷事也、

〔實隆公記〕四十 永正八年三月一日、辛亥天晴、

圓滿院西坊來、三山檢校間事申狀談之、愚存分申了、

四月廿日、庚子晴、風吹、有寒氣、略○中 圓滿院西坊來、熊野三山檢校事談之、

永正七年十月二十七日

九一一

聖護院ノ  
申狀ハ言  
語道斷

近代ハ聖  
護院相續  
ノ體ナリ  
幕府ノ沙  
汰ニ依ル  
實隆ノ意  
見



永正七年十月二十七日

九二二

廿二日壬寅陰及晚晴○中

圓滿院西坊來熊野三山檢校事今朝室町殿被進御下知云々條々此間種々之儀也無爲落居珍重由報之其次種々雜談小時又自御所以女房奉書同事被仰下尤珍重之由申入了則又以書狀賀申二位局了

入夜阿野相公來臨當番參仕云々(九條御邊)南陌邊事等談之

圓滿院聖護院兩方申狀之子細武命之趣等被談之□於公家每事申行之仁等在之由有橫風之趣語之推量之分尤非無恐怖世間人口非可杜佞人之在世頗難治者乎莫言々々

六月十四日壬辰霽○中

熊野三山檢校事圓滿院可致參賀之由諸山躰結構之處若王子於路次可遮之由支度近郷各相語之青蓮院吉田等同相觸云々言語道斷所行也此事内々爲勅定可被仰兩所由圓滿院被申之則内々可被仰也

〔實隆公記〕二〇永正八年四月十七日裏文書

ゑんまんゑん殿けんきう玄よくの事ふけの御下ちけさ申とて候又一日申候つる事を改さりあるさく候事にてこそ候へ如何の御□ 〆いら

仁悟法親王參賀ノ妨害

女房奉書

無異落著ス

せられ候事にて候御心やすく思ひ〆いらせられ候へく候よし玄あん候てうけ給候の御うれしく思ひ〆いらせ候し

されまでも申給へ〆いる

〔後法成寺尙通公記〕四 十二月廿三日巳晴從聖門彼公事儀昨日大樹へ

被申入云々内々廣橋へ入魂之由申送間遣長泰朝臣

二十九日壬午薩摩守護島津忠治同國龍嚴寺莊嚴寺及ビ大興寺門徒一味契約狀ニ證判ヲ加フ

〔薩藩舊記〕前集三十一 正文在大乘院

龍嚴寺坊津莊嚴寺伊集大興寺鹿兒門徒一味契約事

一莊嚴寺之開山者良範法印同二代號精範僧都爰龍嚴寺第五代之祖賴憲法印者精範之舍兄也依之良範賴憲堅令約諾俱成師資之契約兩師相互合法流相承給是偏以門徒一味之儀未來永々互法流可有扶助方便之契約也然賴憲高野御住山第三度目也之時精範依有高野參詣之立願之子細令同道登山立願成就之後下向根來寺宿坊寶持院令他界訖其終焉之砌莊

永正七年十月二十九日

九一三

莊嚴寺開山良範  
二代精範  
龍嚴寺賴憲  
良範賴憲  
師資ノ契  
約ヲ爲ス  
精範終焉  
二當リ莊  
嚴寺ヲ賴



憲ノ進退  
ニ委ス

伊集院衆  
徒莊嚴寺  
ヲ本寺ト  
仰グ可シ

諸法式ハ  
莊嚴寺ノ  
本堂ヲ會  
場ト定ム

大興寺

永正七年十月二十九日

九一四

嚴寺之事後々可爲賴憲法印之御進退之由以精範自筆書讓狀進上賴憲其狀今龍依之賴憲下向之後莊嚴寺之事數ヶ年令進退其後以彼寺令付屬覺盛法印從其已來于今彼弟之相續而無退轉任開山之本意守法流門葉繁昌

一伊集院衆徒中各以莊嚴寺可被仰本寺事夫諏訪原其外之者皆良範精範之爲弟子分在之所々獨住就立久之御代以彼方之被集諏訪原之一所令建立十二坊給畢去間皆以莊嚴寺之門流也於末代不可背此旨縱自他所雖有來住方以莊嚴寺可被仰本寺其故者入所隨所事是世門常掟也敢不可有異義門弟等堅守代々血脈相承之旨不可亂門徒法度

一伊集院衆徒中於傳法灌頂曼茶羅供御影供者如前々以莊嚴寺之本堂可定會場更於別所不可被構道場是偏崇祖跡爲令法流敬重也更非結界壇地之道場何輒儲法苑乎或構堂社或料理私宅開密壇事輕賤之義皆以法滅之因緣也努々堅可有禁制  
一大興寺者御屋形樣忠治(島津)之御代仁號大覺寺殿義昭大僧正之御菩提所建

開山賴政

立之伽藍也○忠治大興寺ヲ建立スルコト嘉吉元年三月十三日龍嚴寺坊津賴憲法印之時弟賴政之開山也然則於良範之御法流者良範賴憲賴政次第相承明鏡也依於彼三ヶ寺者後々末代御門徒一味之義堅可有門中法度之成敗若於違亂輩者顯密之法會俱以不可有會合仍三箇寺衆徒中同心追加掟如件

永正七年庚午十月廿九日

權大僧都法印賴政花押

一見候了花押(朱書)忠治

○忠治證判ヲ加フル日詳ナラズ今姑ク是日ニ係ク

永正七年十月二十九日

九一五



永正七年十一月一日 五日 八日

十一月大 癸丑 朔 盡

九一六

一日、癸丑御祝、

〔實隆公記〕

三條西公修 三十四 十一月一日、癸丑、天晴、月朔幸甚、行水念誦如例

三條西公修 相公羽林入夜參内、御祝如例云々、

五日、丁巳和泉守護細川元常、書ヲ和田左近將監ニ與ヘ、戰功ヲ勵マシム、

〔南禪寺〕南禪寺 眞乘院文書

○山城

（縣紙） 永正七年十一月五日

當國守護殿刑部大輔殿御書

和田左近將監殿

元常

長々堪忍、神妙候、今度之於出張者、涯分以馳走、此時之忠節可爲肝要候也、謹言、

十一月五日

（細川） 元常〔花押〕

和田左近將監殿

○元常、足利義澄ニ應ジ、兵ヲ阿波ニ起シテ、淡路ニ入ルコト、八年五月十二日、義澄、大友義長ヲシテ、大内義興ノ分國ヲ攻メシムル條ニ見ユ、八日、庚申山城通立寺文琳尼聖珠寂ス、

〔通立寺誌〕

通玄禪寺住持歷代

第十二世文琳聖珠禪師 永正七年庚午十一月八日示寂

○文琳、曇華院ヲ新造スルコト、六年十一月三日ノ條ニ見ユ、

九日、辛酉幕府、烏丸冬光ヲシテ、加賀若松莊領家職ヲ安堵セシム、

〔烏丸家文書〕

○侯爵中山 輔親氏所藏

加賀國若松庄領家職事、被帶御判當知行之處、以前西國祇候以來百姓年貢令沙汰云々、早可令全所務給之由被仰下也、仍執達如件、

永正七年十一月九日

（松田長宗） 散位〔花押〕

（諏訪信勝） 沙彌〔花押〕

（冬光） 烏丸家雜掌

十二日、甲子義尹、攝津多田院ヲシテ、同院本寺領等ヲ安堵セシム、

〔多田院文書〕

○五攝津

攝津國多田院本寺領并代々給主寄附田畠、山野等事、早任當知行之旨、寺家領掌不可有相違之狀如件、

永正七年十一月十二日

權大納言源朝臣〔花押〕

永正七年十一月九日 十二日

九一七



永正七年十一月十二日

(附箋)「惠林院義種」

(花押)

攝津國多田院本寺領并御寄進代々給主寄進所々、

一所 善源寺 東方地頭職左衛門尉跡

一所 鷹尾 惣社六所權現御燈油

一所 櫛作 上寺觀音堂免

一所 鎮守惣社六所權現免

一所 猪淵村 毎日佛性米

一所 原郷地頭給内五段 御塔佛修理料

一所 多田郷内 承仕給部方菰生名

一所 山原村 本堂以下修理料所

一所 石道村 新田方并平居彌九郎跡

一所 紫合 本田方談議料所

已上

右當寺領内犯過人等事、任先例、止給主亂入、可爲所々檢斷寺家沙汰之狀如件、

永正七年十一月 日

堂寺領目錄校合正文訖、

永正七年十一月十二日

(附箋)「細川高國」

右京大夫花押

○幕府攝津守護代藥師寺長忠ヲシテ、多田院領同國多田莊七郷及ビ加納分米谷村等ニ、御即位段錢ヲ催促スルヲ停メシムルコト、九月二十三日ノ條ニ見ユ、

十四日、丙寅幕府、山城十念寺住持宗音ニ、同寺敷地ヲ安堵セシム、

〔山城名勝志〕

二洛陽部一 十念寺 今在佛陀寺北

(附箋)「惠林院殿文書」

十念寺當敷地事、去文明年中夜盜時、文書合紛失云々、被聞食訖、任當知行之旨、領掌不可有相違、若文書有出帶之輩者、可有糺明之由所被仰下也、

永正七年十一月十四日

(附箋)「松田義政」  
對馬守判

左衛門尉判

當寺住持宗音坊

〔參考〕

永正七年十一月十四日

九一九

文書賊ニ  
盜マル



永正七年十一月十七日

九二〇

宗音

〔京都府寺志稿〕

九高僧 十念寺

第八世宗音

宗音俗姓内藤氏、加賀守貞澄

中興開山  
ト稱ス

ノ息、任持中、後柏原帝紫衣ノ繪旨ヲ賜フト雖、故アリテ辭ス、依テ重テ大和尚位ヲ賜フ、文龜三年十一月九日、伽藍ヲ再興シ、諸堂造營ヲナス、故ニ中興開山ト稱ス、大永五年三月廿一日、示寂葬地詳ナラス、

十七日、已前將軍足利義澄、豊後守護大友義長ヲ修理大夫ニ任ジ、忠節ヲ致サシム

〔大友文書〕

〇八 筑後

義澄内書

大友修理大夫とのへ

無官候之間、可任修理大夫候、隨而度々如被仰、於九州勵別忠候者、可爲本意候、猶巨細元宗可申候也、

十一月十七日

〔花押〕

大友修理大夫とのへ

〔大友文書〕

〇六 筑後

小笠原元  
宗書狀

五郎殿 參人々御中

小笠原刑部少輔  
元宗

態令啓上候、仍去年木上大炊助方爲御使被差上候、公儀一段御感之儀候、委曲御報令申候キ、於國早々被廻御武略、急度御忠節彌可爲肝要候由、從拙者

心得可申入之上意候、就中御無官之事候間、爲上意被寄思食、去十一月如此以御内書被任修理大夫殿候、誠御面目之至、目出度存候、然間去年中可下進候之處、御出張之事、去冬中仁可爲必定之由、從細河右京兆急度御注進共候

ツ、雖然諸口等之儀、依被相調候、于今遅々候、左様儀共相調爲可致注進、今迄雖罷過候、餘延引候間、先以丸山左京亮申入候、日中略全文ハ八年五月十二

ムル分國ヲ侵サシムル條ニ收ム、

卯月十四日

元宗〔花押〕

五郎殿 參人々御中

〔懸紙〕

五郎殿 參人々御中

小笠原又三郎  
澄長

一筆令啓上候、仍去年者木上大炊助方上洛附御、懇書殊、以北紺壹端被上下候、毎々御懇切之儀、難盡紙筆存候、委曲御報申入候キ、就中今度爲上意被寄

永正七年十一月十七日

九二一

小笠原澄  
長書狀



永正七年十一月十九日

九二二

思食、御官途之儀千秋万歳目出度存候、誠御面目之至候、兼又御袋壹、令進覽候、御用立候者可畏存候、次爰元御武（符力）之略之次第共、定而刑部少輔可申入候間、不及申候、若此方之儀相延候者、不圖罷下可申入候、尙丸山左京亮可申上候條、令省略候、恐惶謹言、

（永正八年）  
卯月廿三日

澄長（花押）

五郎殿參人々御中

○義澄、京都ノ恢復ヲ謀リ、旨ヲ義長竝ニ其父親治ニ傳フルコト、十月十日ノ條ニ、義長ヲシテ、大内義興ノ分國ヲ侵サシムルコト、八年五月十二日ノ條ニ見ユ、

十九日、辛未禁中田樂アリ、

〔實隆公記〕

四十 十一月十九日、辛未晴、略○中

今夕田樂事御沙汰云々、相公羽林參入、下官依所勞不參、

○十一月二十四日、田樂ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔實隆公記〕

四十 十一月廿四日、丙子、天晴、略○中

田樂事、嘉例申沙汰云々、仍相公羽林一桶兩種進上之、及晚參入、御盃十一獻、

二十四日

時宜快然々々、鐘動後退出、（那高親王）式部卿宮等御參云々、

二十日、壬申春日祭、

〔實隆公記〕

四十 十一月廿日、壬申晴、略○中

春日祭今日被付社家云々、早朝行水、書三十頌、

石見三隅興兼、益田宗兼ニ誓狀ヲ送リテ、互ニ援助スルコトヲ約ス、

〔益田家什書〕

二六

貴所様以御調法、福屋方致和與候、然者一家悉相調候、大慶此事候、貴所拙者事者、別而熊次郎丸契約申候之間、余之一家こゝ可相替候、自然御用之時者、自身可致奉公候、興兼所用之時者、被捨一家、他家可預御合力候、於我々も捨一家、他家可立御用候、公方様守護御用之時も、申合可抽忠節候、萬一如何之躰之儀被仰出候共、令相談可申披候、若右條々僞候者、天照皇大神宮、八幡大菩薩、石州大小神祇可罷蒙御罰候者也、仍起請文如件、

永正末年庚午十一月廿日

三隅藤五郎  
興兼判

益田治部少輔殿參

○左ノ文書ハ、何人ノモノナルカ明カナラザルニ依リ、便宜茲ニ附收

永正七年十一月二十日

九二三

興兼福屋  
氏下和興  
ス